

平城京左京三条六坊十一坪
奈良町遺跡（HJG9次）
—令和元年度発掘調査報告書—

2021

公益財団法人 元興寺文化財研究所

序

このたび、平城京左京三条六坊十一坪・奈良町遺跡の発掘調査報告書が完成いたしました。古代都市平城京は和銅3年（710）の遷都後、延暦3年（784）の長岡京遷都に伴う廃都を経て、平安時代には古代都市から中世都市へと変貌を遂げます。そして度重なる兵火を経験し、現在のならまちへと姿を変えてゆきます。

今回の発掘調査では古墳時代初期を嚆矢に、平安時代、鎌倉時代、室町時代、江戸時代のさまざまな遺構が見つかりました。特に古墳時代初期の溝は平城京遷都以前の人々の営みを示す貴重な遺構であり、文献史料のない時代の語り部です。また、平安時代後期の井戸は、当地が都市化してゆくまさに第一歩の歩みを示すものとして貴重な遺構でしょう。これら一つ一つを微視的な視野でみると、それぞれ何の変哲もない穴や溝に過ぎませんが、丁寧な調査と巨視的視野での分析を経ることで、上述のような奈良の歴史の生きた語り部として、饒舌に歴史を語り始めるのです。

昨今、世間の風潮は文化財を観光資源・文化資源として活用してゆくべし、という方向へ流れていると聞きます。もちろん、活用して初めてその価値が生きるのが文化財であることは間違いありません。しかし、文化財を生かすためには、地道な調査研究がまず必要であることも事実です。調査研究と活用、この二項は今後も両輪として調和してゆくことが望まれます。

最後になりましたが、今回の発掘調査に際して多大なるご協力をいただきました開発事業者様、調整・指導いただきました奈良県、奈良市教育委員会をはじめ、ご協力いただきました関係各位に深く感謝の意を表したいと思います。

令和3年3月31日

公益財団法人 元興寺文化財研究所
理事長 辻村泰善

例 言

1. 本書は平城京左京三条六坊十一坪・奈良町遺跡において、ホテル建設に先立ち実施した発掘調査（HIG9次）の成果をまとめたものである。
2. 調査地は奈良県奈良市高天町 46-1、46-2 に所在し、開発面積 891m²のうち調査対象面積は 200m²である。
3. 調査は吉川泰久、吉川稲穂、吉川えみ、吉川長伸より委託を受けた公益財団法人元興寺文化財研究所が行い、令和元年 5月 29 日～同年 7月 3 日を現地調査、同年 12月 27 日～令和 3 年 3 月 31 日を整理期間とした。
4. 発掘調査は佐藤亞聖（公益財団法人元興寺文化財研究所）が担当し、川奈 葵、小林まさみ、三井 淳（奈良大学）、溝上千穂（立命館大学大学院）が補佐した（所属は当時）。
5. 調査地の座標および基準点測量は、公益財団法人元興寺文化財研究所が実施し、株式会社文化財サービスが分担した。
6. 発掘調査における土工等土木部門は有限会社ワーカーが担当した。
7. 遺構写真撮影は佐藤が、遺物写真撮影は大久保治（公益財団法人元興寺文化財研究所）が撮影した。
8. 出土遺物の実測および清書は仲井光代、武田浩子、芝 幹、山本知佳（公益財団法人元興寺文化財研究所）が行った。
9. 本書に使用した土器の分類、編年、年代観については以下の文献を参照した。本文中で触れる分類名、年代記はこれらに依拠している。

愛知県史編さん委員会 2012『愛知県史 別編 窯業 3』

尾上実・森島康雄・近江俊秀 1995『瓦器』『概説中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 真陽社

小野正敏 1982『15～16世紀の染付楕・皿の分類と年代』『貿易陶磁研究』No.2 貿易陶磁研究会

川口宏海 1990『16世紀における大和型土釜の動向』『中近世土器の基礎研究』VI 日本中世土器研究会

九州陶磁学会 2000『九州陶磁の編年』

佐藤亞聖 1996『大和における瓦質土器の展開と画期』『中近世土器の基礎研究』XI 日本中世土器研究会

佐藤亞聖 2016『大和における瓦質土器編年』『元興寺文化財研究所研究報告 2015 水野正好所長追悼論文集』公益財団法人元興寺文化財研究所

重根弘和 2017『備前一編年と分布』『第 36 回中世土器研究会 国産陶器の系譜と歴年代 資料集』中世土器研究会

中世土器研究会事務局 2015『東播系須恵器の分類と編年』『中近世土器の基礎研究』26

奈良市教育委員会 2014『南都出土中近世土器資料集－奈良町高天町遺跡（HJ 第 559 次調査）出土資料－』

長谷川眞 1988『丹波系播鉢について』『中近世土器の基礎研究』IV 日本中世土器研究会

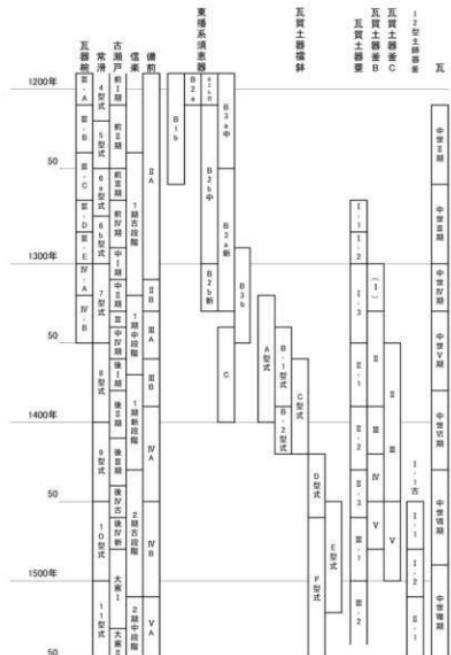
畠中英二 2003『信楽焼の考古学的研究』サンライズ出版

藤澤良祐 2005『施釉陶器生産技術の伝播』『中世窯業の諸相－生産技術の展開と編年－』発表要旨集 全国シンポジウム「中世窯業の諸相－生産技術の展開と編年－」実行委員会

藤澤良祐 2008『中世瀬戸窯の研究』高志書院

- 森島康雄 2000「織豊期の基準資料と曆年代の再検討—京都を中心に—」『織豊城郭』第7号 織豊城郭研究会
- 森田勉 1982 「14-16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁器研究』No.2 貿易陶磁器研究会
- 山崎信二 2000『中世瓦の研究』奈良国立文化財研究所
10. 発掘調査及び整理報告書作成にかかる費用については、吉川泰久、吉川稻穂、吉川えみ、吉川長伸が全額負担した。
11. 当該調査において出土した遺物、実測図、写真は奈良市教育委員会において保管している。
12. 本書の執筆は第4章1節を大橋有佳(公益財團法人元興寺文化財研究所)、第4章2節を吉田芽依(大阪市立大学大学院)、そのほかを佐藤が執筆した。本書の編集は佐藤が行い、これを芝が補佐した。
13. 発掘調査及び報告書作成に際しては、以下の方々からのご助言、ご協力を頂いた。記して感謝申し上げたい。
- 尾野善裕、新田和央、神野恵、原田香織、畠中英二、松本啓子
 奈良市教育委員会、奈良県教育委員会、中世土器研究会（敬称略、順不同）

編年の並行関係一覧



目次

第1章 調査に至る経緯と調査体制	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査体制	1
第3節 調査の経過（調査日誌抄）	2
第2章 周辺環境と既往の調査	4
第3章 調査の成果	7
第1節 基本層序と遺構面の認定	7
第2節 古墳時代初頭の遺構と出土遺物	7
(1) 検出遺構	7
(2) 出土遺物	8
第3節 奈良時代の遺構と出土遺物	8
(1) 検出遺構	8
(2) 出土遺物	8
第4節 平安時代から鎌倉時代の遺構と出土遺物	11
(1) 検出遺構	11
(2) 出土遺物	17
第5節 室町時代から戦国時代の遺構と出土遺物	32
(1) 検出遺構	32
(2) 出土遺物	34
第6節 江戸時代から明治時代初期の遺構と出土遺物	41
(1) 検出遺構	41
(2) 出土遺物	43
第7節 そのほかの遺構出土遺物	45
第4章 出土遺物の分析	46
第1節 SK050 出土陶器水注の分析	46
第2節 出出土師器皿の口径分布と組成について	50
第5章 調査のまとめ	60
第1節 遺構の変遷について	60
第2節 京阿蘭陀焼について	62
第3節 SD001 出土土師器皿について	63

図版目次

図 1	調査地位置図 (S=1/25,000)	4
図 2	今回の調査地と既往の調査地 (『平城京条坊地図』を改変) (S=1/2,000)	5
図 3	全体図 (S=1/150)・壁面土層断面図 (S=1/80)	9
図 4	SD020 平面・土層断面図 (S=1/40)	11
図 5	SD150 平面・土層断面図 (S=1/40)	12
図 6	SD150 出土遺物実測図 (S=1/3)	12
図 7	SD020 出土遺物実測図 (S=1/3)	12
図 8	SB140 平面・土層断面図 (平面 S=1/80・断面 S=1/40)	13
図 9	SB140 出土遺物実測図 (S=1/3)	13
図 10	SB130 平面・土層断面図 (平面 S=1/80・断面 S=1/40)	14
図 11	SD001 土層断面図 (S=1/40)	14
図 12	SD040 平面・土層断面図 (S=1/40)	15
図 13	SE071 平面・土層断面図 (S=1/40)	16
図 14	SE120 平面・土層断面図 (S=1/40)	16
図 15	SK013 平面・土層断面図 (S=1/40)	17
図 16	SK056 平面・土層断面図 (S=1/40)	17
図 17	SK060 平面・土層断面図 (S=1/40)	18
図 18	SB130 出土遺物実測図 (S=1/3)	18
図 19	SD001 出土遺物実測図 (1) (S=1/3)	19
図 20	SD001 出土遺物実測図 (2) (S=1/2・1/3)	21
図 21	SD001 出土遺物実測図 (3) (S=1/3)	22
図 22	SD040 出土遺物実測図 (S=1/3)	23
図 23	SE071 出土遺物実測図 (S=1/3)	24
図 24	SE120 出土遺物実測図 (1) (S=1/2・1/3)	26
図 25	SE120 出土遺物実測図 (2) (S=1/3)	27
図 26	SE120 出土遺物実測図 (3) (S=1/3)	28
図 27	SE120 出土遺物実測図 (4) (S=1/3)	29
図 28	SE120 出土遺物実測図 (5) (S=1/3)	30
図 29	SK013 出土遺物実測図 (S=1/3)	31
図 30	SK056 出土遺物実測図 (S=1/3)	32
図 31	SK060 出土遺物実測図 (S=1/3)	32
図 32	SK070 平面図 (S=1/40)	32
図 33	SK090 平面・土層断面図 (S=1/40)	33
図 34	SK094 平面・土層断面図 (S=1/40)	34
図 35	SK103 平面・土層断面図 (S=1/40)	34
図 36	SX110 平面・立面・土層断面図 (S=1/20)	35
図 37	SK070 出土遺物実測図 (S=1/3・2/3)	36

図 38	SK090 出土遺物実測図 (S=1/3)	36
図 39	SK094 出土遺物実測図 (1) (S=1/3)	37
図 40	SK094 出土遺物実測図 (2) (S=1/3)	38
図 41	SK103 出土遺物実測図 (S=1/3)	39
図 42	SX110 出土遺物実測図 (S=1/3)	40
図 43	SK050 平面・土層断面図 (S=1/40)	41
図 44	SX100 平面・土層断面図 (平面 S=1/80・断面 S=1/40)	42
図 45	SK050 出土遺物実測図 (S=1/3)	43
図 46	SX100 出土遺物実測図 (S=1/2・1/3)	43
図 47	SP083 出土遺物実測図 (S=1/5)	44
図 48	SK099 出土遺物実測図 (S=1/3)	45
図 49	表土出土遺物実測図 (S=1/3)	45
図 50	分析箇所	47
図 51	a 素地の螢光 X 線スペクトル (上段: 15kV、下段: 50kV)	48
図 52	b 白色化粧下地の螢光 X 線スペクトル (上段: 15kV、下段: 50kV)	48
図 53	c 透明釉薬の螢光 X 線スペクトル (上段: 15kV、下段: 50kV)	49
図 54	d 青色釉薬の螢光 X 線スペクトル (上段: 15kV、下段: 50kV)	49
図 55	土師器皿分類	51
図 56	SE120 黒粘下 口径分布と型式別出土比率	52
図 57	SE120 褐灰土 口径分布と型式別出土比率	53
図 58	SE120 暗褐土 口径分布と型式別出土比率	53
図 59	SE071 黒灰土 口径分布と型式別出土比率	54
図 60	SK013 口径分布と型式別出土比率	54
図 61	SK056 口径分布と型式別出土比率	55
図 62	SD001 灰粘 口径分布と型式別出土比率	56
図 63	SD001 淡灰粘 口径分布と型式別出土比率	57
図 64	SD001 褐色土 口径分布と型式別出土比率	57
図 65	SK094 口径分布と型式別出土比率	58
図 66	藍絵西洋風景図大皿	62
図 67	藍絵西洋風景図刀掛	62
図 68	既往の調査出土土師器皿	64
図 69	検出遺構配置略図 (S=1/200)	67

表目次

表 1 FP 法による定量値	47
表 2 SE120 型式別計測数	52
表 3 SE071・SK013 型式別計測数	54
表 4 SK056 型式別計測数	55
表 5 SD001 型式別計測数	56
表 6 SK094 型式別計測数	58
表 7～16 報告遺物一覧	68～77
表 17～21 検出遺構および出土遺物一覧	78～82

写真図版目次

図版 1	図版 13
調査前風景（東から）	SK103 土層断面（南から）
遺構検出状況（西から）	SX110 土層断面（南から）
図版 2	図版 14
全景（東から）	SX110 完掘（南から）
図版 3	SK050 土層断面（南から）
全景（西から）	図版 15
完掘状況（南西から）	SX100 土層断面 a-a'（東から）
図版 4	SX100 土層断面 b-b'（東から）
拡張部全景（西から）	図版 16
SD020 土層断面（北から）	SX100 護岸検出状況（西から）
図版 5	調査後風景（西から）
SD150 黄褐色除去後縦検出状況（南西から）	図版 17
SD150 完掘（南から）	SD020・150・001 出土遺物
図版 6	図版 18
SB130e 土層断面（東から）	SD001 出土遺物
SD001 土層断面（南から）	図版 19
図版 7	SD001 出土遺物
SD001 完掘（南から）	図版 20
SD040 土層断面（東から）	SD001、SE071・120 出土遺物
図版 8	図版 21
SE071 土層断面（南から）	SE120 出土遺物
SE071 完掘（北から）	図版 22
図版 9	SE120 出土遺物
SE120 土層断面（東から）	図版 23
SE120 完掘（西から）	SE120 出土遺物
図版 10	図版 24
SK013 土層断面（東から）	SE120 出土遺物
SK060 完掘（東から）	図版 25
図版 11	SE120、SK013・070・090 出土遺物
SK070 土層断面（南から）	図版 26
SK090 土層断面（北から）	SK094 出土遺物
図版 12	図版 27
SK094 土層断面（南東から）	SK103・050・099 出土遺物
SK094 完掘（北から）	図版 28
	表土出土遺物

第1章 調査に至る経緯と調査体制

第1節 調査に至る経緯

平成30年12月25日付けで吉川泰久、吉川稲穂、吉川えみ、吉川長伸より、ホテル新築に伴う埋蔵文化財発掘調査の届出が提出された。これを受け当地が平城京の範囲であり、また中世の都市である奈良町遺跡の範囲に含まれていることから、平成31年2月12日に奈良県教育委員会より奈良市教育委員会を通じて発掘調査の実施が指示された。これにより奈良市教育委員会は発掘調査実施に向けた協議を開始したが、工期を勘案した結果、公共機関による発掘調査は困難と判断され、公益財団法人元興寺文化財研究所へ発掘調査が依頼された。

令和元年5月10日に奈良県教育委員会より発掘調査の依頼を受けた公益財団法人元興寺文化財研究所は、同年5月20日、平城京左京三条六坊十一坪・奈良町遺跡発掘調査業務に係る委託契約を吉川泰久、吉川稲穂、吉川えみ、吉川長伸と締結、同年5月21日に発掘調査届出を提出のうえ、同年5月29日より現地調査を開始した。

現地調査は令和元年7月3日に終了し、その後すみやかに整理・報告書作成業務に移行した。現地調査から報告書作成に至る間、吉川泰久、吉川稲穂、吉川えみ、吉川長伸各位、大和ハウス工業株式会社の全面的な支援・協力があった。また、奈良県、奈良市教育委員会からの適切なご指導を賜った結果、調査・整理作業を無事に終了することが出来た。関係各位に感謝する次第である。

第2節 調査体制

発掘調査並びに整理・報告書作成は以下の体制で実施した。

(発掘調査)

調査指導：奈良県教育委員会・奈良市教育委員会

調査主体：公益財団法人元興寺文化財研究所

理事長　辻村泰善

所長　辻村泰善（兼務）

副所長　狭川真一

事務局長　江島和哉

総合文化財センター長　塚本敏夫

文化財調査修復研究グループ

リーダー　金山正子

主務　角南聰一郎

主任研究員　佐藤亞聖（現地調査担当）

研究員　村田裕介　坂本俊

現地作業員：有限会社ワーク

測 量：公益財団法人元興寺文化財研究所・株式会社文化財サービス

(整理報告)

調査指導：奈良県文化財保存課・奈良市教育委員会

調査主体：公益財団法人元興寺文化財研究所

理事長 辻村泰善

所 長 辻村泰善（兼務、令和2年7月まで） 田邊征夫（令和2年7月から）

事務局長 江島和哉

総合文化財センター長 塚本敏夫

文化財調査修復研究グループ

リーダー 金山正子

主 務 佐藤亜聖（整理報告担当）

研 究 員 村田裕介 坂本 俊

第3節 調査の経過（調査日誌抄）

令和元年

5月 29日（水）重機、機材搬入。奈良市教育委員会立会いのもと、調査区の設定および重機掘削を行う。

調査区中央付近に所在する SK050 から通常とは異なる陶器水注の破片が出土する（後に京阿蘭陀焼と判明）。

5月 30日（木）重機掘削。調査区西半分に巨大な落ち込み状の遺構を検出。

5月 31日（金）重機掘削完了。遺構検出状況写真撮影。東端 SD001 から掘削開始。

6月 3日（月）SD001 完掘。赤褐色系の土師器皿と尾張系第8型式山茶椀が伴う重要な事例と認識。

6月 4日（火）SK013 掘削。大量の土師器皿と少量の瓦器椀が出土するが、遺構の性格は明確にできない。

6月 5日（水）柱穴が多数存在する中で、比較的深くて底部の根石が存在するものが明確に並ぶようである。これを基に建物を復元する。

平城京内でよく見かける黄褐色のシルトで埋没する落ち込み（SD020）を検出。黄褐色シルトからは奈良時代の土器が、下層の灰褐色土からは古墳時代の土師器碗が出土したことから、外京設置時に整地によって埋められた溝の可能性を考える。

6月 6日（木）SK050 より先に出土していた陶器水注の蓋が出土する。強力な低気圧の接近が予想されるため午後から強風対策を行う。

6月 7日（金）雨天のため現場図面の点検、整理を行う。

6月 10日（月）雨天のため現場図面の点検、整理を行う。

6月 11日（火）SK070 墓内より水晶片が出土した。

6月 12日（水）調査区中央付近で地山と見分けの難しい柱穴を検出。丁寧に追いかけると 180cm 間隔で並ぶ奈良時代の掘立柱建物（SB140）であることが判明した。

6月 13日（木）調査区中央から西半に存在する大型土坑を SX100 として掘削開始。底部付近から 19世紀の遺物が出土した。

- 6月14日（金） SX100から杭と板材で構成された護岸を検出した。
- 6月17日（月） SX100の護岸は外側から内側に倒れていることが判明、写真撮影、実測を行う。
- 6月18日（火） SX100北側付近に別の杭列を確認、護岸が二時期にわたる可能性が判明する。埋土内からガラス製簪が出土した。
- 6月19日（水） SX110掘削。石組みが確認でき、石積みの地下式施設であることが判明。SE120掘削開始。
- 6月20日（木） ダイワハウス安全大会のため現場中止。
- 6月21日（金） SE120掘削。かなりの規模の井戸であることが明らかになる。夕方突風来襲。強風対策をとっていたため被害は無し。
- 6月24日（月） SE120枠内埋土上層より泥塔が出土した。
- 6月25日（火） 全景写真撮影。午後奈良大学坂井秀弥先生ゼミが巡査で来訪。
- 6月26日（水） SD150掘削、SD020と同様奈良時代前期に整地によって埋められる古墳時代の溝であることが判明。壁面上層図作成、調査区西端拡張開始。
- 6月27日（木） 雨天のため現場図面の点検、整理を行う。
- 6月28日（金） SD150完掘。掘削最中にSB140を構成するピット（S-113・115）を検出した。本来はSD150に後出するピットであったものを見落としていたと考えられる。ただし、SD150上層から出土した奈良時代前期の土器はS-113・115とは離れた位置から見つかっており、ピットからの混入である可能性はない。
- 7月 1日（月） 雨天のため現場図面の点検、整理を行う。
- 7月 2日（火） 拡張区では道路側溝等奈良時代の遺構は確認できなかった。地山面の上にある整地層（壁面17層）の精査を行い、これが14世紀ごろの整地層であることを確認した。
- 7月 3日（水） 埋め戻し完了、機材撤収、調査終了。

第2章 周辺環境と既往の調査

平城京外京域および奈良町遺跡は奈良盆地北東部に位置する。この地域は木津川屈曲部からウワナベ古墳群を抜けて帯解付近へ続く佐保田接曲と、木津川東岸より奈良坂を超えて山麓へつながる奈良坂接曲の間に存在する段丘面にあたる（産業技術総合研究所 2014）。特に佐保田接曲が形成する断層崖については中世都市奈良の市街地西辺に一致することがわかっており（佐藤 2005）、奈良の都市景観と密接に関係する地質条件である。

調査地は率川が開析する谷地形南に隣接する低位段丘に位置する。この地域の基盤層は鮮新世後期～更新世前期（200～77万年前）に形成された大阪層群の上部に堆積した段丘堆積物であり、5cm程度の礫を多量に含む黄褐色砂である。

当地の周辺では小規模なものを含め多数の調査が行われているが、平城京造営以前の遺構は極めて少ない。平城京 449 次調査（以下次数のみ記述）では 12 世紀に埋没する溝から円筒埴輪が出土しており、周辺には率川古墳や脇戸古墳といった埋没古墳が確認されていることから、奈良時代以前から人間の営みのある地域であることは間違いない。今回の調査で検出した奈良時代以前の溝（SD020・150）は当該期の唯一の遺構として貴重である。

奈良時代の遺構については散発的に検出例がある。89 次調査、228 次調査、293 次調査、559 次調査、650 次調査では土坑、176 次調査では井戸、650 次調査では掘立柱建物などが検出されており、段丘



図 1 調査地位置図 ($S=1/25,000$)

上の外京域が奈良時代から利用されていたことが判明している。ただし東六坊坊間路の路面上に相当する89次調査、228次調査では道路側溝が検出されず、南方にあたる本子守町率川神社東側で行われた調査では、六坊坊間路推定地から率川古墳と名付けられる古墳の周溝が発見されている（鐘方2009）。この周溝は9世紀以降に埋没することが判明しており、こうした点から推定地における条坊道路の存在そのものが疑われている。東六坊における条坊道路については推定位置が地上に残る遺存地割と整合しないことから、西側へずれている可能性が指摘されているが（西崎1985）、なお結論を見ていない。条坊道路の存在は今回の調査でも課題の一つとして挙げておきたい。

平安時代に入ると遺構検出件数が増加する。ただし、89次調査では10世紀前半の溝、559次調査で11世紀中葉の井戸が見つかっているほかは、11世紀中葉以前の遺構は極めて希薄である。これに

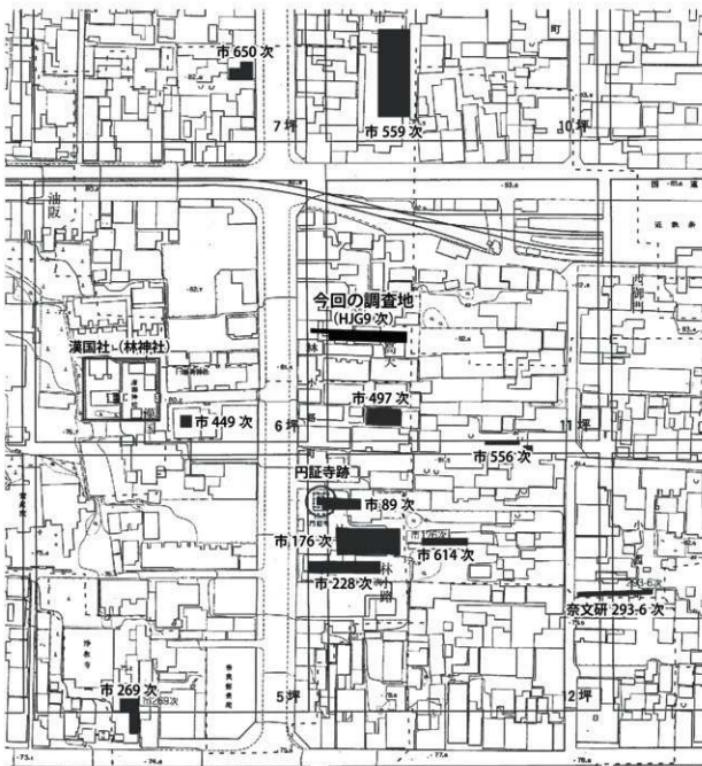


図2 今回の調査地と既往の調査地（『平城京条坊地図』を改変）（S=1/2,000）

対し、11世紀後半～末の遺構は狭小な調査区を除くほぼすべての調査区で検出しており、すでに指摘のあるように中世都市奈良の形成時期が当該期に当たることを明確に示している。559次調査では現在に続く土地区画の成立が当該期に相当することが指摘されており（中島2009）、当該期には集住という現象だけではなく、街区の整備を伴う町の成立が想定できよう。

その後、調査地周辺では近世に至るまで途切れることなく遺構検出事例が続き、濃密な土地利用がうかがえる。遺構の性格を示す資料は少ないが、559次調査では鹿角加工品や水晶加工品、鉄滓などが、293・6次調査でも鹿角加工品や埋甕がみつかるなど、商工業者の存在が想定できる資料が散見される。当調査区の西側には漢国社があり、境内には林神社と呼ばれる小社があり、饅頭をはじめとした菓子の神とされているが、『奈良坊目拙解』には14世紀に宋朝より渡来し、饅頭の製法を伝えた林淨因に関する記述がみられる。林淨因についてはその子孫を称する林家の活動が史料上も確認でき、実在の人物と考えられる。こうした点にも調査地周辺の活発な商業活動をうかがうことができる。

『奈良坊目拙解』には調査区が位置する高天町について、「享禄七郷記」よりの引用として「西御門郷 西金堂郷 武房沙汰、高天 南方、府坂 南方、林小路云々」とされており、興福寺西金堂衆が沙汰する西御門郷の小郷であったことが知られる。また、「往時筒井一家高間氏が住した」との記述がみられるが、調査区の南方にはかつて、大和の最有力国人筒井順昭（1523～1550）の菩提所であった円証寺が存在しており、『奈良坊目拙解』にはこの円証寺が筒井順昭の別業であったと伝える。調査地から南約300mに所在する伝香寺も筒井氏の菩提寺であり、中世後期の当地周辺が筒井氏と強く関係を有する地域であったことは間違いない。

こうした地理的、歴史的環境を背景として、今回の発掘調査は①奈良時代以前の土地利用の解明、②平城京六坊坊間路の存否の確認、③本格的土地利用開始時期の解明、④中世における宅地形態の解明、⑤中世における手工業関係遺構・遺物の検出、を課題と考えて調査を行った。

〔参考文献〕

- 鏡方正樹 2009 「率川古墳と外京塙坊および出土埴輪について」『奈良市埋蔵文化財調査年報』平成18年度（2006年度）
奈良市教育委員会
- 佐藤亞聖 2005 「中世都市奈良の成立と変容」「中世の都市と寺院」高志書院
- 独立行政法人産業技術総合研究所 2014 「平成25年度「活断層の補完調査」成果報告書奈良盆地東縫断層帶」
- 中島和彦 2009 「平城京跡（左京三条六坊十押）・奈良町遺跡の調査 第559次」
『奈良市埋蔵文化財センター 紀要』平成18年度 奈良市教育委員会
- 西崎卓哉 1985 「平城京外京の地割計画寸法」「奈良市埋蔵文化財センター紀要1985」奈良市教育委員会

第3章 調査の成果

第1節 基本層序と遺構面の認定(図3)

調査区周辺は既存建物の建設に伴う盛土が40～80cmにわたって敷設される。また、既存建物基礎による攪乱も著しい。

盛土直下には江戸時代の整地層と考えられる礫、土器を多量に含む黒褐色土が層厚10～30cmにわたって存在する。さらに、調査区東半には14世紀頃と考えられる微細な土器片を多量に含む整地層(壁面17層)が、層厚30cm前後遺存していた。この整地層には径5mm前後の焼土も多く含まれる。この上面から貫入する遺構が確認でき、上面に遺構面の存在を認めたが、今回の調査では諸般の事情により17層を除去した地山面で遺構検出を行った。

地山は大阪層群に起因する、礫を大量に含む黄褐色の細砂を主とし、一部に細砂直下の礫層が露出している。遺構面の標高は81.5m前後で、わずかに西に向かって傾斜する。

第2節 古墳時代初頭の遺構と出土遺物

(1) 検出遺構

溝

SD020(図4、図版4)

調査区中央東寄りで検出した溝状の遺構である。重複関係からすべての遺構に先行すると考えられる。幅200cm前後、深さ40cm前後を測り、断面形態は皿形を呈する。埋土は大きく3層に分かれる。最上層(1・2)は地山ブロックを主とし、非常によくしまった細砂である。中層(3)はしまりの悪いシルト混じり細砂で、部分的にラミナが確認できることから自然堆積層と考えられる。下層(4)は地山ブロックを多く含む人為的堆積土である。

上層からは奈良時代の遺物が、下層からは古墳時代前期の土師器二重口縁壺(1)がそれぞれ出土している。古墳時代に機能した溝が埋没し、沈下した部分に奈良時代の整地層が敷設されたものと考えられる。

SD150(図5、図版5)

調査区中央付近で検出した溝状の遺構である。重複関係からSD020以外のすべての遺構に先行すると考えられる。幅400cm前後、深さ60cm前後を測り、断面形態は浅い「U」字形を呈する。埋土は大きく2層に分かれる。上層(1～4)は地山ブロックを主とし、非常によくしまった細砂である。下層(5)はしまりの悪い細砂で、部分的にラミナが確認できることから自然堆積層と考えられる。埋土の状況はSD020と共通点が多い。上層と下層の境界付近から径30cm前後の礫が13個出土したが、その配置に規則性はなく、投棄された状況であった。

上層からは奈良時代の遺物が、下層からは古墳時代後期の須恵器蓋(7)がそれぞれ出土した。古墳時代に機能した溝が埋没し、沈下した部分に奈良時代の整地層が敷設されたものと考えられる。

(2) 出土遺物

溝

SD020 出土遺物（図 6、図版 17）

土師器壺（1）二重口縁壺である。口縁部の引き出しあは短く、口唇部および屈曲部に直径 9mm 前後の同心円點付浮文を等間隔に配置する。下部にわずかに縦方向のヘラミガキが確認できるが、表面劣化が著しく、調整の詳細は不明である。庄内式平行期のものである。

SD150 出土遺物（図 7、図版 17）

【黄褐色土出土遺物】

土師器杯（2・3）杯 A である。いずれも口縁部をわずかに外反させて小さく玉縁を造り出す。内外面ナデ調整を施し、暗文はみられない。2 の口縁部には煤の付着が認められる。奈良時代中期以降のものと考えられる。

【暗灰土出土遺物】

弥生土器甕（4）底部のみの破片である。外底面はドーナツ状に窪む。内外面表面劣化のため調整等は不明である。

土師器高杯（5）脚部の破片である。透かし孔の有無については不明である。内外面表面劣化のため調整等は不明である。

土師器壺（6）小型壺の頸部である。胎土は砂粒を多く含む。表面劣化のため調整等は不明である。

須恵器蓋（7）内外面回転ナデののち、天井部外面を回転ヘラケズリする。ロクロ回転は右回りである。蓋蓋と考えられるが特殊な形状のため詳細は不明である。

第 3 節 奈良時代の遺構と出土遺物

(1) 検出遺構

建物

SB140（図 8）

調査区中央付近で検出した掘立柱建物である。SD150 が埋められた後に建てられる。南北二間以上、東西二間の規模を持つ。南北 340cm 以上、東西 320cm 前後、柱間平均 160cm 前後を測る。主軸はほぼ座標に一致する。柱穴は一辺 50cm 前後の隅丸方形を呈し、柱直径は 10 ~ 15cm が想定できる。

柱穴内より奈良時代中期以降の土器が出土した。

(2) 出土遺物

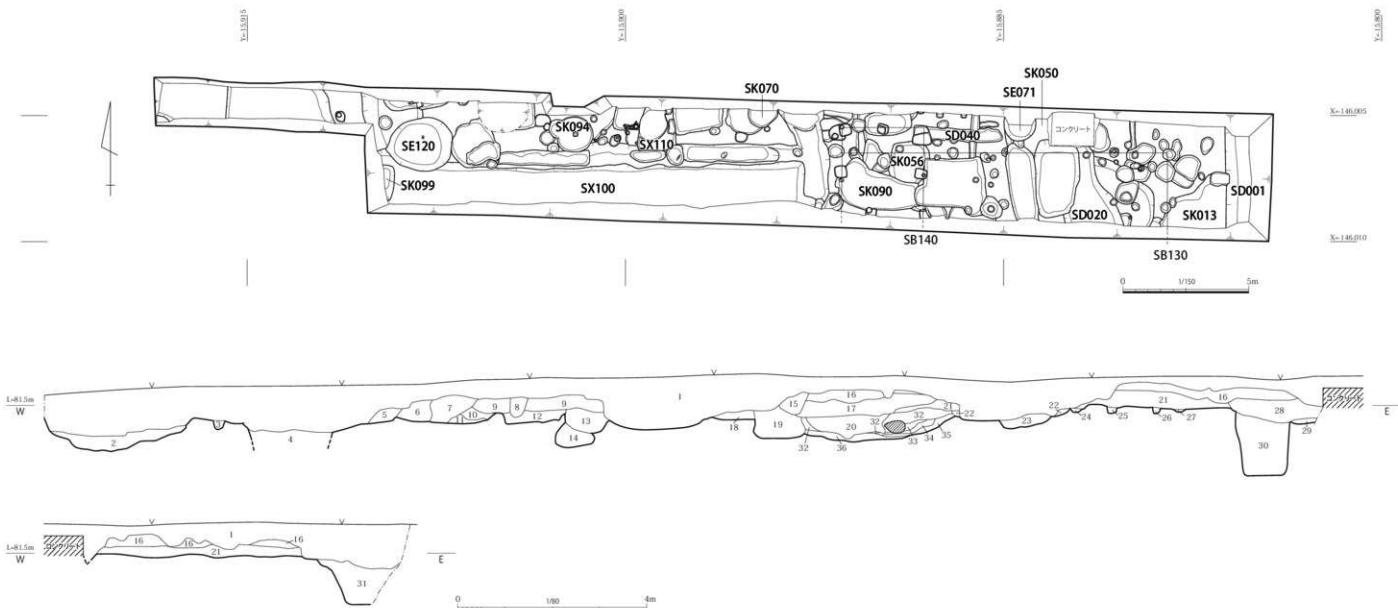
建物

SB140 出土遺物（図 9）

土師器壺（8）手づくね成形で、口縁部にナデ調整を施す。胴部には指頭圧痕が確認できる。鉢の可能性も考えられる。

須恵器杯（9）内外面回転ナデ調整を行う。焼成は灰色を呈し、堅緻である。

これらの遺物はいずれも柱抜き取り痕から出土しており、奈良時代中期から後期のものである。



1. オリーブ岩 2.5Y4/4 剝砂認中粒砂（粒径 30 ~ 50mm の礫、炭化物、土塊片、瓦を含む）
2. 剥オーリーブ岩 2.5Y3/3 中粒砂（土塊片、炭化物、瓦 5mm の礫を含む）
3. 剥オーリーブ岩 2.5Y3/3 中粒砂認細砂（土塊片を含む）
4. 明青板 2.5Y6/6 粗砂（往 5mm の礫を多量に含む）
5. 剥オーリーブ岩 2.5Y3/3 中粒砂（往 5 ~ 10mm の礫と土塊片を多量に含み、炭化物を少量含む） 剥瓦
6. 剥オーリーブ岩 2.5Y3/3 剥砂認中粒砂（土塊片と往 5 ~ 30mm の礫、炭化物を少量含む）
7. 剥オーリーブ岩 2.5Y3/3 剥砂認中粒砂（炭化物、往 5mm の礫を少量含み、土塊片を多量に含む）
8. 黒泥 2.5Y3/2-4 中粒砂認細砂（土塊片、炭化物、往 3mm の礫を少量含む）
9. 剥オーリーブ岩 2.5Y3/3 中粒砂（炭化物を少量含み、土塊片と往 10mm の礫を含む）
10. 黒泥 2.5Y3/2-4 中粒砂（往 5 ~ 10mm の礫を少量含み、土塊片を少量含む）
11. 剥オーリーブ岩 2.5Y3/3 粗砂（往 40mm の礫と土塊片を少量含む）
12. 黒泥 2.5Y3/2-4 中粒砂（土塊片、瓦を含む）
13. オリーブ岩 2.5Y4/4 中粒砂（炭化物と往 30mm の礫を少量含む）
14. 剥オーリーブ岩 2.5Y3/3 中粒砂（炭化物と往 30mm の礫を少量含む）
15. 剥オーリーブ岩 2.5Y3/3 剥砂認中粒砂（炭化物多く含む） 近世の遺構

16. 黒泥 2.5Y3/2-4 中粒砂（礫を少量、炭化物大層に含み、近代の駆逐物）
17. オリーブ岩 2.5Y3/4 中粒砂認細砂（土塊片多く含み、瓦を含む） 駆逐層
18. 黒泥 2.5Y3/2-4 中粒砂（往 10mm 前後の垂角礫状地山ブロック多く含む）
19. 黒泥 2.5Y3/2-4 中粒砂（往 10mm 前後の垂角礫状地山ブロック多く含む、礫がやや多く含む） (SK070 地理)
20. 黒泥 10Y8/2 の中粒砂（往 50mm 前後の垂角礫状地山ブロック多く含む）
21. 黒泥 10Y8/2 の中粒砂（土塊片多く含みよく駆逐）
22. 剥オーリーブ岩 2.5Y3/3 剥砂認中粒砂（往 10 ~ 30mm の垂角礫状地山ブロック大層に含む）
23. 黒泥 2.5Y3/2-4 中粒砂認細砂（下部で礫を多く含む） (SD150)
24. 剥オーリーブ岩 2.5Y3/3 中粒砂（垂多く含む）
25. 剥オーリーブ岩 2.5Y3/3 中粒砂（往 10 ~ 50mm の垂角礫状地山ブロック多く含む）
26. 剥オーリーブ岩 2.5Y3/3 中粒砂（土塊片、炭化物、往 10mm の礫を少量含む）
27. オリーブ岩 2.5Y4/4 中粒砂（粘性土）
28. 剥オーリーブ岩 2.5Y3/3 中粒砂（土塊片、瓦、往 25mm の礫を多量に含み、炭化物を少量含む） (SK050)
29. 剥オーリーブ岩 2.5Y3/3 中粒砂（往 5mm の礫を少量含む）
30. 黒泥 2.5Y3/2-4 中粒砂（土塊片を多量に含む、炭化物、往 10mm の礫、土塊を少量含む） (SE071)

31. 剥オーリーブ岩 2.5Y3/3 中粒砂認細砂（土塊片、往 5 ~ 40mm の礫を多量に含み、炭化物を少量含む） (SD001)
32. 剥泥層 10Y6/6 剥砂認細砂（地山アーロックを上とする） (SD150)
33. 黒泥 10Y8/6 剥砂認細砂（往 10 ~ 50mm の垂角礫状地山ブロック多く含む） (SD150)
34. にじみ泥層 10Y8/4 剥砂認細砂（往 5 ~ 10mm の垂角礫状地山ブロック少く含む） (SD150)
35. にじみ泥層 10Y8/4 剥砂認細砂（往 10 ~ 30mm の垂角礫状地山ブロック多量に含む） (SD150)
36. 残瓦層 10Y8/2 シルト混細砂（ラミ形既成） (SD150)

図3 全体図 (S=1/150)・壁面土断面図 (S=1/80)

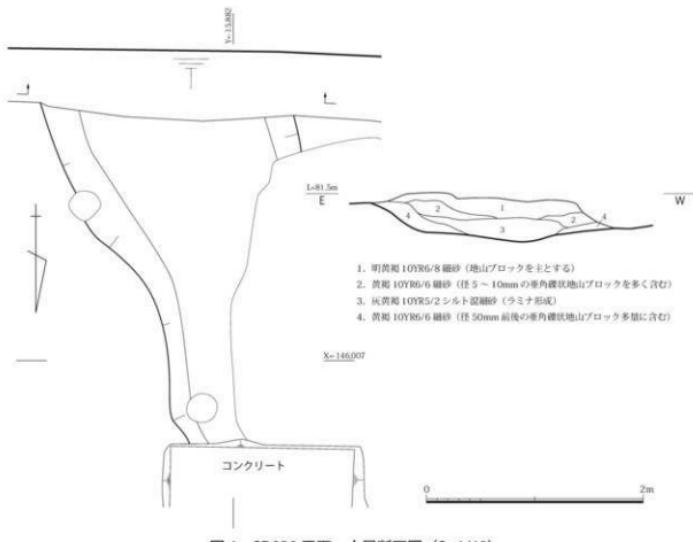


図4 SD020 平面・土層断面図 (S=1/40)

第4節 平安時代から鎌倉時代の遺構と出土遺物

(1) 検出遺構

建物

SB130 (図10、図版6)

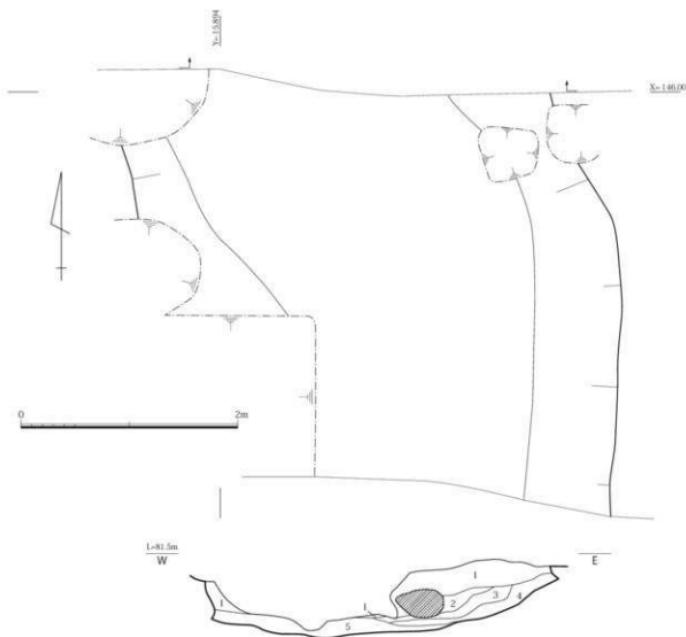
調査区中央から東半付近で検出した掘立柱建物である。7基の柱穴で構成され、南北二間以上、東西六間以上の規模を持つ。柱間平均210cm前後を測り、主軸はほぼ座標に一致する。柱穴は直径35～40cm前後の円形を呈し、断面から確認できる柱直径は10～13cmが想定できる。a・d以外全ての柱穴の底には瓦や根石が設置されていた。

柱穴内より13世紀前半頃の土器が出土した。

溝

SD001 (図11、図版6・7)

調査区東端で検出した溝である。東岸は調査区外のため幅は不明である。深さ74cmで断面形態逆台形を呈する。埋土は最下層にブロック土を含む人為的埋土(7・8)が、中層にラミナを形成する細砂～シルト層(4・5)が、これを覆うように土器、礫を多量に含む中粒砂(3)が堆積し、最終的には地山ブロックを含む人為的埋土(1・2)で埋められる。肩部は出入りがほとんどなく直線的で、底部



1. 明黄褐色 10YR6/8 細粒砂（地山ブロックを主とする）
2. 黄褐色 10YR6/6 細粒砂（径 10 ~ 50mm の亜角礫状地山ブロック多く含む）
3. にぶい黄褐色 10YR5/4 細粒砂（径 5 ~ 10mm の衝突線状地山ブロック少額含む）
4. にぶい黄褐色 10YR5/4 細粒砂（径 10 ~ 30mm の亜角礫状地山ブロック多量に含む）
5. 灰黄褐色 10YR5/2 シルト混細粒砂（ラミナ形成）

図 5 SD150 平面・土層断面図 ($S=1/40$)

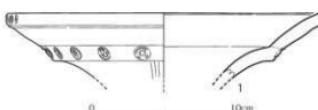


図 6 SD020 出土遺物実測図 ($S=1/3$)

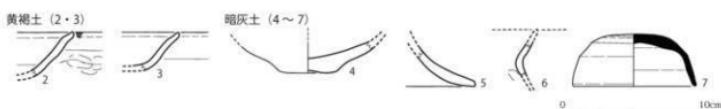


図 7 SD150 出土遺物実測図 ($S=1/3$)

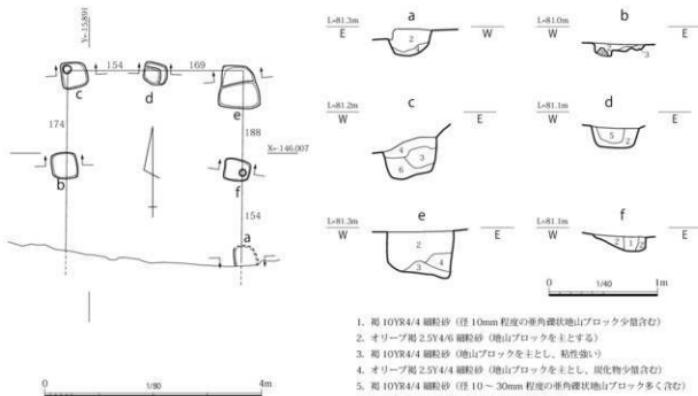


図8 SB140 平面・土層断面図(平面 S=1/80・断面 S=1/40)

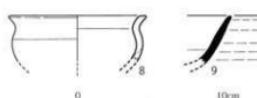


図9 SB140 出土遺物実測図 (S=1/3)

も平坦である。位置関係から屋敷の背割り溝かと思われるが、検出範囲が狭く詳らかでない。

埋土内より 13 世紀末～14 世紀前半の多数の遺物が出土した。中には尾張系山茶碗もみられ、土師器皿と山茶碗の並行関係を知る上でも貴重な資料である。

SD040 (図 12、図版 7)

調査区中央東寄りで検出した溝である。検出長 310cm、幅 45cm、深さ 8cm 前後を測り、断面形態模型を呈する。埋土は下層に掘削時の加工土と考えられる地山ブロックを含む砂がみられるが、それ以外は炭化物を含み土壤化した中粒砂を主体とする。開口状態にあったものと考えられるが、流水の痕跡はみられない。埋土内より 11 世紀中葉頃の遺物が出土した。

井戸

SE071 (図 13、図版 8)

調査区東寄りで検出した井戸である。直径 120cm、深さ 135cm 前後を測り、円形を呈する。井戸枠の痕跡は確認できない。最上層（1・2）は炭化物を少量含む黒褐色土で、下部に土師器皿を重ねて埋納していた。中層（3・4）は礫と亜角礫状地山ブロックを多量に含む人為的埋土である。下層（5・6）は炭化物と礫、土器を多量に含み、人為的埋土と考えられる。遺構底部は現在の湧水層には達していない。

埋土内より 12 世紀後半の遺物が出土した。

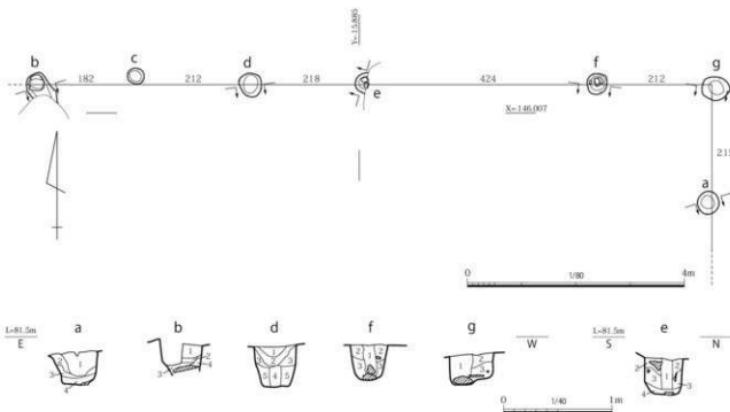


図 10 SB130 平面・土層断面図 (平面 S=1/80・断面 S=1/40)

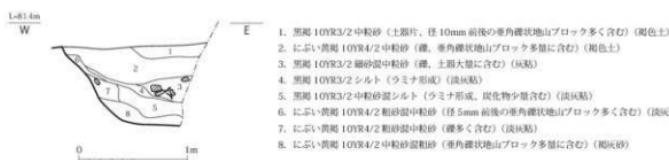


図 11 SD001 土層断面図 (S=1/40)

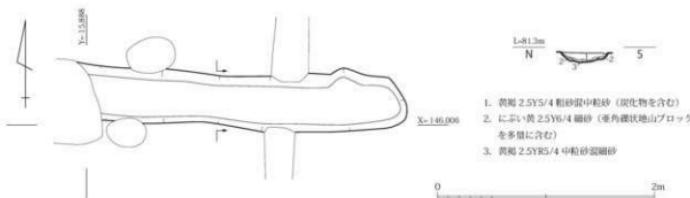


図 12 SD040 平面・土層断面図 (S=1/40)

SE120 (図 14、図版 9)

調査区西端で検出した井戸である。直径 240cm 前後を測り、円形を呈する。GL-280cmまで掘削したが、井戸底部を確認できず、工事との関係上断ち割りもできなかつたため正確な深さ等は不明である。井戸枠は確認できなかつたが、断面の観察からわずかに掘方が確認できたことから、有機質の枠材を使用していたと思われる。埋土は下位に木製品を大量に含む黒褐色細砂 (6) が堆積し、中位に地山ブロックを多く含む人為的埋土 (4・5) が、上位に地山ブロックと炭化物を多量に含む人為的埋土 (1・2・3) がそれぞれ堆積していた。中央には節を抜いた竹筒が立てられていた。

下層から多種多様な木製品が大量に出土したが、籌木と思われる端部を削った小型の板状木製品が圧倒的に多く、本遺構は井戸としての機能を終えたのち便所として使用された可能性も考えられる。最上層の出土遺物から、12世紀前半頃の埋没が考えられる。

土坑**SK013 (図 15、図版 10)**

調査区南東隅で検出した不整形な土坑である。重複関係から SD001 に先行すると考えられる。大半が調査区外のため詳細は不明である。最深部の深さは約 20cm を測り、断面形態浅い皿型を呈する。埋土は焼土と炭化物を多く含む中粒砂で、大量の土師器皿を含む。土師器皿の出土状況に規則性はみられず、まとめて投棄されたと考えられる。

埋土内より 13世紀前半の遺物が出土した。

SK056 (図 16)

調査区中央付近で検出した土坑である。重複関係から SK090 に先行すると考えられる。平面形態圓丸方形を呈し、直径 145cm、深さ 40cm を測り、断面形態「U」字形を呈する。埋土はいずれも地山ブロックを多く含む人為的埋土であるが、上層は焼土と炭化物をやや多く含む。

埋土内より 13世紀後半～末頃の遺物が出土した。

SK060 (図 17、図版 10)

調査区中央付近で検出した土坑である。長軸 185cm、短軸 93cm、深さ 15cm を測る開丸長方形を呈し、断面形態逆台形を呈する。埋土はいずれも地山ブロックを含む人為的埋土であるが、中層は炭化物を多く含む。

埋土内より 12世紀中葉頃の遺物が出土した。

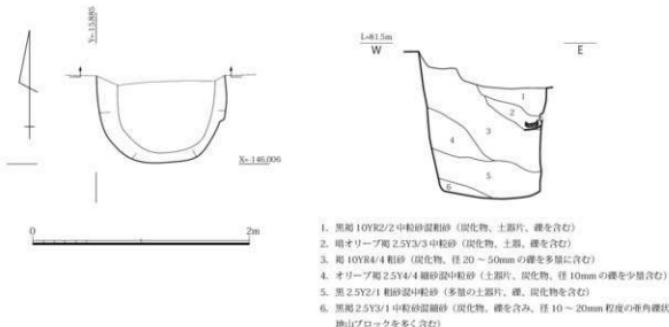


図 13 SE071 平面・土層断面図 (S=1/40)



図 14 SE120 平面・土層断面図 (S=1/40)

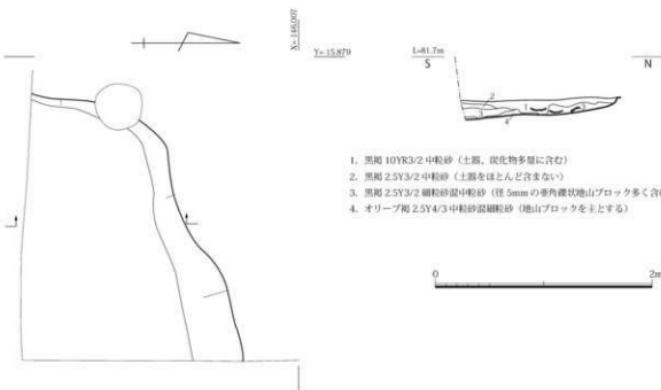


図 15 SK013 平面・土層断面図 (S=1/40)

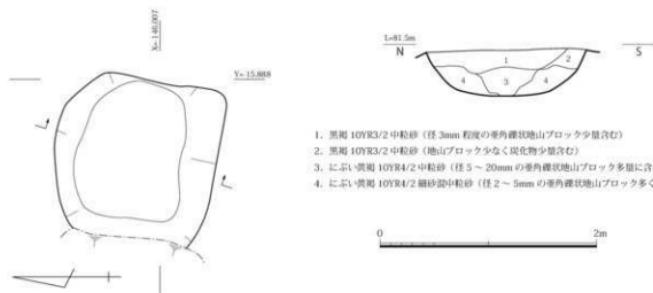


図 16 SK056 平面・土層断面図 (S=1/40)

(2) 出土遺物

建物

SB130 出土遺物 (図 18)

土師器皿 (10 ~ 16) 10 は小皿である。口縁端部にわずかに面を持ち、胎土は橙褐色で雲母を含む。

11 ~ 15 はいずれも橙褐色で雲母を含む胎土を有し、胴部の強いヨコナデによって体部が外反気味となる。13 の内面には板状工具の痕跡が残る。16 は深手のもので、口縁部は二段にナデ調整する。

瓦器椀 (17) 内面粗いヘラミガキを施すが、外面にはヘラミガキがみられず、指頭圧痕が顕著に残る。三段階 C 型式のものである。

軒平瓦 (18) 連珠文軒平瓦である。瓦当部は彌貼り付けで成形する。平瓦部は成形台を使用していると考えられ、凹面にハナレ砂が残る。

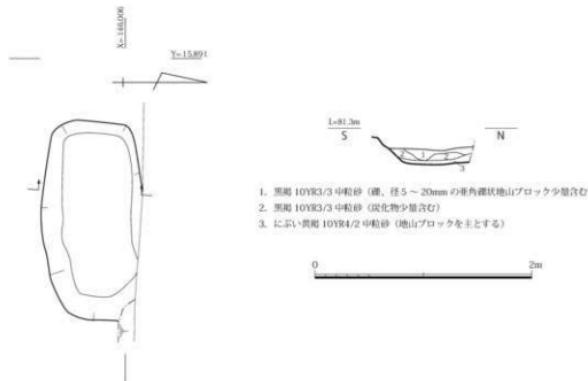


図 17 SK060 平面・土層断面図 (S=1/40)

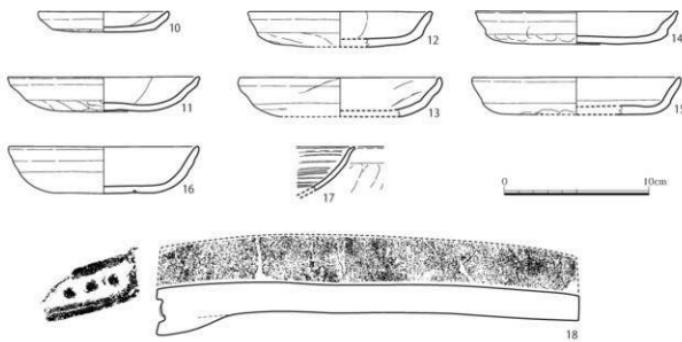


図 18 SB130 出土遺物実測図 (S=1/3)

10～17が柱抜き取り痕、柱痕跡から、18は柱掘方から出土しており、土器類は13世紀中葉、瓦は13世紀前半頃のものである。

溝

SD001 出土遺物 (図 19～21、図版 17～20)

【褐色土出土遺物】

土師器皿 (19～30) 19～26はA群 (赤色系)、27～30はB群 (白色系) のものである。19・20は橙褐色で雲母を多く含む胎土を有し、底部を上方へ押し上げる。底体部境界付近は丸みを持つ。

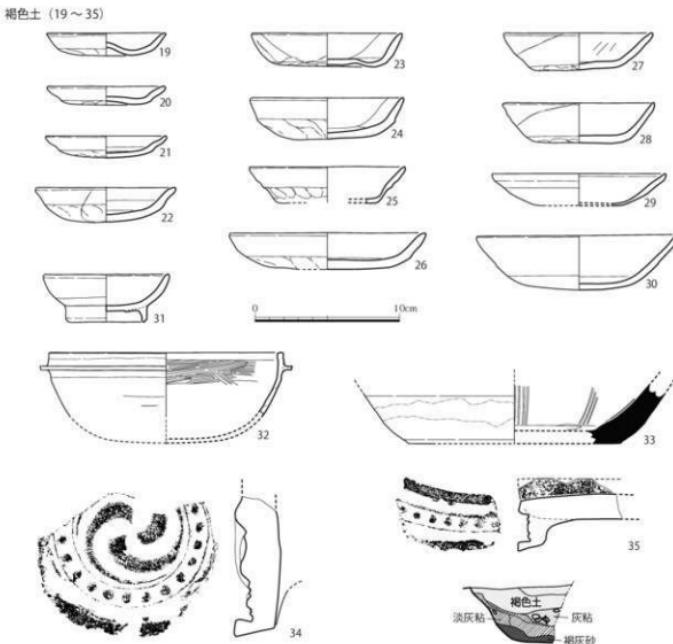


図19 SD001出土遺物実測図(1)(S=1/3)

21・22は丸みの強い体部と、ナデによって外反する口縁部を有する。22は厚みを持ち口径が大きく、胎土焼成も他と異なるため、他地域からの搬入品の可能性がある。23・24は体部の立ち上がりがやや強い。23は雲母が少なく赤色粒を多く含む。25は体部中位付近を強いコビオサエによって成形し、口縁部がわずかに膨らむ。26はやや厚手で、胎土は淡橙色で赤色粒を多く含む。27・28は白色の胎土を持ち、いずれも直線的な体部と平坦な底部を持つ。体部に粘土紐巻き上げ痕を有する。29は他に比してさらに白色精良な胎土を持つ。器壁は薄く、口縁部がわずかに肥厚する。京都産の搬入品と考えられる。京都における年代観（平尾2019）によれば7C期のものと考えられ、1320～1350年の暦年代が与えられている。30は口径14cm前後を測る大皿である。胎土は27・28と共に通す。内外面幅広のナデ調整を施し、外面のナデは体部下半に至る。

土師器小碗(31) 手づくね成形で、白色の胎土と大ぶりの貼付高台を有する。見込みに重ね焼きの痕跡などはみられない。

土師器釜(32) 白色の精良な胎土を有し、外面ナデ調整、内面細かいハケ調整を施す。煤の付着などはみられない。

国産陶器擂鉢 (33) 底部のみの破片である。胎土内には黒色粒子を大量に含む。内面には4条一単位の擂目を持つ。備前焼と考えられる。

軒丸瓦 (34) 巴文軒丸瓦である。縁帶は狭く、丸瓦との接合部にはカキヤブリの痕跡がみられる。焼成は灰色で硬質、イブシはみられない。

軒平瓦 (35) 連珠文軒平瓦である。頸貼り付けで成形し、瓦当裏面を縱方向にナデ調整する。二次焼成を受ける。

【灰粘出土遺物】

土師器皿 (36 ~ 56) 36 ~ 50はA群(赤色系)、51 ~ 53はB群(白色系)のものである。36・37は平底で強く立ち上がる体部を有する。胎土には雲母を多量に含む。38 ~ 41はいわゆるへそ皿である。底部は広く押し上げ、口縁部は比較的広くナデ調整する。39の口縁部には煤が付着する。40は暗褐色の胎土で他に比べて暗色である。42は厚手で口縁部を強くナデ調整する。胎土は淡褐色で雲母と赤色粒を多く含み、口縁部には煤が全周する。43は薄手で直線的な体部を有し、口縁部のナデは狭い。口縁部には煤の付着がみられる。44・45は雲母を多く含む淡褐色の胎土を有し、44の口縁部にはやや広い範囲に煤が付着する。46は薄手で直線的な体部を有し、口縁部のナデは狭い。47は口縁部を広くナデ調整する。外底面には板目圧痕を有する。48は比較的整った形態を有し、底部をわずかに押し上げる。口縁部は強くナデ調整する。49は歪みの多い不整形な形状を呈し、口縁部は二段ナデ調整を行う。底部は焼成後に穿孔する。50は口縁部を強くナデ調整する。口径13cm台の赤色系皿は比較的小ない。51 ~ 53は直線的な体部を持ち、底部を押し上げるへそ皿である。京都のものに類似するが、口縁部ナデの幅が広いことから、模倣品と考えられる。54・55はともに直線的な体部を持つ平底のもので、口縁部は底体部境界付近まで広くナデ調整する。56は薄手で、底部を押し出すことによって丸く成形する。内面には被熱痕を有する。

土師器釜 (57・58) 57は白色の精良な胎土を有し、断面は中心が黒色化するサンドイッチ構造を持つ。内面には細かいハケ調整を施す。外面下半には煤の付着が認められる。58は短く折り返す口縁部を持ち、内面に当て具痕が残る。頸部内面には焦げ痕が認められる。

瓦質土器釜 (59) 灰白色の胎土と良好なイブシを施し、内外面ナデ調整によって仕上げる。

瓦質土器火鉢 (60) やや湾曲する体部を持ち、内面および口縁部外側を横方向、体部外側を縦方向にヘラミガキする。体部外側には桜花文の單体スタンプを施す。円形か輪花形であるかは判断できない。

山茶椀 (61・62) いずれも薄手で淡灰色の胎土を有し、高台接地面には粗粒圧痕を有する。共に外面高台内にイトキリ痕を有するが、62の外底面には板目圧痕が確認できる。尾張系第8型式(13世紀末~14世紀前半)のものと考えられる。

土製品 (63) 手づくねの人物である。上下に袴を羽織り、両手で円形の物体を持つ。

軒平瓦 (64) 均等唐草文軒平瓦である。焼成は灰褐色を呈し、粗くイブシがかかる。頸貼り付けで成形し、瓦当裏面には横方向のナデ調整を施す。凹面には布目が確認できる。

【淡灰粘出土遺物】

土師器皿 (65 ~ 71) 65 ~ 69はいずれも淡褐色で雲母を大量に含む胎土のものである。65は二次焼成を受ける。66は底部に板目圧痕を有する。67は厚手で底体部境界の稜が強く、内面には全面にハケ調整を施す。68は内面にわずかに板状工具痕が観察できる。69は底部をわずかに押し上げ、口縁部は二段にナデ調整を行う。70は赤褐色の胎土を有し、内外面にユビオサエ痕を顕著に持つ。外底面には板目圧痕を有する。71は白色系の胎土を有する。やや厚手で、外底面には板目圧痕を有する。

灰粘 (36 ~ 64)

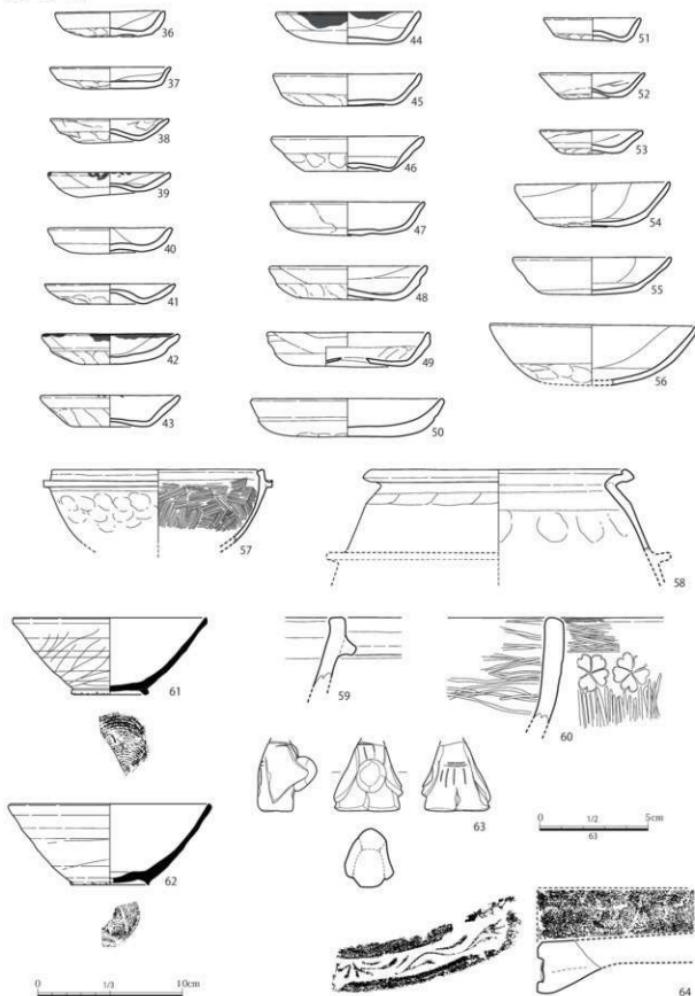


図 20 SD001 出土遺物実測図 (2) (S=1/2・1/3)

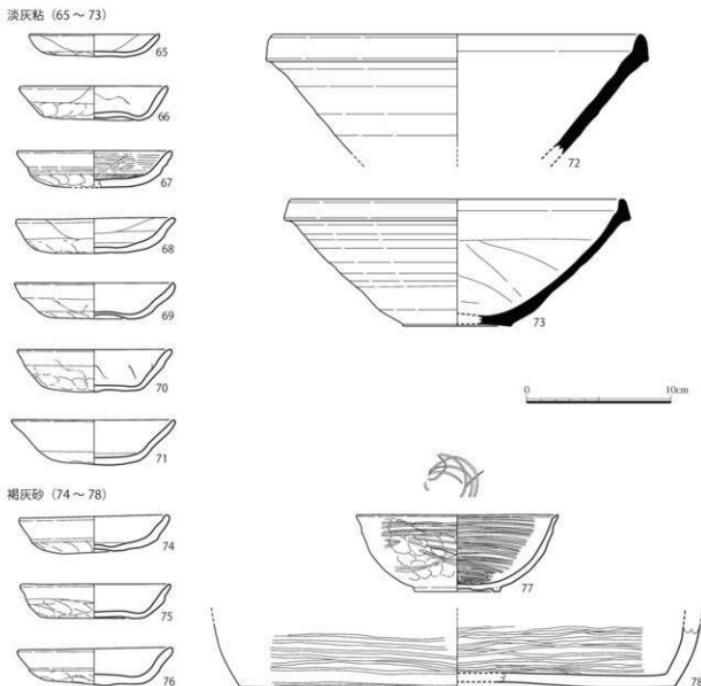


図21 SD001出土遺物実測図(3) (S=1/3)

須恵器鉢 (72・73) 72は焼成不良で土師質を呈し、内外面二次焼成による煤が付着する。内面は使用のため平滑となる。73は内外面右回転のロクロ調整を行い、外底面には植物圧痕を有する。内面は使用のため平滑となる。いずれも東播系のものである。

【褐灰砂出土遺物】

土師器皿 (74～76) いずれも淡褐色で雲母を多く含む胎土を有し、76には粘土紐の痕跡が顕著に残る。

瓦器椀 (77) 器壁の薄さの割には器高が高く、外面のヘラミガキも体部下半に及ぶ。Ⅲ段階A型式新段階のものと考えられる。

瓦器鉢 (78) 外面および体部内面に横方向のヘラミガキ、内底面に一定方向の密なヘラミガキを施し、外底面にはハナレ砂が確認できる。イブシは良好である。

これらの遺物から褐色土が14世紀前半、灰粘・淡灰粘が14世紀初頭、褐灰砂が13世紀末～14世紀初頭の埋没年代を想定できる。

SD040 出土遺物 (図 22)

弥生土器甕 (79) 底部のみの破片である。外底面をドーナツ状に成型し、外面にはわずかにタタキ痕を残す。

土師器皿 (80) 「て」字状口縁の皿である。器壁は4mm程度と薄い。全体が二次焼成を受ける。

黒色土器椀 (81) 内外面黒化処理を行うB類のものである。胎土には金雲母を大量に含み、内底面斜格子、外底面ジグザグ状のヘラミガキを施す。

これらの遺物は弥生土器を除き 11世紀中葉のものである。

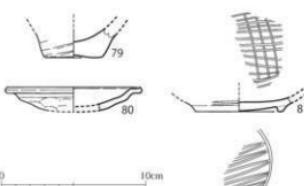


図 22 SD040 出土遺物実測図 (S=1/3)

井戸**SE071 出土遺物 (図 23, 図版 20)****【黒灰土出土遺物】**

土師器皿 (82 ~ 96) 82・84・85・87・89は白色系の胎土を持つ。丸みを持つ整った形態を有し、口縁端部はシャープに收める。89は内面に被熱痕を有する。83・86・88・90・96はいずれも褐色の胎土を有する。小皿 (82 ~ 88) は82が口縁端部を丸く收める整った形状を持ち、底部をわずかに押し上げる以外は口縁端部に面取りを行う。86・88は口縁部に油煙の付着がみられる。大皿 (89 ~ 96) はいずれも 15cm 前後の口径を有し、89・90が口縁端部を丸く收める以外は口縁端部を面取りする。92・93・96は口縁端部を上方へ引き上げる。

【褐砂出土遺物】

輸入白磁碗 (97) IV類のものである。湾曲する体部と薄い玉線を形成する口縁部を有する。内面には横方向の細かい擦痕がみられる。

【灰粘土出土遺物】

土師器皿 (98 ~ 101) 98は橙褐色の胎土を有し、口縁端部には面取りを施す。99は白色の胎土を有し、口縁端部をわずかに外反させる。100・101はいずれも褐色の胎土を有し、口縁端部は面を形成してわずかに上方へ引き上げる。

古式土師器壺 (102) 底部のみの破片である。桃白色の精良な胎土を有し、表面劣化のため調整等は不明である。

瓦器椀 (103) 比較的薄手で、口縁部はナデにより外反する。体部外面は不規則なヘラミガキを施し、掌状圧痕を多く有する。Ⅲ段階 A型式古段階のものである。

これらの遺物は古式土師器を除き 12世紀第3四半期頃のものと考えられる。

SE120 出土遺物 (図 24 ~ 28, 図版 20 ~ 25)**【暗褐土出土遺物】**

土師器皿 (104 ~ 114) 105、107、113を除き灰白色の胎土を有する。104は口縁端部を丸く收め、口縁部の一部には粘土紐の接合痕が残る。105は体部に粘土紐の巻き上げ痕を、内面には板状工具の痕跡を残す。106は胎土内に雲母片を多く含み、体部には粘土紐巻き上げ痕を残す。107は、いわゆるコースター状の皿である。粘土紐の接合部分で破断する。108は粘土紐巻き上げ痕を残し、一部に

黒灰土 (82 ~ 96)

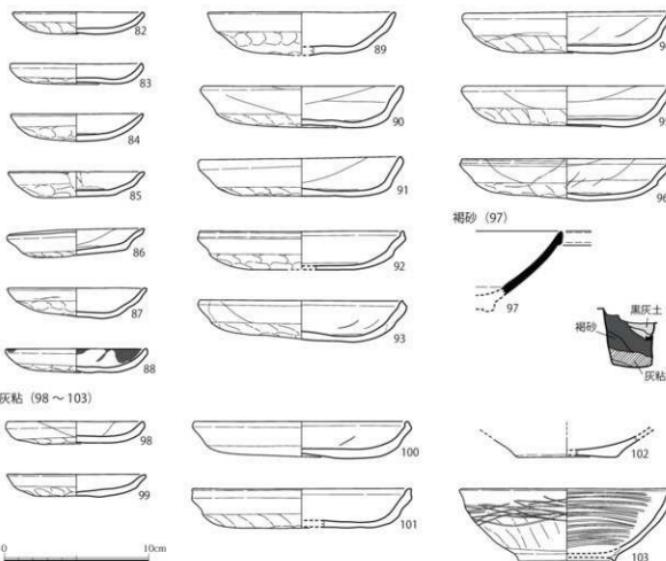


図23 SE071 出土遺物実測図 (S=1/3)

被熱痕が残る。109は粘土紐巻き上げ痕を残し、口縁部には煤が付着する。110は底部に焼成後の穿孔がみられる。111・112は口縁一部ナデ、113・114は二段ナデを施すが、二段ナデはそれほど明瞭でない。

須恵器體 (115) 右回転の回転ナデを施し、焼成は灰色で堅緻である。使用痕は明瞭でない。東播系のものである。

瓦器楕 (116) 外面四分割のヘラミガキを行い、内底面には3往復の粗いジグザグ暗文を施す。II段階B型式のものである。

瓦器皿 (117・118) 117は口縁部が強いナデにより外反する。内面8往復のジグザグ暗文を施し、体部内面に闊線ミガキを行う。イブシは良好である。118はミニチュアの皿である。内外面ヘラミガキを施し、漆黒に焼される。

瓦器不品 (119・120) 119はやや湾曲する底面を持ち、体部には3条の沈線を有する。外底面が摩滅するため、現状の形状で図化を行ったが、蓋状のものである可能性も残る。120は雲母を大量に含む胎土を有し、外面にはハナレ砂の使用が確認できることから、特殊な瓦である可能性もある。

泥塔 (121) 橙褐色の精良な胎土を有する。平面円形で、中心には細い棒状工具の挿入痕がみられる。

合わせ型成形で、正面には釈迦・多宝二仏を象ったと思われる表現がある。外底面は型に粘土を押し込んだ際のユビオサエの痕跡が顕著である。

埴羽口I (122) 推定直径 9cm 前後を測る。スサ入り粘土で作られ、内外面顕著に被熱する。金属の付着等は確認できない。

【褐灰土出土遺物】

土師器皿 (123 ~ 125) 123 は雲母を多く含む淡褐色の胎土を有し、帯状の粘土を巻き上げた痕跡が残る。124 は 123 と同様の胎土を有し、口縁部を 2 回に分けてナデ調整したのち、広く仕上げナデする。125 は口縁部を二段ナデで仕上げ、外底面にはわずかに板目圧痕を残す。

瓦器椀 (126 ~ 128) 126 は内面に隙間のはほとんどないヘラミガキ、外面に隙間のある分割ミガキを施す。I 段階 D 型式もしくは II 段階 A 型式のものである。127 は外面ヘラミガキが上端にわずかにみられるのみで、内底面にはジグザグ状暗文を有する。I 段階 D 型式のものである。128 は 10 回転以上の連結輪状暗文を有する。II 段階 A 型式のものである。

瓦器皿 (129) 内外面丁寧なユビオサエで調整し、体部には圓線状のヘラミガキ、内面見込み部には 13 往復程度のジグザグ状暗文を有する。

須恵器鉢 (130・131) 130 は灰色で硬質に焼き上がり、右回転のロクロ成形を行う。内面は使用のため摩滅する。131 も 130 と同様の焼成を持ち、口縁部は内側に小さく突出する。右回転のロクロ成形を行う。いずれも東播系のものである。

瓦器鉢 (132) 強く渦曲する体部を有し、内外面密なヘラミガキを行う。口縁端部は内側が摩滅する。内面に被熱痕などは確認できない。

輸入白磁椀 (133・134) 133 はⅦ-2 類のものである。内面に使用による傷などはみられない。134 は II-1 類のものである。胎土中に微細な気泡を含む。

石鍋 (135) 滑石製で縦耳タイプのものである。内外面被熱痕を有し、補修や再利用痕は確認できない。
【黒粘出土遺物】

土師器皿 (136 ~ 138) 136 は雲母を含む淡褐色の胎土を有し、内面には板状工具によるナデの痕跡を有する。137 は赤色粒を含む淡灰褐色の胎土を有し、口縁部を二段ナデ調整する。口縁端部には複数箇所に煤の付着が確認できる。138 は雲母を含む淡褐色の胎土を有し、口縁部を二段ナデ調整する。

白色土器皿 (139) 削り出し高台を持つ皿である。右回転の回転台で成形し、内面には二次焼成の痕跡が確認できる。

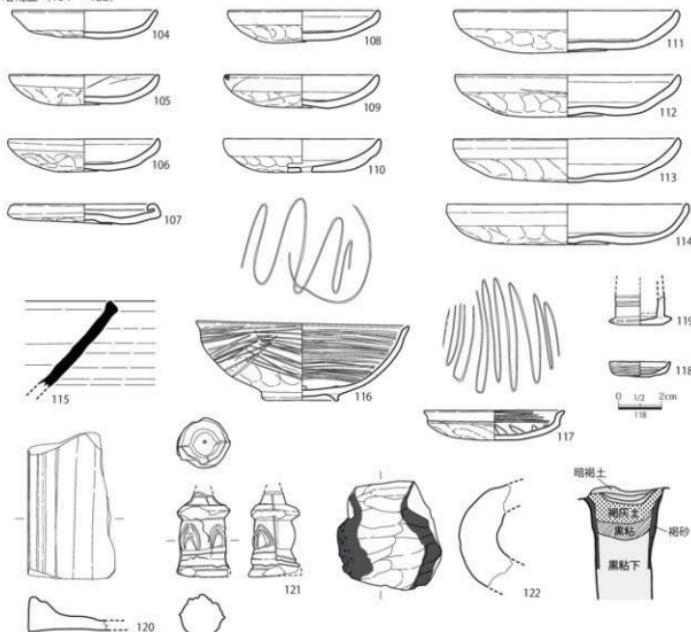
瓦器椀 (140・141) 140 は内外面密なヘラミガキを施し、イブシは良好である。I 段階 D 型式もしくは II 段階 A 型式のものである。141 は断面三角形のやや雑な高台を有し、外面二次焼成を受ける。I 段階 A 型式のものである。

輸入白磁椀 (142・143) 142 は IV 類のものである。右回りロクロで調整される。高台接地部は摩滅が著しく、内面にも使用痕と考えられる横方向の擦痕が確認できる。143 は左回りロクロで調整され、高台接地部はわずかに摩滅するが顕著ではない。

不明石製品 (144) 花崗閃緑岩の円礫であり、上面に叩打痕が確認できる。全面著しく被熱する。

木製品 (145 ~ 148) 145 は木槌である。半分以上を焼失し、打撃部には砂粒が貫入している。146 は側縁に切れ込みを持つ。切れ込みに摩滅などは確認できない。用途は不明である。147 は羽子板状の形状を持ち、片面に格子を刻む。用途不明である。148 は箸である。直径 7mm 前後の棒状を呈し、断面は四角形を基調に一部で五角形を呈する。

暗褐土 (104 ~ 122)



褐灰土 (123 ~ 131)

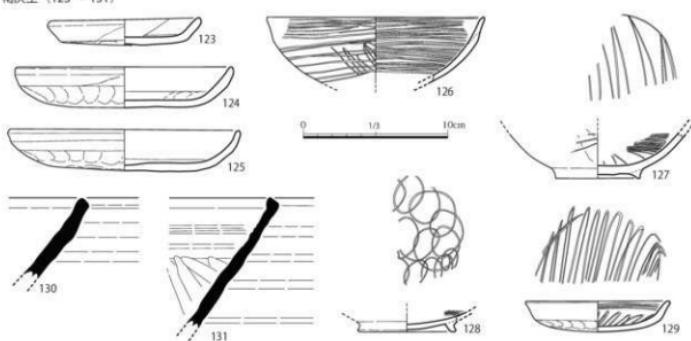


図 24 SE120 出土遺物実測図 (1) (S=1/2・1/3)

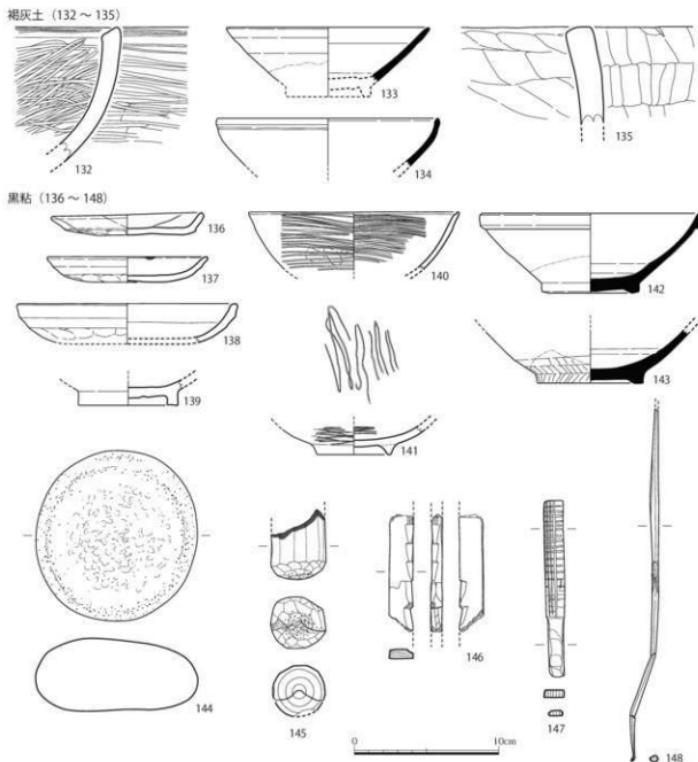


図25 SE120 出土遺物実測図(2) (S=1/3)

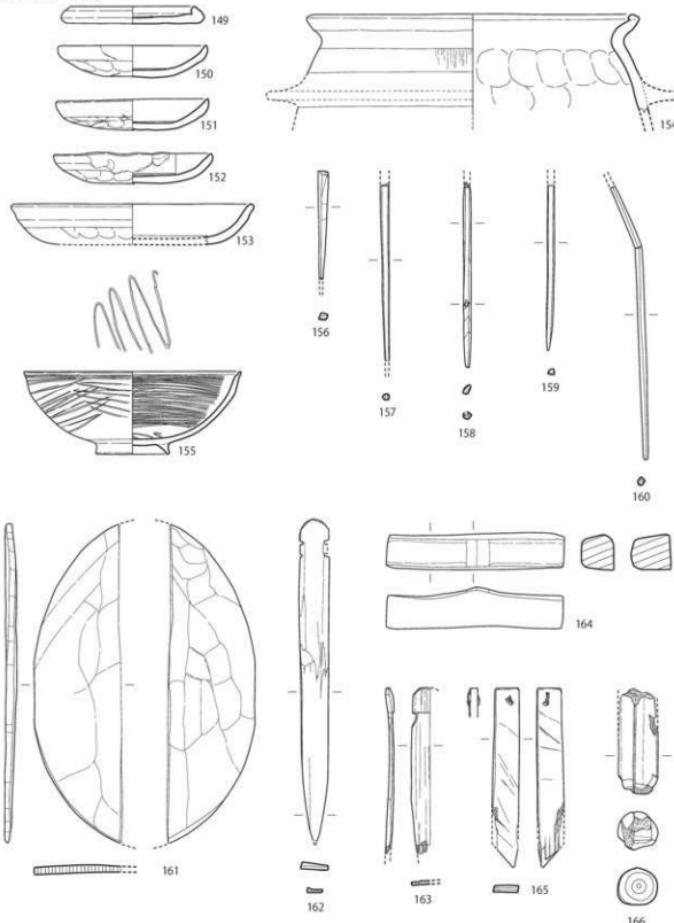
【黒粘下層出土遺物】

土師器皿(149～153) 149は淡灰褐色の胎土を有し、口縁部は三角形を呈する。150・151は淡褐色の胎土を有し、口縁端部を上方へ引き上げる。外面には粘土紐巻き上げの痕跡が確認できる。152は内面に爪状の搔き傷があり、口縁部の一部は破損後粘土を充填して修理した痕跡が確認できる。153は灰白色の胎土を有し、口縁部は二段にナデ調整する。京都産4C期のものである。

土師器釜(154) 暗褐色で砂粒を多く含む胎土を有する。鍔は剥離するが、剥離面にも煤が多量に付着することから、鍔を失った状態で一定期間使用されたものと考えられる。

瓦器椀(155) 内面隙間のない密な團線ミガキ、外面は隙間の多い3分割の分割ミガキを行う。内底面には4往復程度のジグザグ状暗文を有する。II段階A型式のものである。

黒粘下 (149 ~ 166)



0 10cm

図 26 SE120 出土遺物実測図 (3) (S=1/3)

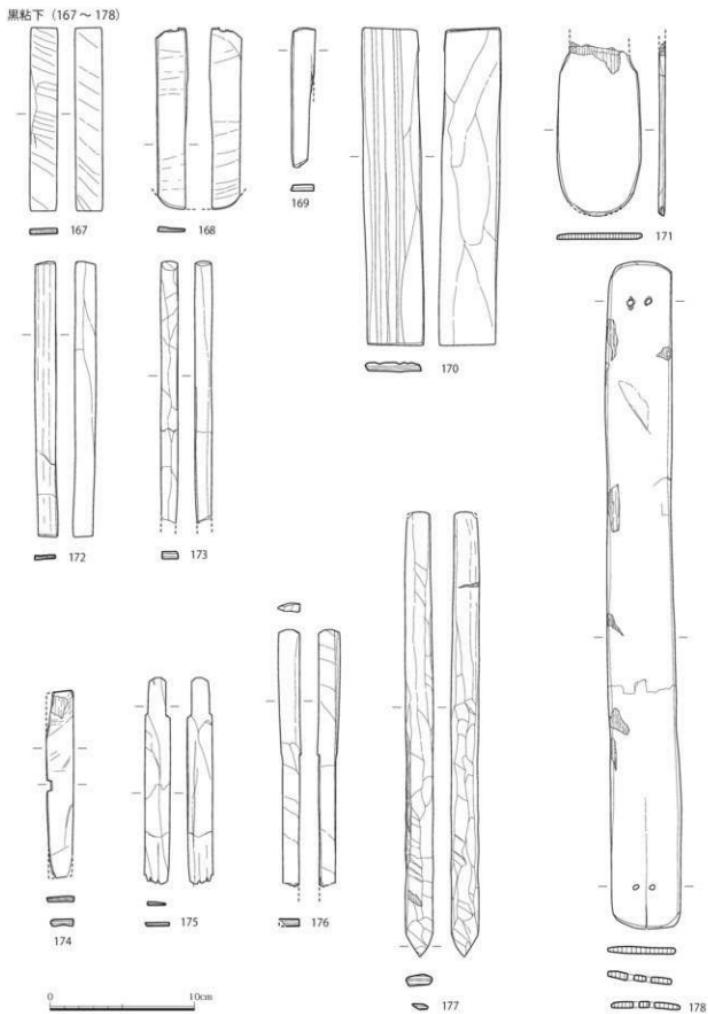


図27 SE120 出土遺物実測図 (4) (S=1/3)

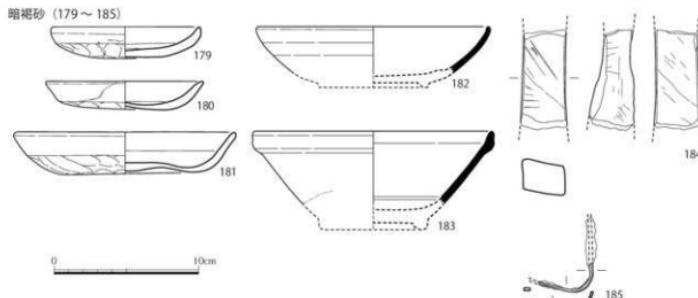


図28 SE120出土遺物実測図(5)(S=1/3)

木製品（156～178） 156～160は箸である。いずれも折って投棄されているが、156は切断面を丁寧に面取りする。159は全面丁寧に面取りを行う。161は曲物底板である。全面丁寧にヤリガンナ仕上げる。162は斎串形木製品である。墨書等は確認できない。163は荷札状木製品である。墨書等は確認できない。164は柄状木製品である。全面摩滅し、柄としての使用が考えられるが、具体的な本来形状は不明である。165は笠状木製品である。上部の小穴には樹皮が残る。166は木槌である。下端は叩打により砂粒が貫入する。167～178は不明木製品である。167～169、172～176は割裂した後端部を丁寧に面取りして仕上げており、籌木としての使用が考えられる。178は両側に一对の円孔を持ち、しなりを利用して使用した可能性が考えられるが詳細は不明である。

【暗褐色砂出土地】

土師器皿（179～181） 179は口縁端部を上方へ引き上げ、底部をわずかに窪ませる。180は褐色の胎土を有し、口縁端部をわずかに外反させる。181は雲母を多く含む褐色の胎土を有し、底部は広く窪める。

輸入白磁皿（182） VII類のものである。左回りのロクロで成形され、使用痕等はみられない。

輸入白磁碗（183） IV類のものである。黒色粒子を多く含む釉薬を内面全面と外面上半にかける。使用痕等はみられない。

砥石（184） 白色凝灰岩製である。石材内には炭化物が混入し、折損面以外を全面使用する。

不明銅製品（185） 幅5mm程度の板状製品である。湾曲が本来のものかどうかは不明である。

これらの遺物は黒灰土が12世紀前半、それ以外は11世紀末～12世紀初頭の年代観が与えられる。

土坑

SK013出土遺物（図29、図版25）

土師器皿（186～196） 186・191は灰白色の胎土を有するもので、大和の系譜はないものである。京都からの搬入品の可能性が高い。京都の編年觀では平尾編年6B期（1200～1230年）もしくは6C期（1230～1260年）に相当しよう。187は口縁部に明確な面取りを有し、189は胎土中に赤色粒を多く含む。192は口縁部を多段にナデ調整し、口縁部全体に煤が付着する。194は口縁部を弱く面取りし、

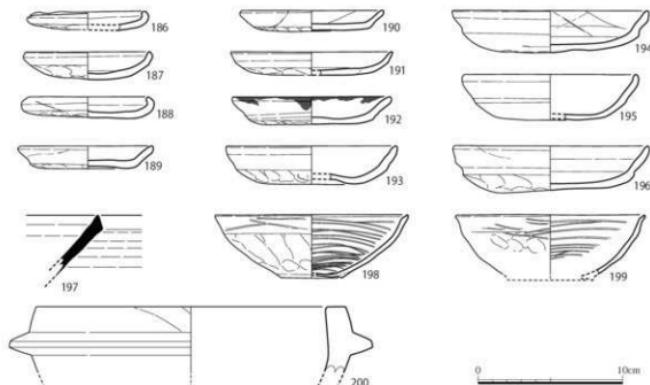


図 29 SK013 出土遺物実測図 (S=1/3)

内面には工具痕が残る。195 雲母を多く含む淡赤褐色の胎土を有し、口縁部は弱く上方へ引き上げる。196 は淡褐色の胎土を有し、口縁部を二段ナデ状に調整する。

須恵器鉢（197） シャープな口縁部を持ち、口縁部のみ黒化する。右回転のロクロ成形を行う。東播系のものである。

瓦器椀（198・199） いずれも内外面良好なイブシを施し、口縁部外面にわずかにヘラミガキが確認できる。Ⅲ段階 C 型式のものである。

石鍋（200） 滑石製のもので、白色の素材を利用する。下面破断部に摩滅が確認でき、破損後も何らかの利用が行われたものと考えられる。鋸等による切断は確認できない。

これらの遺物は東播系須恵器（197）が若干遡るもの、概ね 13 世紀中葉の年代観が与えられる。

SK056 出土遺物（図 30）

土師器皿（201～207） いずれも橙褐色で雲母を多く含む胎土を有する。201 は粘土紐巻き上げで成形するが、底部付近に粘土紐の隙間が生じて穴が開く。202 はやや厚手で口縁部を面取り状に二段にナデ調整する。203 は体部に粘土紐の巻き上げ痕を残す。205 は丸みを帯びた杯形、206 は立ち上がりの強い箱形の形状を有する。207 は台付皿である。断面三角形の貼付高台を有し、胎土は他の土師器皿に比して精良である。

土師器釜（208） 表面灰白色、断面黒色を呈し、精良な胎土を有する。外面に被熱痕などは確認できない。輪入青磁碗（209） Ⅱ類のものである。淡緑色の釉を施し、施釉は一部外底面におよぶ。外底面には一部漆状の黒色物が付着する。使用痕等はみられない。

軒平瓦（210） 連珠文軒平瓦である。瓦当は包み込みで成形され、凹面には布目が残る。

これらの遺物は 13 世紀後半～末頃のものである。

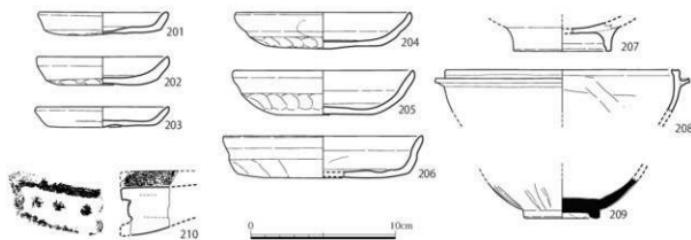


図 30 SK056 出土遺物実測図 (S=1/3)

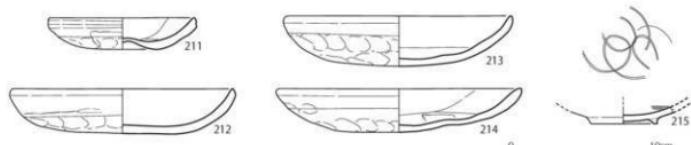


図 31 SK060 出土遺物実測図 (S=1/3)

SK060 出土遺物 (図 31)

土師器皿 (211 ~ 214) 211は淡褐色の胎土を有し、口縁部を強いナデによって引き上げ気味に面取りする。外底面を押圧によって押し上げる。内外面被熱痕が確認できる。212・213はいずれも口縁部を引き上げ気味に面取りし、212には粘土紐巻き上げの痕跡が確認できる。

瓦器椀 (215) 断面三角形の低い貼付高台を有し、内底面には3回転以上の連結輪状暗文を有する。II段階B型式のものである。

これらの遺物は12世紀中葉のものである。

第5節 室町時代から戦国時代の遺構と出土遺物

(1) 檢出遺構

土坑

SK070 (図 32、図版 11)

調査区中央付近で検出した土坑である。直径100cm、深さ100cm以上を測る円形を呈するが、大半が調査区外のため詳細は不明である。埋土はいずれも亜角礫状地山ブロックを多量に含む人為的埋土である。上層には径5mm前後の焼土を多く含む。

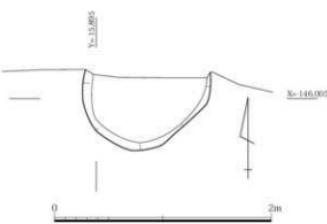
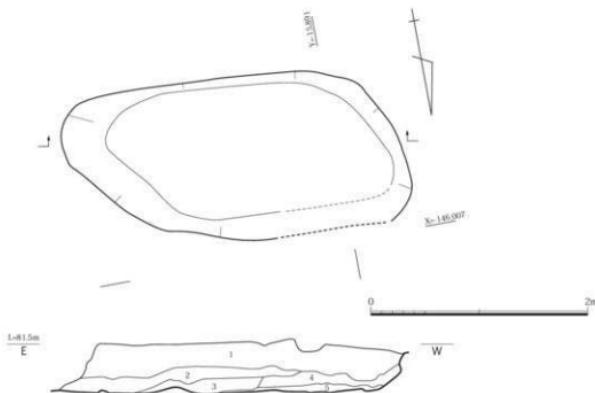


図 32 SK070 平面図 (S=1/40)



1. 黄褐色 2.5Y5/6 中粒砂質礫砂（少量の炭化物と粒径 10 ~ 50mm の礫を多量に含む）（現砂）
2. 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 粗砂（土器片、粒径 30mm の礫、粒径 10 ~ 30mm の亜角礫状地山ブロックを含む）（現砂）
3. オリーブ褐色 2.5Y4/6 粗砂（粒径 10mm 前後の亜角礫状地山ブロックと僅少量瓦片）（灰砂）
4. オリーブ褐色 2.5Y4/6 中粒砂質粗砂（礫、土器片、瓦、粒径 5 ~ 20mm の亜角礫状地山ブロックを含む）（灰砂）
5. オリーブ褐色 2.5Y4/4 粗砂（炭化物、土器片、亜角礫状地山ブロックを含む）（灰砂）

図 33 SK090 平面・土層断面図 (S=1/40)

SK090 (図 33、図版 11)

調査区中央南寄りで検出した土坑である。長軸 325cm、短軸 150cm、深さ 45cm 前後を測る楕円形を呈し、断面形態は立ち上がりの強い箱型を呈する。底部形状は比較的平坦である。埋土はいずれも礫と亜角礫状地山ブロックを含む人為的埋土であるが、特に上層には礫が顕著に含まれるほか、底部付近には炭化物が少量みられる。

埋土内より 15 世紀中葉頃の遺物が出土した。

SK094 (図 34、図版 12)

調査区西側で検出した土坑である。直径 140cm、深さ 50cm 前後を測る円形を呈し、断面形態は立ち上がりの強い箱型を呈する。北東側はオーバーハンプする。土坑中央部には直径 20cm、深さ 5cm の円形の窪みがあり、土坑中央東寄りの底部付近からは木片が出土している。埋土は大半が礫や地山ブロックを多く含む人為的埋土である。

埋土内より 15 世紀後半頃の遺物が出土した。

SK103 (図 35、図版 13)

調査区西寄りで検出した土坑である。重複関係から SX110 に先行すると考えられる。長軸 130cm 以上、短軸 105cm、深さ 50cm 前後を測り、断面形態は立ち上がりの強い箱型を呈する。西半はオーバーハンプする。底部は平坦である。埋土は最下層（4）にラミナが確認できるが、それ以外は亜角礫状の地山ブロックを含む人為的埋土である。

埋土内より 15 世紀前半～中葉の遺物が出土した。

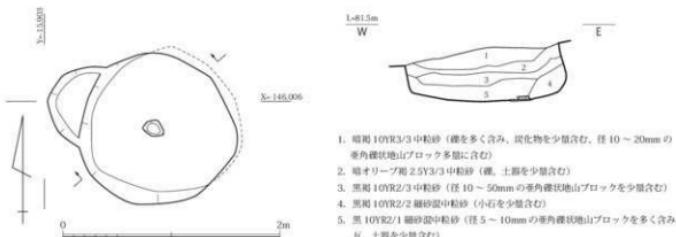


図 34 SK094 平面・土層断面図 (S=1/40)

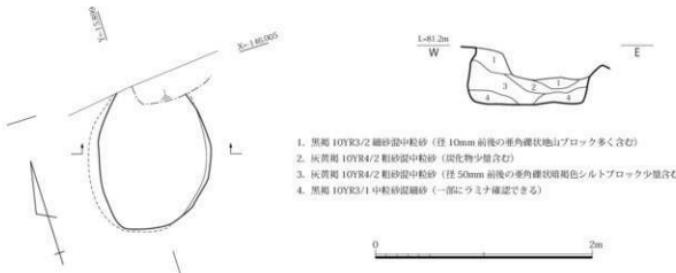


図 35 SK103 平面・土層断面図 (S=1/40)

石室

SX110 (図 36、図版 13・14)

調査区西寄りで検出した石積を持つ土坑（石室）である。重複関係から SK103 に後出するものと考えられる。掘方東西 145cm、深さ 35cm 前後を測る方形を呈し、南半は SX100 によって破壊される。花崗岩礫の石積み二段分が残存する。下段は長軸 35～45cm の大型の石材、上段は長軸 30cm 内外の一回り小さな石材を使用する。石組み内法は 80cm 前後を測る。埋土は大半が薄層を介在する自然堆積で、最上層（1）には炭化物を多く含む。

埋土内より 16 世紀中葉～後半頃の遺物が出土した。

(2) 出土遺物

土坑

SK070 出土遺物 (図 37、図版 25)

土師器皿 (216) 淡褐色の精良な胎土を有し、体部にはユビオサエの痕跡が明瞭に残る。

瓦質土器 (217) 厚手のもので、鍋もしくは鉢と考えられる。内外面イブシは良好だが、断面は全面黒化している。ナデのみで調整し、ヘラミガキなどは確認できない。

国産陶器擂鉢 (218) 信楽焼のものである。淡橙色を呈し、胎土中に大粒の長石を多く含む。内面に

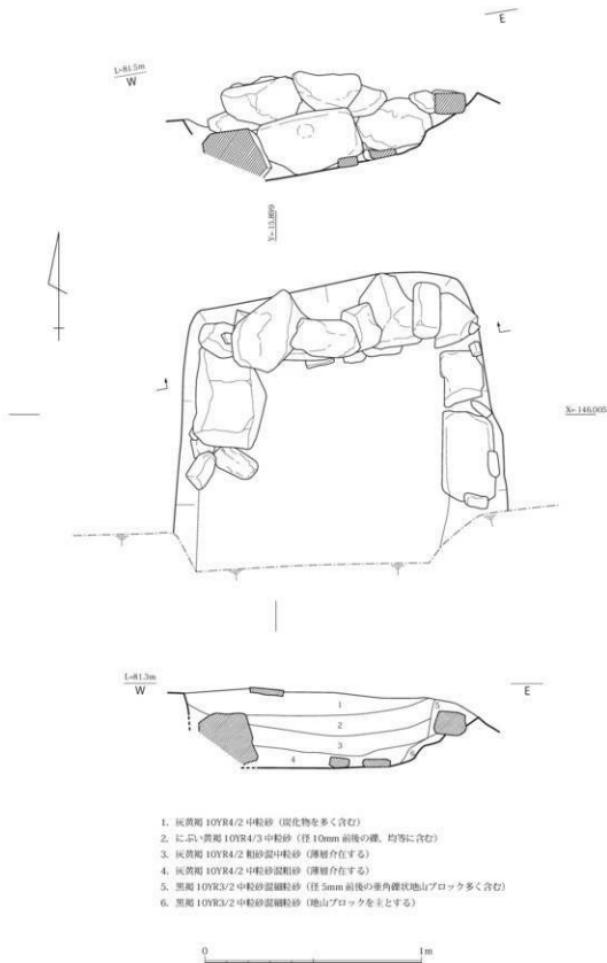


図 36 SX110 平面・立面・土層断面図 (S=1/20)

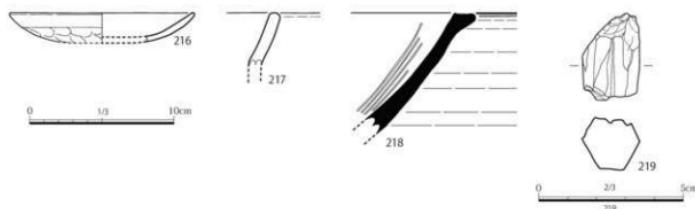


図37 SK070 出土遺物実測図 (S=1/3・2/3)

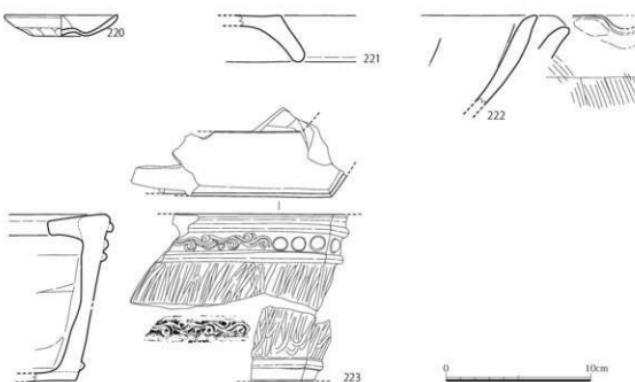


図38 SK090 出土遺物実測図 (S=1/3)

は4条以上の描目を刻み、使用痕が顕著である。2期中段階～新段階古層（16世紀）のものである。
 石製品（219）水晶（石英）製のものである。結晶の上端・下端を打ち欠き、側面に線刻を刻む。加工用の素材と考えられる。

SK090出土遺物（図38、図版25）

土師器皿（220）淡褐色で雲母を含む胎土を有し、外底面を環状にユビオサエして底部を押し上げる。

瓦質土器蓋（221）一部にイブシがかかる土師質焼成のものである。天井部外面にはハナレ砂が付着する。

瓦質土器擂鉢（222）外面縱方向の一次ハケ調整痕が残り、イブシにむらが多い。内面の使用痕は顕著でない。E型式のものである。

瓦質土器火鉢（223）六角形もしくは八角形の火鉢である。内面ナデ調整、外面ヘラミガキのち全面研磨を行う。貼付二重突帯の間に唐草文（雲文）と連珠文を組み合わせたスタンプ文を施し、外底面にはハナレ砂が残る。底部には脚の剥離痕が残る。

これらの遺物は15世紀中葉を前後する時期のものである。

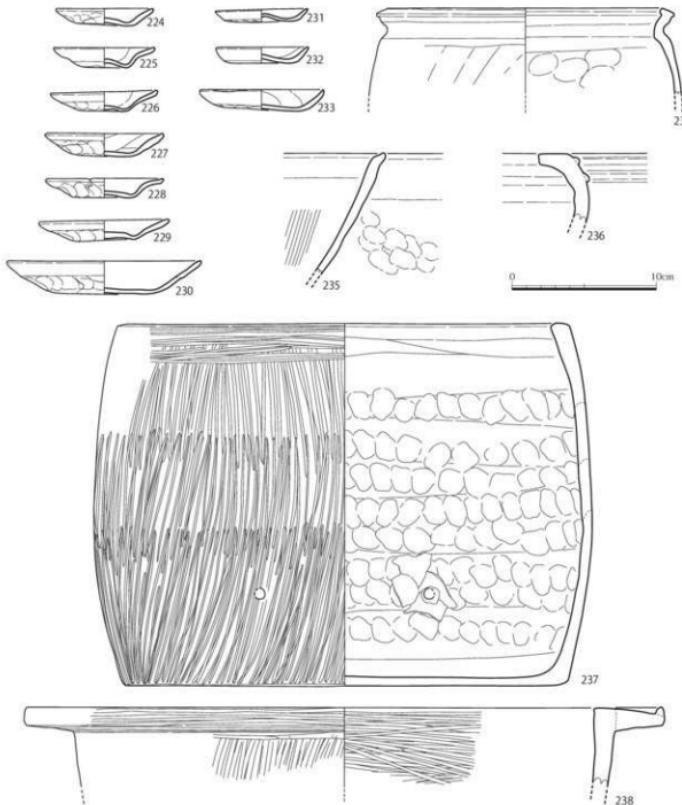


図 39 SK094 出土遺物実測図 (1) (S=1/3)

SK094 出土遺物 (図 39・40、図版 26)

土師器皿 (224~233) 224~229はA群(赤色系)、231・232はB群(白色系)、230・233はC群(褐色・平底系)のものである。A群はいずれも褐色化している。228は体部中央のユビオサエが著しく、227には粘土紐巻き上げの痕跡が残る。230は淡褐色で精良な胎土を有し、体部には粘土紐の痕跡が残る。
土師器釜 (234) 淡褐色の胎土と厚手の器壁を有し、外面にはわずかに被熱痕を残す。I型 I・2型式のものである。

瓦質土器擂鉢 (235) 外面一次ハケを丁寧にナデ消し、内面 8 条一単位の擂目を施す。内面は使用に

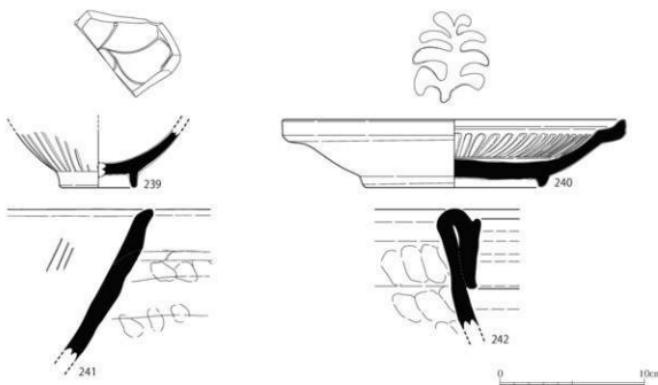


図 40 SK094 出土遺物実測図 (2) (S=1/3)

より著しく摩滅する。E型式のものである。

瓦質土器風炉(火鉢)(236) やや灰色かかった胎土を有し、外面全面を研磨する。2条の貼付突帯を施すが、突帯間にスタンプはみられない。

瓦質土器深鉢(237) 太鼓形の器形を有し、内面ユビオサエのちナデ調整、外面ナデ調整のち縦方向に3分割の細いヘラミガキ調整を行い、最後に口縁部を横方向にヘラミガキする。焼成、イブシともに良好である。体部下半に焼成後、外面から打撃することで円孔を穿つ。底部外面にはハナレ砂が確認できる。

瓦質土器鉢(238) 金属器写しの鉢である。内外面全面ヘラミガキを施すが、口縁部裏面のみヘラケズリで仕上げる。焼成、イブシともに良好である。

輸入青磁碗(239) 細蓮弁文碗である。内面には線描によって割花文を描く。外底面のみ露胎で、高台も含めた全面に明るい釉を厚くかける。

輸入青磁皿(240) 大型の折縁皿である。内面に蓮弁、内底面に花文を打刻するが、釉が厚く文様が明瞭でない。内面には使用痕と考えられる擦痕が残る。

国産陶器擂鉢(241) 信楽焼のものである。淡褐色で長石粒を多量に含む胎土を有する。内面3条一単位の擂目が確認できるが、著しい使用痕のため明瞭でない。2期古段階のものである。

国産陶器甕(242) 常滑焼のものである。橙褐色で長石粒を多く含む胎土を有する。縁帯は体部に密着している。9型式のものである。

これらの遺物は15世紀後半頃のものである。

SK103出土遺物(図41、図版27)

瓦質土器擂鉢(243) 外面一次ハケの痕跡を丁寧にナデ消し、内面には7条一単位の擂目を施す。擂目は非常にシャープで、未使用のものと考えられる。イブシは良好だが、焼成はやや不良で土師質を呈する。C型式のものである。

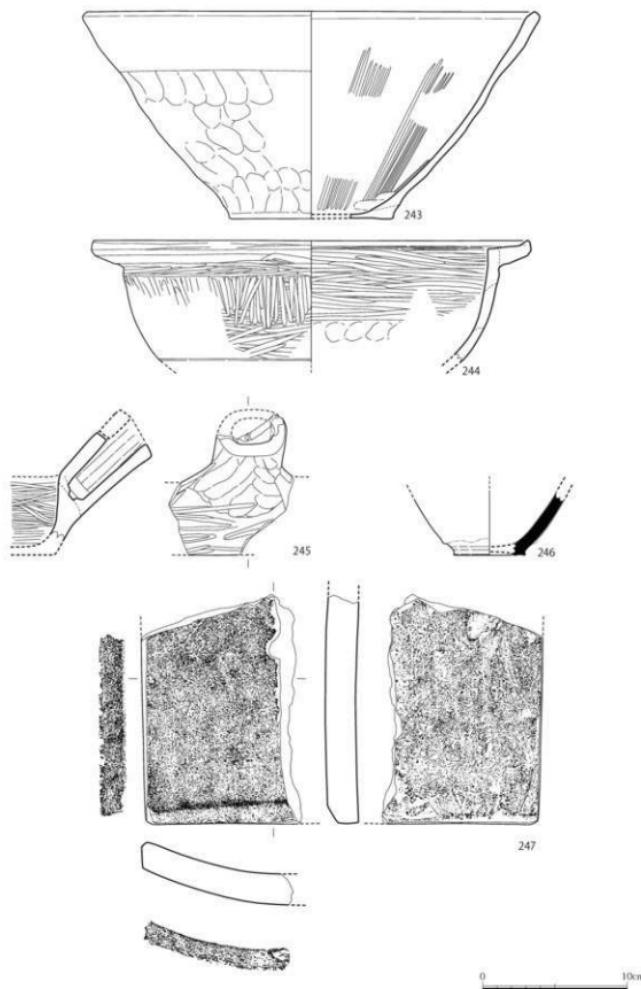


図 41 SK103 出土遺物実測図 (S=1/3)

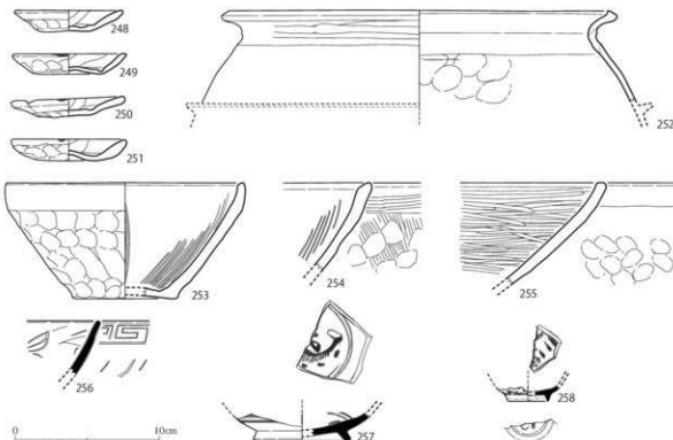


図42 SX110 出土遺物実測図 (S=1/3)

瓦質土器鉢（244） 金属器写しの鉢である。外面全面と内面上半にヘラミガキを施すが、口縁部裏面のみヘラケズりで仕上げる。焼成、イブシともに良好である。

瓦質土器焰（245） 把手部分をナデ調整、把手以外の内外面にヘラミガキを施す。外底面にはハナレ砂が残る。

輸入陶器椀（246） 天目椀である。灰褐色の胎土と茶褐色の厚い釉を持ち、高台部分の作りは非常にシャープである。

平瓦（247） 四面ナデ調整、凸面にはハナレ砂の痕跡が確認できる。端面には四つ菱のスタンプを施す。これらの遺物は15世紀前半～中葉のものと考えられる。

石室

SX110 出土遺物（図42）

土師器皿（248～251） いずれも暗褐色の胎土を有し、248以外は口縁部に一方所煤の付着がみられる。249は底体部境界部内面の工具の当たりが顕著である。

土師器釜（252） 非常に薄い器壁を持ち、口縁部には煤の付着が確認できる。頸部外面には工具の痕跡が残る。L₂型III-1型式のものである。

瓦質土器鉢（253・254） 253は小型描鉢である。外面ユビオサエのうちナデ調整を施し、内面には10条一単位の描目を刻む。内面にはわずかに使用による摩滅が確認できる。254は外面に横方向と縱方向の一次ハケが残る。内面には7条以上の描目が確認できる。E型式のものである。

瓦質土器鉢（255） やや強く開く器形を有し、外面ユビオサエ、内面密なヘラミガキを施す。焼成、イブシは良好である。内面に使用痕等は確認できない。

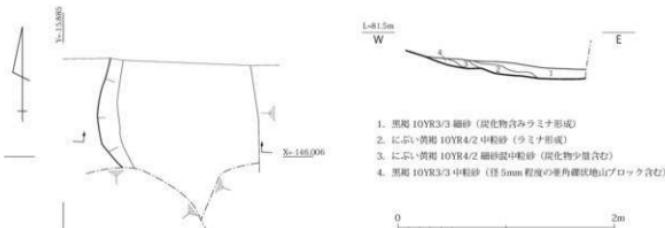


図 43 SK050 平面・土層断面図 (S=1/40)

輸入青磁挽 (256) 雷文帯を持つものである。胎土は灰白色で精良、釉は厚い。

輸入染付挽 (257・258) 257は丸みの強い器形を有し、釉は隨所に発泡がみられる。外面に圓線、内底面に龍文が確認できる。B群のものである。258は小椀である。高台は断面三角形で端部を削ってシャープに仕上げる。釉は発泡がみられる。

これらの遺物は16世紀中葉～後半頃のものである。

第6節 江戸時代から明治時代初期の遺構と出土遺物

(1) 検出遺構

土坑

SK050 (図 43、図版 14)

調査区東寄りで検出した土坑である。攢乱やほかの遺構によって破壊され、詳細は不明である。深さ20cm前後が残存し、断面形態は浅い皿型を呈する。埋土は炭化物を含み、ラミナがみられることから、一定期間開口状態にあったと考えられる。

埋土内より京阿蘭陀陶器水注 (263) が出土した。この他、19世紀中葉頃の遺物が出土した。

池状遺構

SX100 (図 44、図版 15・16)

調査区西半を占める巨大な池状の遺構である。深さ30～70cmを測り、底部は標高80.7m前後で一定である。断面形態逆台形を呈するが、肩口には段差を有する。b-b'断面図に顕著だが、初期の埋土(3・5)、1度目の掘り直し後の埋土(4・6・7)、最終の掘り直し後の埋土(1・2)が確認でき、最低3度の改修が考えられる。7層にはラミナが顕著に確認でき、一定の流水が存在したことが推定できる。最終の改修時には杭と幅20cm前後の板材による護岸が設置される。護岸は残存する杭の角度などから垂直に設置されたのではなく、角度を設けて設置されたものと考えられる。

本遺構の周辺にはこれを取り巻くように地山によって埋められる溝(S-080)が存在し、両者には何らかの関係性がうかがえるが、具体的な機能は不明である。

埋土内より19世紀中葉頃の遺物が出土した。

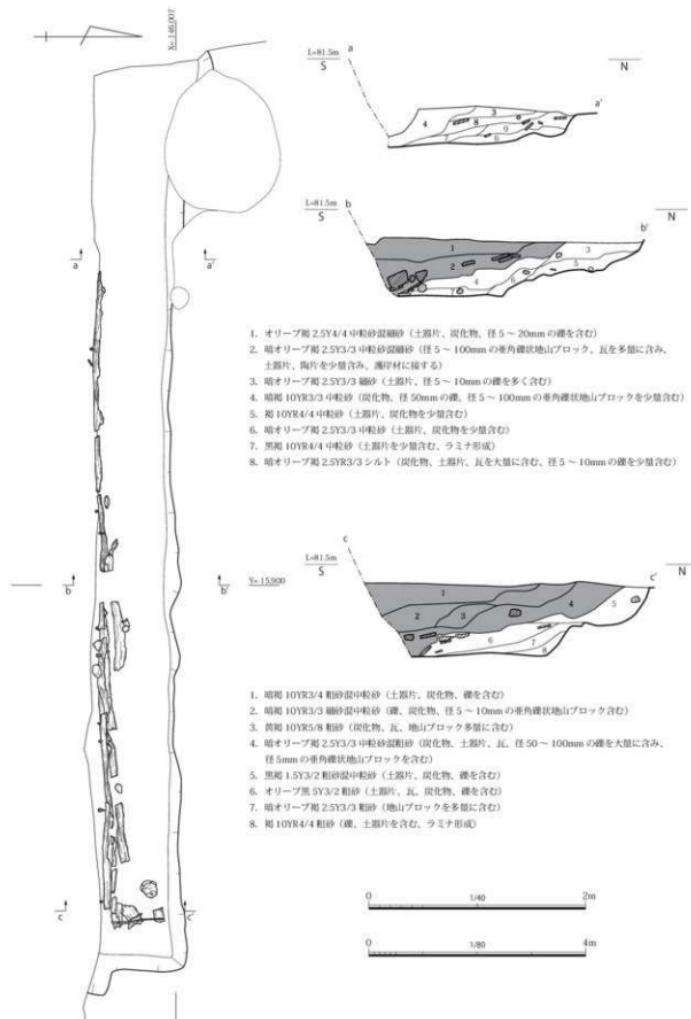


図 44 SX100 平面・土層断面図（平面 S=1/80・断面 S=1/40）



図 45 SK050 出土遺物実測図 (S=1/3)

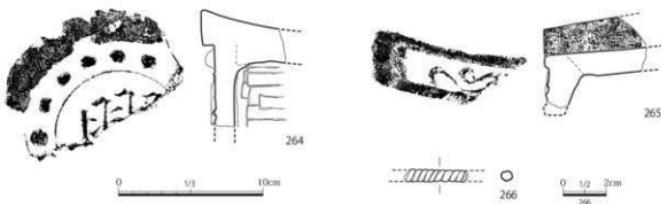


図 46 SX100 出土遺物実測図 (S=1/2・1/3)

ピット**SP083**

調査区中央西寄りで検出したピットである。すべての遺構に後出する。

埋土内からほぼ完形に復元できる平瓦（267）が出土した。

(2) 出土遺物**土坑****SK050 出土遺物 (図 45、図版 27)**

国産染付椀（259～261） 259は腰の張る薄い器壁を有し、口縁部はわずかに端反りとなる。260・261は入れ子の椀である。口唇部には口紅がみられ、図化していないものも含め3法量程度のものが出土している。

国産染付皿（262） 端反皿である。呉須の発色は良好で胎土は白色精良である。瀬戸窯のものである。

国産陶器水注（263） 灰色の胎土に白泥をかけ、呉須による絵付けのうち透明釉をかけて仕上げる。縦長の器形に注口と把手が付けられ、球形つまみを作う三角形の蓋がつく。胴部中央には一見異国調の

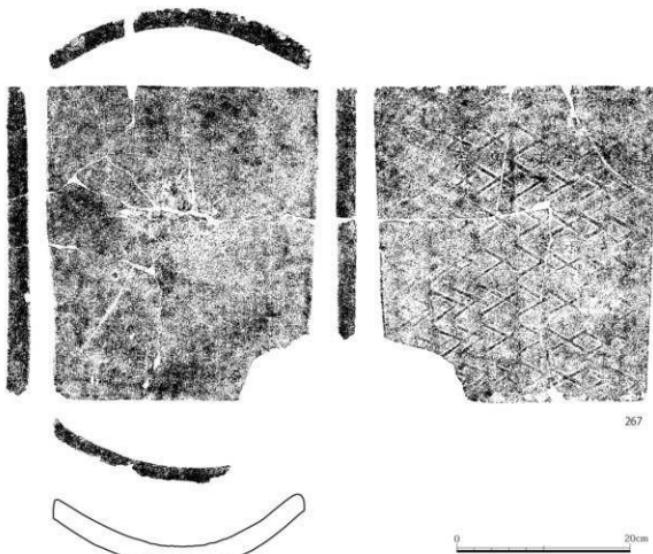


図 47 SP083 出土遺物実測図 (S=1/5)

風景が描かれるが、写実性に乏しく、西洋画としては著しく違和感を覚える。阿蘭陀陶器を写した京焼、京阿蘭陀焼のものと考えられる。

これらの遺物は 19 世紀中葉のものと考えられる。

池状遺構

SX100 出土遺物 (図 46)

軒丸瓦 (264) 瓦当面に「興」を陽刻し、興福寺所用瓦と考えられる。珠文は大きく縁帯幅も広い。内面には棒状工具のタタキ痕が残る。江戸時代のものである。

軒平瓦 (265) 瓦当貼り付けで成形され、瓦当裏面は横向方にナデ調整する。瓦当面にはわずかにハナレ砂が確認できる。全面二次焼成を受ける。

ガラス製簪 (266) 透明度の高いガラスを捩じって成形する。両端を欠損するため詳細は不明である。

ピット

SP083 出土遺物 (図 47)

平瓦 (267) 四面に布目、凸面にタタキ工具による格子状の文様を有する。タタキ痕には「東大寺」の文字が刻まれることから東大寺所用瓦であることがわかる。



図48 SK099 出土遺物実測図 (S=1/3)

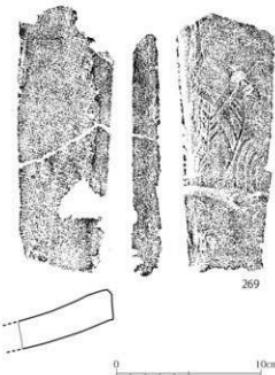


図49 表土出土遺物実測図 (S=1/3)

第7節 そのほかの遺構出土遺物

SK099 出土遺物 (図48、図版27)

骨角製品(268) 歯ブラシである。柄部分のみ残存し、下端には円孔を有する。片面に「ライオン歯刷子」と線刻される。ライオン社の歯ブラシは1927年より「ライオン歯刷子」の名称を使用し始め、1939年には柄が樹脂製となるため、本資料はこの間のものと位置付けられる（公益財団法人ライオン歯科衛生研究所HPより）。

表土出土遺物 (図49、図版28)

平瓦 (269) 四面布目、凸面タタキ調整を行う。凸面のタタキは格子文と樹状文が複合した複雑な構成である。凹面は使用によると考えられる摩滅が著しい。

《参考・引用文献》

平尾政幸 2019 「土師器再考」『洛史 研究紀要』第12号 (公財) 京都市埋蔵文化財研究所

第4章 出土遺物の分析

第1節 SK050 出土陶器水注の分析

(1) 分析対象

平城京左京三条六坊十一坪・奈良町遺跡出土 国産陶器水注（263）1点

(2) 分析内容

材質分析

当資料は、灰色の素地に白色の化粧下地を施し、青色顔料による染付後、透明釉をかけて焼成された施釉陶器である。蛍光X線分析装置を用いた元素分析により、素地、化粧下地、青色顔料、透明釉、其々の材質を推定した。

(3) 分析方法および使用機器

蛍光X線分析

蛍光X線分析は、試料測定部にX線を照射し、その際に試料から放出される各元素固有の蛍光X線を検出することにより、試料表面の構成元素を特定する方法である。蛍光X線分析装置 日立ハイテクサイエンス EA6000VX を用いて、管電圧：50 kV（大気中）及び 15kV（ヘリウムガス雰囲気）、コリメータ：0.5mm角、照射時間：300 秒にて測定した。X線管球はロジウム (Rh) である。

ファンダメンタルパラメータ (FP) 法による簡易定量

上記条件で測定した蛍光X線強度から、FP法により簡単に各検出元素の定量値を酸化物基準で求めた。FP法は、構成元素の種類と量から蛍光X線強度を理論的に算出できることを利用して、試料を測定して得られた各元素の蛍光X線強度に一致するような組成を推定する方法である。この方法では標準資料を用いずに濃度を算出することができる。

定量化合物： Al_2O_3 、 SiO_2 、 K_2O 、 TiO_2 、 MnO 、 FeO 、 Co_2O_3 、 As_2O_5 、 PbO

(4) 結果と考察

分析箇所を図50、結果を図51～54、FP法による定量値を表1に示す。

素地および下地

水差の欠損により露出した灰色の素地（分析箇所a）と、蓋の青色の釉薬が剥落して素地の上の白色化粧下地が露出した部分（分析箇所b）の分析を行った。灰色の素地からは主に、アルミニウム (Al)、ケイ素 (Si)、カリウム (K)、チタン (Ti)、鉄 (Fe) が検出された（図51）。また、素地の上に施された白色化粧下地からも同様の元素が検出された（図52）。FP法による定量値においては、素地と化粧下地とで酸化アルミニウム (Al_2O_3) と酸化チタン (TiO_2) の量比に僅かな差異がみられたものの、それほど大きな差はなかった（表1）。

釉薬および染付に用いられた顔料

白色の化粧下地の上に施された釉薬には、釉薬のみの透明部（分析箇所c）と、染付が施された青色部（分析箇所d）がある。どちらからもケイ素（Si）と鉛（Pb）が顕著に検出された（定量値は、酸化ケイ素（ SiO_2 ）約50重量%、酸化鉛（ PbO ）約40重量%）ため、鉛釉であると考えられる（図53・54）。また、青色部からは、コバルト（Co）、ヒ素（As）が検出され（定量値は、酸化コバルト（ Co_2O_3 ）約1重量%、酸化ヒ素（ As_2O_3 ）約2重量%）た。ヒ素を含むコバルト系青色顔料により、染付が施されたと考えられる（表1）。

表1 FP法による定量値

分析箇所	a		b		c		d	
	定量値 [w%]	誤差 [$\pm 3\sigma$]						
Al_2O_3	21.53	0.18	31.25	0.22	3.28	0.09	2.47	0.09
SiO_2	74.22	0.25	64.64	0.24	52.49	0.22	46.71	0.20
K_2O	1.27	0.01	2.71	0.02	1.75	0.02	3.17	0.03
TiO_2	0.89	0.01	0.26	0.01	0.58	0.02	0.63	0.02
MnO	0.03	0.03	0.02	0.03	0.08	0.05	0.05	0.06
FeO	1.87	0.10	0.88	0.07	0.20	0.05	0.66	0.08
Co_2O_3	0.03	0.03	0.02	0.02	0.01	0.02	0.71	0.08
As_2O_3	0.00	0.01	0.01	0.01	0.88	0.09	2.36	0.15
PbO	0.15	0.01	0.21	0.01	40.73	0.30	43.24	0.32
	素地		白色化粧下地		透明釉薬		青色釉薬	

(5) 分析データ

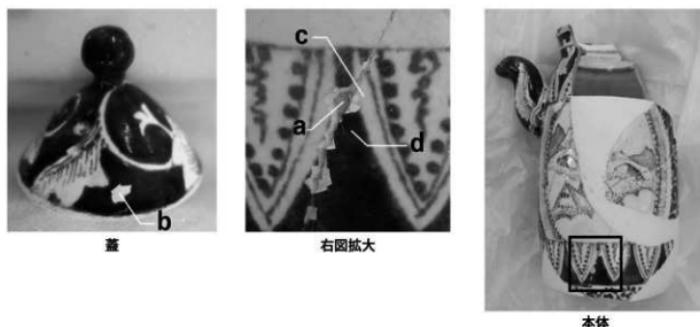


図50 分析箇所

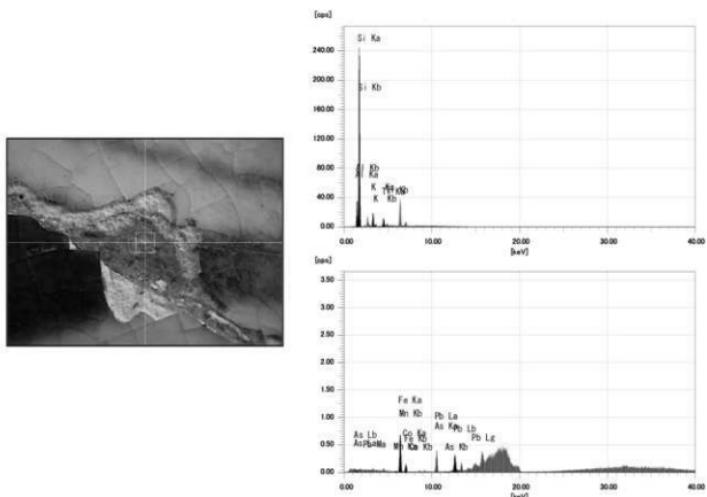


図 51 a 素地の蛍光 X 線スペクトル (上段 : 15kV、下段 : 50kV)

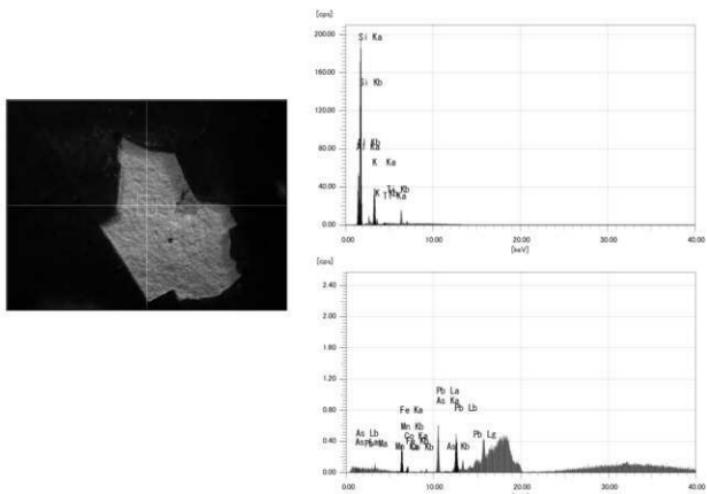


図 52 b 白色化粧下地の蛍光 X 線スペクトル (上段 : 15kV、下段 : 50kV)

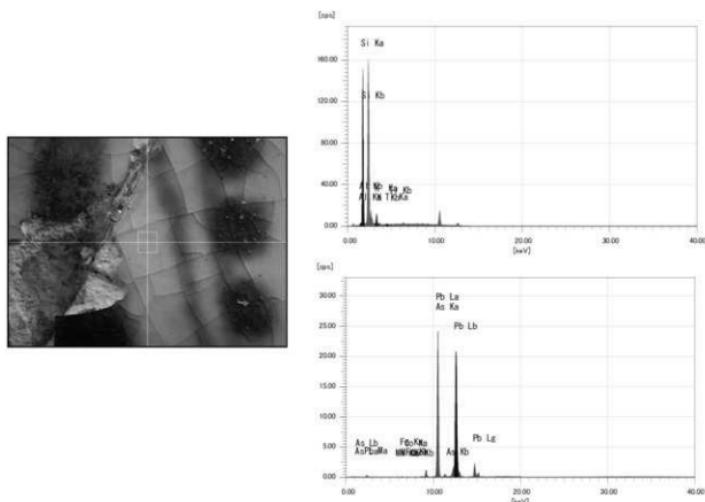


図 53 c 透明釉薬の蛍光X線スペクトル（上段：15kV、下段：50kV）

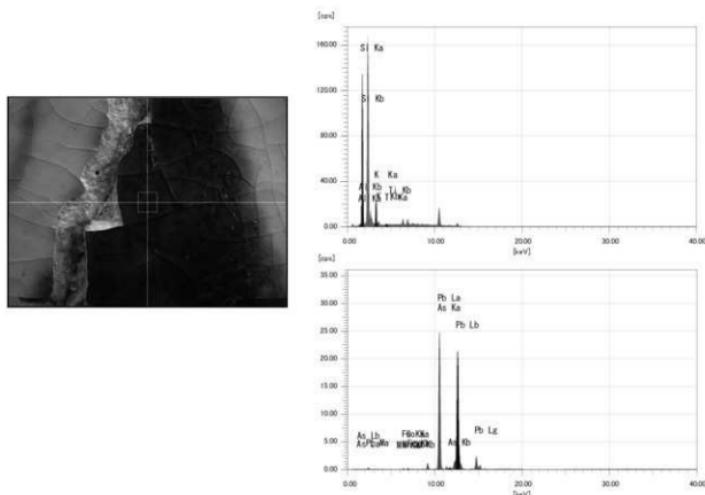


図 54 d 青色釉薬の蛍光X線スペクトル（上段：15kV、下段：50kV）

第2節 出土土師器皿の口径分布と組成について

はじめに

奈良町遺跡出土土師器皿については森下恵介氏・立石堅志氏（森下・立石 1987、森下 1992、立石 1989）らにより枠組みが構築され、2014年には、奈良市教育委員会より詳細な編年案が提示されている（奈良市 2014）。今回の調査ではSE120、SE071、SK013、SK056、SD001より良好な土師器皿の一括資料が出土した。本節ではこれら土師器皿について、奈良市教育委員会による分類案をもとに分類を行いその組成と口径分布を整理する。

（1）分析方法

出土土師器皿について、奈良市教育委員会編『南都出土中近世土器資料集』形成の分類に基づき分類を行い、破片数を計数して組成を明らかにした。なお、皿B・C群については独自に細分を行った（図55）。また、口縁部残存率25%以上のものについて口径復元を行い、その口径分布を提示した。

（2）土師器皿の組成と口径分布

SE120（表2、図56～58）

【黒粘下】

有効破片数は53点で、すべてA群である。全体の約50%を皿B I -2aが占めており、その他皿B I -1a・I -1b・I -3a・I -3b・I -3c・I -4、皿Dが各数点みられる。口径は10～11cm代と15～16cm代に集中している。全体の半数を占める皿B I -2aにおいて大小の偏りは見られないが、皿B I -4は大皿、皿B I -3bは小皿のみ確認できるなど、形態によっては大小の偏りがみられる。

【褐灰土】

有効破片数は46点で、すべてA群である。全体の50%を皿B I -2aが占めており、他は皿B I -1a・I -3a・I -3b・I -4がみられる。口径は10～11cm代と16cm代に集中する。黒粘層同様、皿B I -2aにおいて大小の偏りは見られないが、皿B I -4は大皿、皿B I -1aは小皿に多いなど形態によっては大小の偏りがみられる。

【暗褐土】

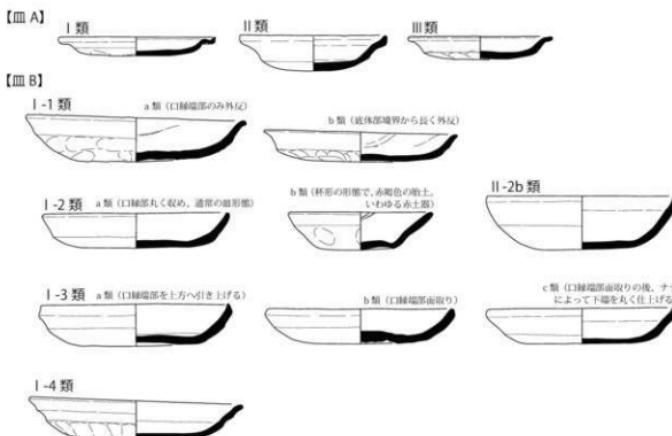
有効破片数は97点で、すべてA群である。全体の約57%を皿B I -2aが占めており、皿B I -3a・I -4がそれに続き多くみられる。口径は10～11cm代と15cm代に集中しているが、小皿の方が出土比率は大きい。また、大皿は下の2層出土土師器皿よりも口径が僅かに縮小する傾向がみられる。

SE071（表3、図59）

【黒灰土】

有効破片数は15点で、すべてA群である。全体の約40%を皿B I -2aが占めており、他は皿B I -1a・I -3a・I -3c・I -3bがみられる。口径は9cm代と14cm代に集中しており、大小皿とともにSE120暗褐土層より縮小する。

土師器皿 A 群



【図 C】



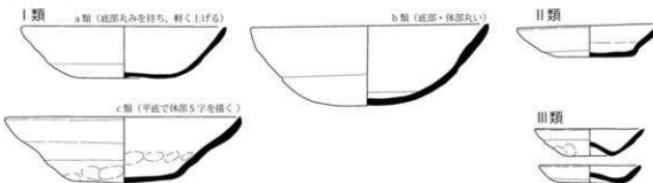
【図 D】



【図 E】



土師器皿 B 群



土師器皿 C 群



図 55 土師器皿分類

表2 SE120 型式別計測数

SE120 黒粘下

分類		6cm~	7cm~	8cm~	9cm~	10cm~	11cm~	12cm~	13cm~	14cm~	15cm~	16cm~	大皿	小皿	合計
A 群	I -1a						1						1	1	2
	I -1b					1	1					1	2	3	
	I -2a				8	7				2	5	4	11	15	26
	I -2b						1				2	2	4	1	5
	I -3a											0	5	5	
	I -3b					3	2								
	I -3c						2	1					1	3	4
	I -4									1	1	5	7	0	7
皿 D				1									0	1	1
合計		0	0	1	0	15	12	0	0	3	9	13	25	28	53

SE120 褐灰土

分類		6cm~	7cm~	8cm~	9cm~	10cm~	11cm~	12cm~	13cm~	14cm~	15cm~	16cm~	大皿	小皿	合計
A 群	I -1a				1	4	2			1			1	7	8
	I -2a				6	4	2		2	3	6	11	12	23	
	I -3a				2	2					1	1	4	5	
	I -3b			1	1					1		1	2	3	
	I -4				1	1				1	1	3	5	2	7
	皿 D									1	1	5	10	19	27
	皿 E														
	合計	0	0	0	1	14	10	2	0	4	5	10	19	27	46

SE120 黒粘土

分類		6cm~	7cm~	8cm~	9cm~	10cm~	11cm~	12cm~	13cm~	14cm~	15cm~	16cm~	大皿	小皿	合計
A 群	I -1b					1							0	1	1
	I -2a				2	16	21	1		1	8	6	15	40	55
	I -3a				8	2			2	2	3	7	10	17	
	I -3b			1	1	2					1	1	4	5	
	I -3c				2					4	1	5	2	7	
	I -4				1	1	1			5	2	7	3	10	
	皿 D					1					0	1	1		
	皿 E									1		1	0	1	
合計		0	0	0	2	29	25	3	0	3	17	11	36	61	97

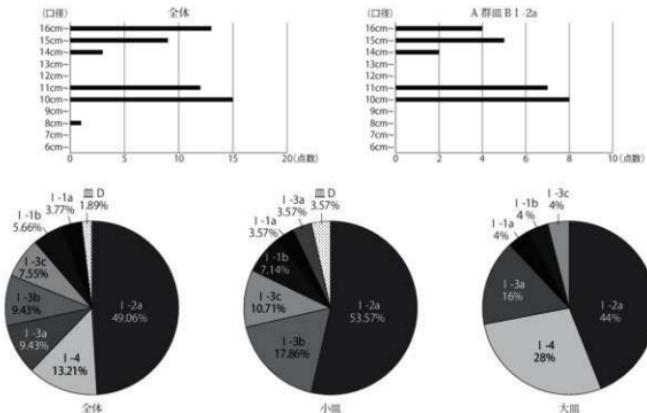


図56 SE120 黒粘下 口径分布と型式別出土比率

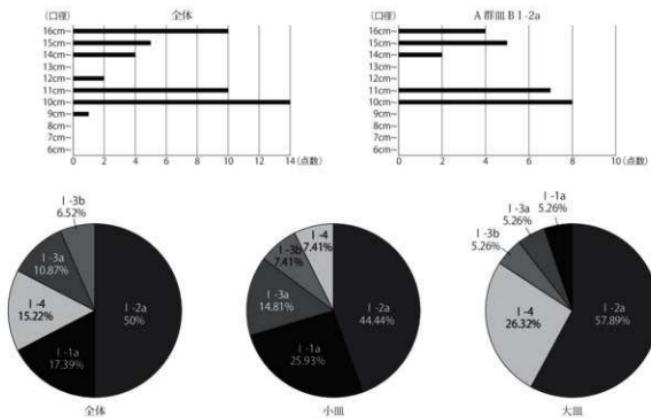


図 57 SE120 褐灰土 口径分布と型式別出土比率

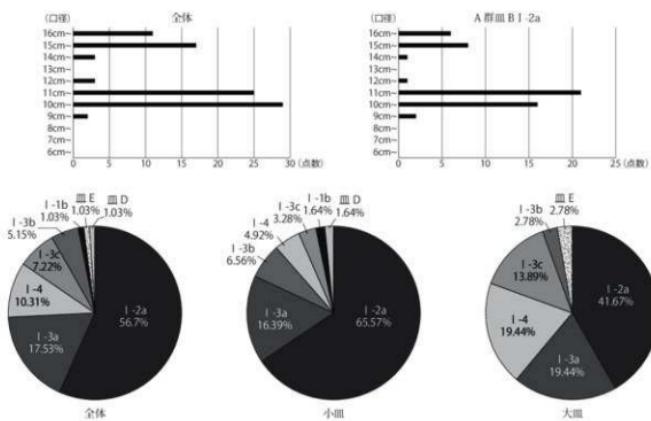


図 58 SE120 暗褐土 口径分布と型式別出土比率

表3 SE071・SK013 型式別計測数

SE071 黒灰土

分類		6cm~	7cm~	8cm~	9cm~	10cm~	11cm~	12cm~	13cm~	14cm~	15cm~	16cm~	大皿	小皿	合計
A Ⅲ B	I -1a						1						0	1	1
	I -2a					4			1	1			2	4	6
	I -3a										2		2	0	2
	I -3b						1			2			2	1	3
	I -3c						1			1	1		2	1	3
合計		0	0	0	7	0	0	1	2	5	0	0	8	7	15

SK013

分類		6cm~	7cm~	8cm~	9cm~	10cm~	11cm~	12cm~	13cm~	14cm~	15cm~	16cm~	合計
A Ⅲ B	I -2a				2	20	7	3	1			1	34
	I -3b				1				1				2
	B -2b							1					1
	III D			1	1								2
	合計	0	0	3	22	7	3	1	2	0	1	0	39

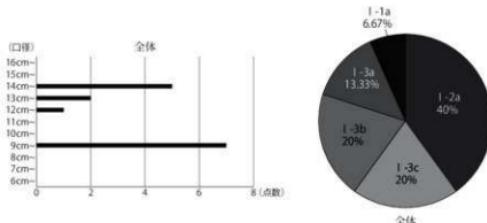


図59 SE071 黒灰土 口径分布と型式別出土比率

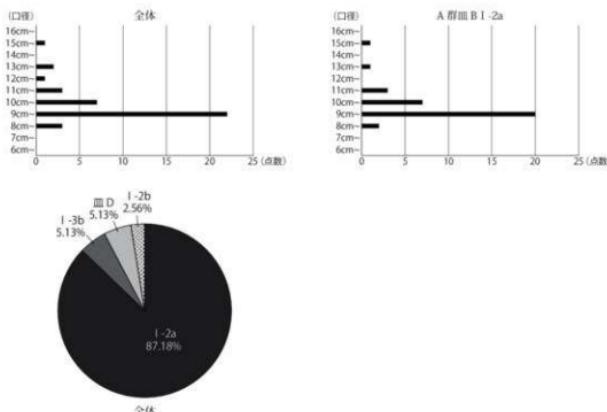


図60 SK013 口径分布と型式別出土比率

表4 SK056 型式別計測数

分類		6cm~	7cm~	8cm~	9cm~	10cm~	11cm~	12cm~	13cm~	14cm~	15cm~	16cm~	大皿	小皿	合計
A群	I -2a			5	12	3	4	4	5	3	1	13	24	37	
	III B I -3b							4	2	1		7	1	7	
	I -3c					1		3	1		1		5	6	
	I -4							2				2	2	2	
	合計	0	0	5	13	3	4	13	8	4	2	0	27	25	52

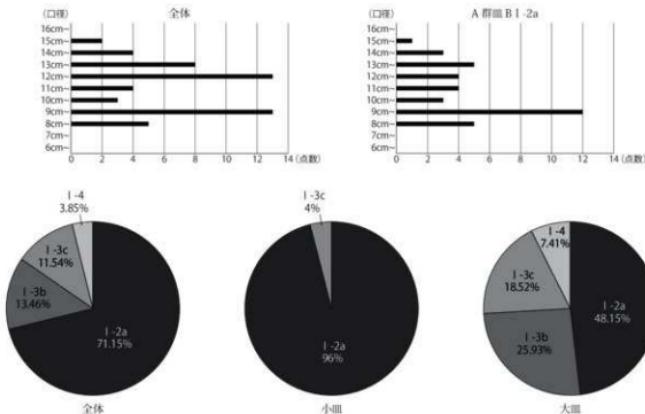


図61 SK056 口径分布と型式別出土比率

SK013（表3、図60）

有効破片数は39点で、すべてA群である。全体の約87%を皿B I -2aが占めており、皿B I -3b・II -2b、皿Dが数点みられる。口径は9cm代に集中しており、大小皿の比率は小皿に大きく偏る。これは、遺構の特性と考えたい。

SK056（表4、図61）

有効破片数は52点で、すべてA群である。全体の約71%を皿B I -2a類が占めており、他に皿B I -3b・I -3c・I -4が数点みられる。また、小皿は皿B I -2aでほとんど構成されている。口径は9cm代と12~13cm代に集中しており、大皿はSE071黒灰土層よりさらに縮小する。

SD001（表5、図62~64）

【灰粘】

有効破片数は137点で、このうちA群が130点、B群が7点である。全体の約77%を皿B I -2a類が占めており、その他多種の皿で構成される。この豊富なバリエーションで土器器皿組成が構成され

表5 SD001 型式別計測数

SD001 灰粘

分類	6cm~	7cm~	8cm~	9cm~	10cm~	11cm~	12cm~	13cm~	14cm~	15cm~	16cm~	合計
	1-2a	3	7	9	30	15	9	23	8	1		105
A群	1-2b			1	2							3
	1-3b					1	1	2				4
	1-3c			1	1	2	3	2	1			10
	I-4						1					1
B群	a			1								1
	b		1	3	2							6
	I-b								1			1
	II	1	2			2	1					6
合計		1	6	10	14	35	19	14	27	10	1	137

SD001 淡灰粘

分類	6cm~	7cm~	8cm~	9cm~	10cm~	11cm~	12cm~	13cm~	14cm~	15cm~	16cm~	合計
A群	1-2a			2	7	8	4	4		1	1	27
	1-2b				3							3
	1-3c						1	1				2
	I-b					1						1
合計		0	0	0	2	10	9	5	5	0	1	33

SD001 褐色土

分類	6cm~	7cm~	8cm~	9cm~	10cm~	11cm~	12cm~	13cm~	14cm~	15cm~	16cm~	合計
A群	1-2a			8	5	12	15	6	11	2	1	60
	1-2b				1							1
	1-3c			3	1		2					6
	I-b		1	2								3
B群	a					1		1	1			3
	b									1		1
	I-a											1
	I-b									1		1
合計		0	1	13	6	17	17	8	13	3	1	79

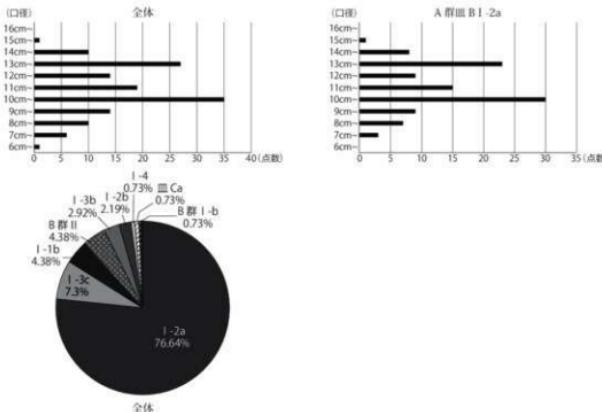


図62 SD001 灰粘 口径分布と型式別出土比率

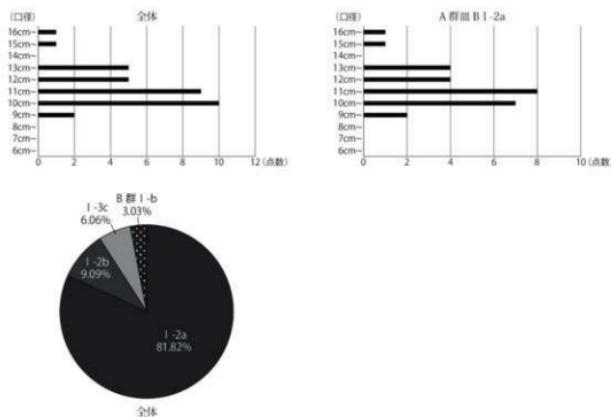


図 63 SD001 淡灰粘 口径分布と型式別出土比率

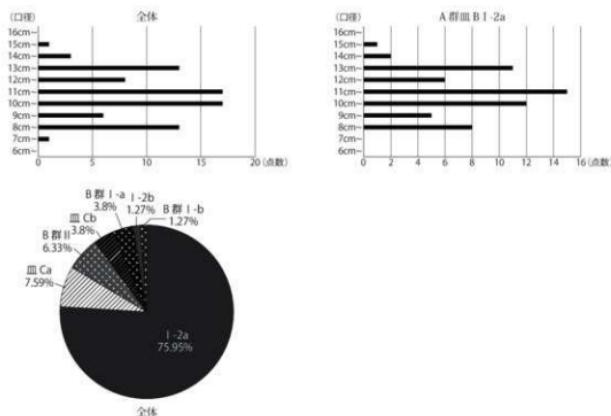


図 64 SD001 褐色土 口径分布と型式別出土比率

表6 SK094 型式別計測数

分類	6cm~	7cm~	8cm~	9cm~	10cm~	11cm~	12cm~	13cm~	14cm~	15cm~	16cm~	合計
A群	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2
B群	7	15	6	3	1	1	3	1	6	0	0	39
C群	0	7	15	7	1	1	3	1	6	0	0	41

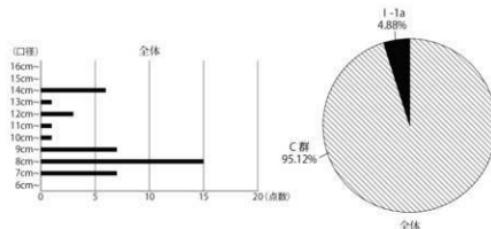


図65 SK094 口径分布と型式別出土比率

る点で、これまでの遺構と様相が大きく異なる。口径は10cm代と13cm代に集中するが、これまでの遺構のように明確な大小というものはみえにくくなり、多様な法量の分化がみられる。

【淡灰粘】

有効破片数は33点で、このうちA群が32点、B群が1点である。全体の約82%を皿B I -2a類が占めており、その他皿B I -2b・I -3c、B群のI -bで構成される。出土土師器皿の口径は10~11cm代に集中しており、灰粘層同様、明確な大小の区分はみられない。

【褐色土】

有効破片数は79点で、このうちA群が70点、B群が9点である。全体の約76%を皿B I -2a類が占めており、その他皿B I -2b、皿Ca・b、B群のII -1-a・I -bが各数点みられる。灰粘層よりも土師器皿のバリエーションは少し減るが、B群のI -a類など新たに出現する形態もある。口径は8cm代、10~11cm代、13cm代に集中しており、灰粘層出土土師器皿よりも明確に3規格の法量が読み取れる。

SK094(表6、図65)

有効破片数は41点で、このうちA群が2点、C群が39点である。当遺構出土土師器皿はほとんどC群で構成されている。口径は8cm代に集中しており、7cm代、9cm代、14cm代にも一定量みられ明確な大小差はみられない。

小結

以上、各遺構・層位出土土師器皿の類別組成と法量について整理した。主にA群土師器皿について良好なデータが得られた。また、SK094出土資料においては変化に乏しいC群土師器皿についてのまとまったデータを得ることができた。本来ならばこれらのデータを奈良町遺跡各地の出土土師器皿の組成・法量と比較検討して編年の位置づけを検討すべきであるが、現段階では十分な資料の蓄積がなく、これらについては今後の課題としておきたい。

《参考・引用文献》

森下惠介・立石堅志 1987「大和北部における中近世土器の様相」『奈良市埋蔵文化財調査センター紀要 1986』

森下惠介 1992「南都土器編年の再検討」『大和の中世土器 II』大和古中近研究会

立石堅志 1989「大和北部における中世土器について」『中近世土器の基礎研究V』日本中世土器研究会

奈良市教育委員会 2014「南部出土中近世土器資料集—奈良町高天町遺跡（HJ第559次調査）出土資料—」

第5章 調査のまとめ

第1節 遺構の変遷について

(1) 奈良時代以前の遺構について

今回の調査では奈良時代以前の遺構として SK050 と SD150 を検出した。前者は古墳時代前期、後者は古墳時代後期に埋没し、その後緩やかな自然地形の落ち込みとなっていたものを、奈良時代に人為的に埋めて整地する。調査地周辺には率川古墳や脇戸古墳といった中・後期の埋没古墳が確認されているが、古墳時代前期の遺構は確認されておらず、新しい知見である。遺構の性格は東から西へ緩やかに傾斜する自然地形に対して平行する状況であることから、灌漑に関する人工水路である可能性が考えられる。

(2) 奈良時代の遺構について

奈良時代の遺構は、先述の SK050 と SD150 を埋める整地層と、掘立柱建物 SB140 がある。整地層は平城京城各所で確認されている淘汰の良い淡黄灰色の細砂である。奈良時代の掘立柱建物 SB140 の存在を考慮すると、奈良時代中期から後期の当地において比較的大規模な開発が行われたことは間違いないだろう。整地の時期が遷都からやや遅れる事実は平城京左京二条六坊三・四・五・六坪でみつかった条坊道路が小尺設計であった事実とも符合し（元興寺文化財研究所 2009）、外京城の整備時期が遅れることを示すものである。ただしここで問題となるのは条坊道路の存否である。第2章で述べた通り、調査地周辺では 89 次調査、228 次調査、293 次調査、559 次調査、650 次調査において土坑、176 次調査において井戸、650 次調査において掘立柱建物などが検出されており、広範囲で奈良時代の遺構が存在したことが明らかになっている。しかし、東六坊間路の路面上に相当する 89 次、228 次調査では道路側溝が検出されず、南方にあたる本子守町率川神社東側で行われた調査では、六坊間路推定地から率川古墳と名付けられる古墳の周溝が発見されている（鐘方 2009）。この周溝は 9 世紀以降に埋没することが判明しており、こうした点から推定地における条坊道路の存在そのものが疑われている。東六坊における条坊道路については推定位が地上に残る遺存地割と整合しないことから、西側へずれている可能性が指摘されており（西崎 1985）、今回の調査では東六坊間路の有無についての情報が期待されたが、東側溝推定地部分が擾乱を受けており、道路側溝を確認することができなかった。この問題についてはさらに継続して検討が必要である。

(3) 平安時代の開発について

今回の調査区では 9・10 世紀の遺構・遺物は一切確認できなかった。中世の遺構は 11 世紀中葉に位置付けられる SD040 が初現である。9・10 世紀の遺構・遺物の不在は奈良では一般的な傾向であり（佐藤 2006 ほか）、本格的な土地利用は 11 世紀末～12 世紀初頭以前に位置付けられる SE120 の設置を待たねばならない。

SE120 は直径 150cm、深さ 280cm 以上を測る大規模な井戸である。12 世紀後半の井戸 SE071 が

直径 120cm、深さ 135cm であることに対して格段に大規模な施設である。その機能については井戸として報告したが、埋土から大量の籌木が出土したことなどから最終的に便所として利用された可能性も考えられる。周辺に同時期の建物・土坑等の遺構は確認できず、空闊地に設けられた共同利用施設の可能性が高いと推定する。この仮定を是とすると当地の開発にはある程度の計画性が伴った可能性が考えられる。当地から南方約 120m の地点で行われた平城京左京四条六坊八坪の発掘調査（元文研 HJG11 次調査：令和 3 年度報告予定）では東六坊間路に沿った付近に、12 世紀前半の遺構を伴わない整地層が確認でき、周辺地域で広範にわたって個別住居以外のインフラ整備が計画的に行われた可能性も考えられる。中世都市奈良の成立論理にもかかわる重要な問題であり、継続的な検証が求められる。

(4) 中世前期の土地区画

12 世紀後半には遺構数が増大し、SE120 のような大規模な井戸なども設置され、13 世紀には SB130 のような東西六間を測る掘立柱建物が設置される。SB130 は根石を持つなど比較的堅牢な建物と考えられる。周辺からは連珠文軒平瓦など 13 世紀に遡る瓦が複数の遺構から出土しており、堂である可能性も考えられるが、現状では情報不足である。ただし東端が 14 世紀前半の溝 SD001 と調和的な配置であり、SD001 が明示する土地境界の起源は 13 世紀以前に遡る可能性が高いといえる。SD001 を背割り溝とするかどうかは慎重を期したいが、間口を東六坊間路に開いて東西に長い地割を有する区画であった可能性は高いと考えられる。中世都市奈良の土地区画は、主に小郷の境界を中心にその多くが中世前期に成立したことを指摘したことがある（佐藤 2008）、小規模な土地区画も早い段階で設定されていた可能性を考えたい。

(5) 中世後期から近代にかけての土地利用

中世後期以降の遺構は残存状況が良好でなく、全体像を把握し辛い。石室と考えられる SX110 の存在が特徴的であるが、周辺遺構との関係は不明である。15 世紀中葉と考えられる SK090、15 世紀後半と考えられる SK094 からは多様な瓦質土器が出土しているほか、16 世紀と考えられる SK070 からは水晶が出土しており、一般町屋とは異なる空間（寺院・工房）の存在が推定できるが、いずれにしても確証を得るには至らず、周辺調査の進展を待ちたい。

奈良町遺跡は古代から近世の複合遺跡であるため、全時代の遺構が連續と連なるのが通常であるが、今回の調査区では 17 世紀初頭から 19 世紀前半までの遺構・遺物が欠落する。絵図・文献では町屋空間であったことが予測されるだけに、この空白は奇妙である。19 世紀中葉の SX100 は池状の遺構であるが、庭園の要素が見られないことから奈良晒の晒し場など工業施設であった可能性も考えられる。近世の調査区周辺はこうした特別な利用が行われる空間であった可能性を想定したい。

《参考・引用文献》

- 鍾方正樹 2009 「平川古墳と外京寺跡および出土埴輪について」『奈良市埋蔵文化財調査年報』平成 18 年度（2006 年度）
奈良市教育委員会
- 財団法人元興寺文化財研究所 2009 「平城京左京二条六坊三・四・五・六坪、奈良町道路発掘調査報告書」
- 佐藤聖一 2006 「寺院を中心とした中世都市形成に関する基礎的研究」科研費報告書
- 佐藤聖一 2008 「中世都市奈良と火災」『中世都市研究』14 中世都市研究会
- 西崎卓哉 1985 「平城京外京の地割計画寸法」『奈良市埋蔵文化財センター紀要 1985』奈良市教育委員会

第2節 京阿蘭陀焼について

SK050出土国産陶器水注は注口を持つ瓶形の本体と、球形つまみを持つ円錐形蓋で構成され、灰色の陶胎に全面的に白化粧土をかけ、西洋風の建築物を描く特殊品である。これは京阿蘭陀焼とよばれるもので、17世紀の京都で尾形乾山が創出した阿蘭陀写しに起源をもつ焼物である（愛知県陶磁美術館2017）。蛍光X線分析によると白色部分及び釉薬には鉄が含まれず、デルフトやマジョリカ陶器のようなヨーロッパ産でないことは明白である。また、さらに詳細な分析が必要ではあるものの、染付部分にヒ素の含有量が多く、マンガンがほとんどないことから、マンガンを多く含む呉須土を主に使用する瀬戸窯などの製品とは異なり、スマルト（花組青）などヒ素を含むコバルト鉱より作られた顔料が用いられた可能性が高い。阿蘭陀写しには伊賀や信楽などで製作されたものもあるが、本資料についてはやや青みがかった白化粧土や緻密な表現からも京焼系のものと考えられる。

現在残る類例資料と比較すると神戸市立博物館蔵藍絵西洋風景図大皿（図66）、同館蔵藍絵西洋風景図刀掛（図67）など19世紀の伝世品に共通する文様意匠が確認でき、本資料の年代は遺構年代（19世紀中葉）と大きく隔たらない時期のものと考えられる。

《参考・引用文献》

愛知県陶磁美術館 2017『特別企画展 染付：青繪の世界』



図66 藍絵西洋風景図大皿



図67 藍絵西洋風景図刀掛

※図66・67は神戸市博物館蔵
愛知県陶磁美術館 2017より転載

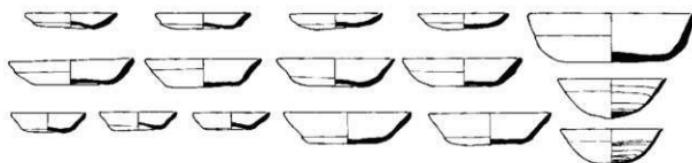
第3節 SD001 出土土師器皿について

SD001 からは大量の土師器皿が山茶椀を伴って出土した。出土層位によって若干の時期幅を有するが、土師器皿の口径がおおよそ 10 ~ 11cm に集中し、白色胎土のもの（B 群）を少量ながら一定量含むこと、A 群土器が皿 C（へそ皿）を含み、かつ I -2a 類を主とすることなどから GG38 次調査 SK03（奈良市概要調査報告平成 5 年度）と近似する時期の遺構と推定できる。他にもこれと類似した様相を持つ資料として、これまで GG31 次調査 SK03（奈良市概要調査報告平成 3 年度）、SG263 次 SD05（奈良市概要調査報告平成 21 年度）、HJ559 次調査 SK642（奈良市教育委員会 2014）出土遺物などが知られてきた（図 68）。奈良町遺跡出土土師器皿の編年を整備した『南都出土中近世土器資料集』（奈良市教育委員会 2014）ではこれらの遺構について、口径の縮小傾向や器形の多様性を時期差としてとらえ、各型式が均等に時間幅を持つと考えたうえで GG31 次調査 SK03 を 14 世紀中葉、SG263 次調査 SD05 を 14 世紀後半と提示している。これに対し、筆者は同書において、これらの土師器皿に共伴する瓦器椀がいずれもⅢ段階 E 型式からⅣ段階 B・C 型式のものであり、瓦器椀研究においては当該期の瓦器椀型式が一括資料中に複数型式の重複がみられることが指摘されていることを念頭に、土師器皿についても型式差を時期差としてとらえず 14 世紀前半におけるバリエーションと考えて編年図を提示している。

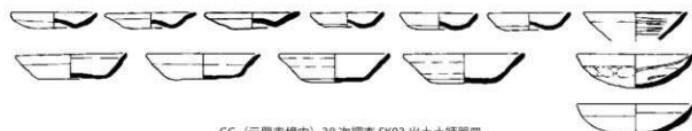
今回の調査で、SD001 褐色土・灰粘・淡灰粘において、溝出土資料ではあるが比較的一括性の強い資料が出土し、これに尾張系山茶椀 8 型式が複数個体伴うことが確認できた。尾張系山茶椀 8 型式は古瀬戸中Ⅱ期に先行する型式とされており、瀬戸市萱刈窯で古瀬戸中Ⅱ期の資料が正中二年（1325）二月銘の陶板とともに出土していることから、8 型式山茶椀の暦年代について 1325 年を下限とする 13 世紀末から 14 世紀初頭に位置付けている（藤澤 2008）。この山茶椀 8 型式の年代観は SD001 出土土師器皿を 14 世紀初頭から前半と考える年代観と矛盾しない。さらに褐色土からは京都産土師器皿（29）が出土している。この土師器皿は京都 7C 期に位置付けられている（平尾 2019）。7C 期の暦年代は本國寺創建時（1345）に埋められた平安京左京六条二坊五町跡・本國寺跡 SD19 が標式となっている。これらの資料を無理に 14 世紀後半までの長期間の資料とするのではなく、14 世紀初頭から前半の多様性を持った資料群としてとらえるべきであろう。

《参考・引用文献》

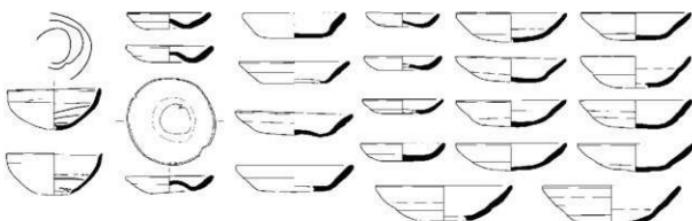
- 奈良市教育委員会 2014 『南都出土中近世土器資料集－奈良町高天町遺跡（HJ 第 559 次調査）出土資料一』
 平尾政幸 2019 「土師器再考」『洛史 研究紀要』第 12 号（公財）京都市埋蔵文化財研究所
 藤澤良祐 2008 「中世瀬戸窯の研究」高志書院



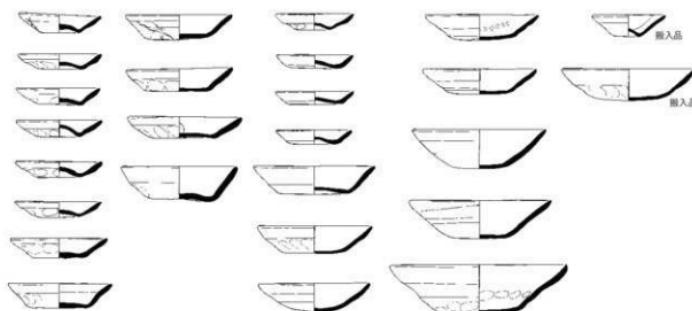
GG (元興寺境内) 31次調査 SK03 出土土師器皿



GG (元興寺境内) 38次調査 SK03 出土土師器皿



SG (西大寺境内) 263次調査 SD05 出土土師器皿



HJ (平城京) 559次調査 SK642 出土土師器皿

0 1/4 20cm

図 68 既往の調査出土土師器皿

関連資料

- 図 69 検出遺構配置略図
表 7～16 報告遺物一覧 (1)～(10)
表 17～21 検出遺構および出土遺物一覧 (1)～(5)

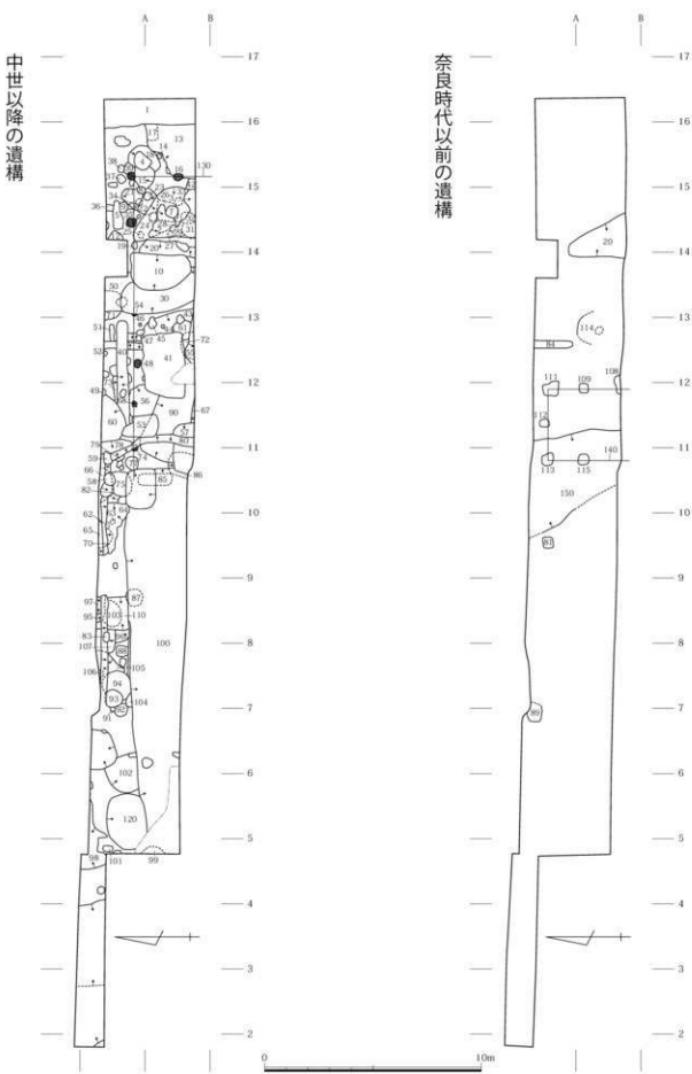


図 69 梱出遺構配置略図 (S=1/200)

表7 報告遺物一覧(1)

報告番号	種別	写真	出土遺構	層位	種別 器種	口径	- 残高 -	底径	- 高 -	存率	地土・素材	焼成・色調	特記事項
1 図6	圓版	17	SD020	土師器 壺	(21.6) - (4.5) - *	25%	粗	~5mm石英・長石・カサリ礫	14mm部	今や不良	5YR7/8		
2 図7			SD150	土師器 杯	* - (3.2) - *		体部縦	~1mm石英・長石		今や粗	良		
3 図7			SD150	土師器 杯	* - (2.7) - *		体部縦	~1mm石英・長石・カサリ礫		今や粗	良		
4 図7			SD150	陶土器 壺	* - (2.2) - (3.9)	33%	粗	~5mm石英・長石・カサリ礫・チャート	底部	今や粗	5YR8/3		
5 図7			SD150	土師器 壺	* - (2.9) - *		脚部	粗	~3mm石英・長石・カサリ礫	14mm部	今や不良	5YR8/2	
6 図7			SD150	土師器 壺	* - (2.5) - *		脚部縦	粗	~2mm石英・長石・カサリ礫		今や不良	5YR7/6	
7 図7	圓版	17	SD150	土師器 壺	8.6 - 3.7 - *	90%	今や粗	~2mm石英・黒砂粒		今や不良	N6/0		
8 図9			SB140e	土師器 壺	(9.4) - (3.2) - *	10%	今や粗	~1mm石英・長石・カサリ礫・雲母		今や粗	5YR8/4		
9 図9			SB140c	土師器 杯	* - (3.4) - *		体部縦	粗	~1mm長石		今や不良	N5/0	
10 図18			SB130a	土師器 壺	(9.0) - 1.4 - *	25%	今や粗	~1.5mm石英・長石・カサリ礫・雲母		今や粗	5YR7/6		
11 図18			SB130d	土師器 壺	(13.1) - 2.4 - *	33%	今や粗	~2mm石英・長石・カサリ礫・雲母		今や粗	5YR7/8		
12 図18			SB130g	土師器 壺	(12.6) - 2.5 - *	10%	今や粗	~1mm石英・長石・カサリ礫・雲母		今や粗	5YR7/8		
13 図18			SB130g	土師器 壺	(13.8) - 2.7 - *	10%	今や粗	~3mm石英・長石・カサリ礫・雲母		今や粗	5YR7/6		
14 図18			SB130g	土師器 壺	(14.0) - 2.3 - *	25%	今や粗	~3mm石英・長石・カサリ礫・雲母		今や粗	5YR7/6		
15 図18			SB130g	土師器 壺	(14.2) - 2.6 - *	10%	今や粗	~1mm石英・長石・カサリ礫・雲母		今や粗	浅黄褐色 5YR8/6		
16 図18			SB130g	土師器 壺	(13.0) - 3.2 - *	20%	今や粗	~1mm石英・長石・カサリ礫・雲母		今や粗	5YR7/6		
17 図18			SB130f	瓦器 壺	* - (3.1) - *		体部縦	粗	微小砂粒		今や不良	N4/0	
18 図18			SB130a	瓦 斜平瓦	29.2 - (16.4) - 7.0		粗	~3mm石英・長石・黒色粒		今や不良	N7/0		
19 図19	圓版	17	SD001	セクション以降 陶色土	(8.1) - 1.6 - *	33%	今や粗	~1mm石英・長石・雲母		今や粗	5YR7/6		
20 図19	圓版	17	SD001	セクション以降 陶色土	(8.1) - 1.3 - *	33%	今や粗	~3mm石英・長石・雲母・チャート		今や粗	5YR7/6		
21 図19			SD001	セクション以降 陶色土	(8.3) - 1.5 - *	33%	粗	~1mm石英・長石・雲母		今や粗	5YR7/4		
22 図19			SD001	セクション以降 陶色土	9.6 - 2.4 - *	50%	粗	~1mm石英・長石・雲母		今や粗	N3/0		
23 図19	圓版	17	SD001	セクション以降 陶色土	10.3 - 2.3 - *	80%	今や粗	~3mm石英・長石・カサリ礫・雲母		今や粗	浅黄褐色 5YR8/4		
24 図19			SD001	セクション以降 陶色土	10.4 - 2.9 - *	80%	今や粗	~3mm石英・長石・カサリ礫・雲母		今や粗	5YR7/8		
25 図19	圓版	17	SD001	セクション以降 陶色土	(10.7) - 2.5 - *	50%	今や粗	~2mm石英・長石・カサリ礫・雲母		今や粗	5YR6/8		
26 図19			SD001	セクション以降 陶色土	13.5 - 2.5 - *	80%	今や粗	~1mm石英・長石・カサリ礫・雲母		今や粗	5YR7/8		

表8 報告遺物一覧(2)

報告番号	種別	写真 図版	出土遺構 層位	種別 器種	口径 - 器高 - 直径 - 高	残存率	胎土・素材	焼成・色調	特記事項
27 国19 国版 17	土師器	セクション以北 網色土	SD001	10.3 - 2.6 - *	60%	やや粗 ~1mm石英・長石	良 灰白 10YR8/2		
28 国19	土師器	セクション以北 網色土	SD001	10.3 - 2.8 - *	90%	やや粗 ~2mm石英・長石	良 灰白 7.5YR8/2		
29 国19	土師器	セクション以北 網色土	SD001	(12.0) - 2.2 - *	20%	やや粗 ~3mm石英・長石	良 灰白 10YR8/1	京都産	
30 国19 国版 17	土師器	セクション以北 網色土	SD001	14.1 - 3.8 - *	70%	やや粗 ~1mm石英・長石・カサリ繊	良 灰白 10YR8/2		
31 国19	土師器	網色土	SD001	(8.5) - 3.3 - (5.1)	33%	粗 ~5mm石英・長石・カサリ繊・チャート	良 灰白 2.5YR8/2		
32 国19	土師器	セクション以北 網色土	SD001	(16.2) - 4.4 - *	10%	粗 体部上半 陶小砂粒	良 浅黄褐 10YR8/3		
33 国19 国版 18	陶質燒結陶器	セクション以北 網色土	SD001	* - (4.1) - (14.8)	33%	粗 底部 ~4mm石英・長石・黒色粒	良 灰白 7.5YR6/4		
34 国19 国版 18	瓦	セクション以北 網色土	SD001	(3.7) - (13.0) - (9.7)		粗 ~4mm石英・長石・黒色粒・チャート	良 灰 N6/0		
35 国19 国版 18	瓦	セクション以北 網色土	SD001	(7.2) - (8.5) - 5.0		やや粗 ~3mm石英・長石・カサリ繊・雲母	良 灰灰 N3/0		
36 国20 国版 18	土師器	セクション以北 灰粘	SD001	7.5 - 1.8 - *	80%	やや粗 ~2mm石英・長石・カサリ繊・雲母	良 粗 5YR7/6		
37 国20 国版 18	土師器	セクション以北 灰粘	SD001	8.2 - 1.5 - *	50%	やや粗 ~1mm長石・カサリ繊・雲母	良 灰灰 7.5YR6/3		
38 国20 国版 18	土師器	セクション以北 灰粘	SD001	8.2 - 1.7 - *	90%	やや粗 ~2mm石英・長石・カサリ繊・雲母	良 粗 2.5YR6/8		
39 国20	土師器	セクション以北 灰粘	SD001	(8.4) - 1.7 - *	50%	やや粗 ~4mm石英・長石・カサリ繊・雲母 チャート	良 粗 5YR7/8		
40 国20	土師器	セクション以北 灰粘	SD001	8.5 - 1.8 - *	80%	やや粗 ~3mm長石・カサリ繊・雲母	良 灰灰 7.5YR6/3		
41 国20	土師器	セクション以北 灰粘	SD001	(9.0) - 1.4 - *	33%	やや粗 ~2mm石英・長石・カサリ繊・雲母	良 粗 5YR6/8		
42 国20	土師器	セクション以北 灰粘	SD001	9.2 - 2.1 - *	90%	やや粗 ~4mm石英・長石・カサリ繊・雲母 チャート	良 浅黄褐 10YR8/3		
43 国20	土師器	セクション以北 灰粘	SD001	(9.4) - 2.2 - *	50%	やや粗 ~2mm石英・長石・カサリ繊・雲母	良 粗 2.5YR6/8		
44 国20 国版 18	土師器	セクション以北 灰粘	SD001	9.9 - 2.2 - *	100%	やや粗 ~2mm石英・長石・カサリ繊・雲母	良 浅黄褐 7.5YR8/6		
45 国20 国版 18	土師器	セクション以北 灰粘	SD001	10.1 - 2.3 - *	70%	やや粗 ~3mm石英・長石・カサリ繊・雲母	良 淡粉 5YR8/4		
46 国20 国版 18	土師器	セクション以北 灰粘	SD001	(10.3) - 2.4 - *	40%	やや粗 ~2mm石英・長石・カサリ繊・雲母	良 粗 2.5YR6/8		
47 国20	土師器	セクション以北 灰粘	SD001	(10.6) - 2.3 - *	50%	やや粗 ~3mm石英・長石・カサリ繊・雲母	良 粗 5YR7/6		

表9 報告遺物一覧(3)

報告番号	種別	写真	出土遺構	層位	種別	断面	口径	器高	底径	裏	残存率	地土・素材	焼成・色調	特記事項	
48 回20	SD001 セクション以北 灰粘		土師器	直		10.8	-	2.4	-	*	80%	中や粗 ~4mm石英・長石・クサリ礫・雲母 チャート	良 橙5YR7/6		
49 回20	SD001 セクション以南 灰粘		土師器	直		11.1	-	2.4	-	*	90%	中や粗 ~1mm石英・長石・クサリ礫・雲母	良 橙2.5YR6/8		
50 回20	SD001 セクション以北 灰粘		土師器	直		13.1	-	2.6	-	*	50%	中や粗 ~2mm石英・長石・雲母	良 橙2.5YR6/8		
51 回20	回版18		SD001 セクション以北 灰粘	土師器	直	6.7	-	1.7	-	*	80%	中や粗 ~2mmセラリ礫・微小砂粒	良 灰白10YR8/2		
52 回20	回版19		SD001 セクション以北 灰粘	土師器	直	7.2	-	1.8	-	*	90%	中や粗 ~2mm石英・長石・クサリ礫	良 浅黄橙10YR8/3		
53 回20	回版19		SD001 セクション以南 灰粘	土師器	直	7.0	-	1.7	-	*	80%	中や粗 ~4mm石英・長石・クサリ礫・雲母	良 浅黄橙7.5YR8/4		
54 回20	回版19		SD001 セクション以北 灰粘	土師器	直	10.6	-	3.1	-	*	70%	中や粗 ~1mm石英・長石・クサリ礫	良 浅黄橙7.5YR8/3		
55 回20	回版19		SD001 セクション以北 灰粘	土師器	直	10.8	-	2.6	-	*	80%	中や粗 ~2mm石英・長石・クサリ礫	良 灰白7.5YR8/2		
56 回20	回版19		SD001 セクション以北 灰粘	土師器	直	14.3	-	4.3	-	*	80%	中や粗 ~2mm石英・長石・クサリ礫	良 灰白10YR8/2		
57 回20			SD001 セクション以北 灰粘	土師器	直	(14.5)	-	(5.1)	-	*	25%	粗 体部上半 微小砂粒	良 灰白10YR8/2		
58 回20			SD001 灰粘	土師器	直	(17.6)	-	(5.7)	-	*	25%	中や粗 体部上半 ~1mm石英・長石・雲母	良 浅黄橙7.5YR8/3		
59 回20			SD001 セクション以北 灰粘	丸瓦土器	直	*	-	(4.8)	-	*	1/3部 繊片	中や粗 微小砂粒	良 灰N5/0		
60 回20	回版19		SD001 セクション以北 灰粘	五貫土器 火鉢	直	*	-	(7.4)	-	*	口縁部 繊片	中や粗 微小砂粒	良 灰N5/0		
61 回20	回版19		SD001 セクション以南 灰粘	圓座陶器 山形陶	直	(13.4)	-	5.4	-	(4.8)	50%	直 微小砂粒	良 灰白5Y8/1		
62 回20	回版19		SD001 セクション以北 灰粘	圓座陶器 山形陶	直	(13.7)	-	5.6	-	(5.4)	25%	直 ~2mm長石	良 灰白2.5YR8/1		
63 回20	回版19		SD001 灰粘	土師器 人形	直	(3.2)	-	3.1	-	2.7	-	21.2g	中や粗 ~1mm石英・長石・雲母	良 にぶい橙5YR7/4	
64 回20	回版19		SD001 セクション以北 灰粘	瓦 軒平瓦	直	(4.5)	-	(14.0)	-	3.6	粗	~3mm石英・長石・雲母・チャート	良 灰白10YR7/1		
65 回21			SD001 灰粘	土師器	直	9.0	-	1.6	-	*	100%	中や粗 ~1mm石英・長石・雲母	良 橙2.5YR6/8		
66 回21			SD001 灰粘	土師器	直	10.0	-	2.4	-	*	100%	中や粗 ~2mm石英・長石・クサリ礫・雲母	良 橙5YR6/8		
67 回21			SD001 灰粘	土師器	直	10.6	-	2.5	-	*	80%	中や粗 ~2mm石英・長石・クサリ礫・雲母	良 橙7.5YR7/6		
68 回21			SD001 灰粘	土師器	直	10.8	-	2.5	-	*	100%	中や粗 ~1mm石英・長石・クサリ礫・雲母	良 橙5YR7/6		
69 回21			SD001 灰粘	土師器	直	10.8	-	2.5	-	*	95%	中や粗 ~1mm石英・長石・雲母	良 橙5YR6/6		
70 回21	回版19		SD001 灰粘	土師器	直	10.6	-	3.0	-	*	100%	中や粗 ~4mm石英・長石・クサリ礫・雲母 チャート	良 橙5YR6/8		

表 10 報告遺物一覧 (4)

報告番号	種別	写真	出土遺構	層位	種別 器種	口径	- 暫高 - 直徑 - 高	残存率	胎土・素材	焼成・色調	特記事項
71 国21 国版 19	SDD001	土師器 皿	周灰粘	11.2	- 3.2 - *			90%	やや粗 ~1mm石英・長石・カサリ礫・雲母	良 灰白 10YR8/2	
72 国21	SDD001	土師器 鉢	周灰粘	(25.3)	- (8.3) - *			25%	粗 ~5mm石英・長石・カサリ礫	良 浅黄褐色 7.5YR8/3	
73 国21 国版 20	SDD001	土師器 鉢	周灰粘	(23.0)	- 8.8 - (7.4)			33%	やや粗 ~4mm石英・長石	良 灰 NS/0	
74 国21	SDD001	土師器 皿	周灰砂	10.2	- 2.6 - *			60%	やや粗 ~2mm石英・長石・カサリ礫・雲母	良 浅黄褐色 7.5YR8/6	
75 国21	SDD001	土師器 皿	周灰砂	10.3	- 2.4 - *			80%	やや粗 ~5mm石英・長石・カサリ礫・雲母 チャート	良 稍 7.5YR7/8	
76 国21	SDD001	土師器 皿	周灰砂	10.5	- 2.7 - *			70%	やや粗 ~1.5mm石英・長石・カサリ礫・雲母	良 稍 5YR7/6	
77 国21	SDD001	土師器 鉢	周灰砂	(14.0)	- 5.3 - (4.5)			25%	細小砂粒	良 灰 N4/0	
78 国21	SDD001	土師器 鉢	周灰砂	*	- (4.4) - (30.2)			25%	やや粗 武部	良 灰 N4/0	
79 国22	SDD040	泥生土器 甕	*	(2.0)	- 4.0			100%	やや粗 底部のみ	良 灰 N4/0	
80 国22	SDD040	土師器 皿	*	(9.4)	- (1.6) - *			25%	やや粗 ~1mm石英・長石・カサリ礫	良 灰黄褐色 10YR5/2	
81 国22	SDD040	黑色土器 B類 椀	*	- (1.0)	- (6.1)			33%	やや粗 底部	良 オリーブ 7.5Y3/1	
82 国23 国版 20	SE071	土師器 皿	黑灰土	9.0	- 1.5 - *			100%	やや粗 ~1mm石英・長石・角閃石	良 灰白 10YR8/2	
83 国23 国版 20	SE071	土師器 皿	黑灰土	9.1	- 1.4 - *			100%	やや粗 カサリ礫・微小砂粒	良 浅黄褐色 7.5YR8/4	
84 国23 国版 20	SE071	土師器 皿	黑灰土	9.1	- 1.9 - *			80%	やや粗 ~1mm石英・長石・カサリ礫	良 灰白 10YR8/2	
85 国23	SE071	土師器 皿	黑灰土	9.3	- 1.8 - *			100%	やや粗 ~1mm石英・長石・カサリ礫・雲母	良 灰白 10YR8/2	
86 国23	SE071	土師器 皿	黑灰土	9.4	- 2.0 - *			100%	やや粗 ~1mm石英・長石・カサリ礫・雲母	良 稍 5YR7/6	
87 国23	SE071	土師器 皿	黑灰土	9.6	- 2.1 - *			100%	やや粗 ~2mm石英・長石・カサリ礫	良 灰白 10YR8/2	
88 国23	SE071	土師器 皿	黑灰土	9.7	- 1.7 - *			100%	やや粗 ~2mm石英・長石・カサリ礫・雲母	良 稍 5YR7/6	
89 国23	SE071	土師器 皿	黑灰土	(12.9)	- 3.0 - *			25%	やや粗 ~1mm石英・長石・カサリ礫	良 灰白 10YR8/1	
90 国23	SE071	土師器 皿	黑灰土	13.8	- 2.9 - *			100%	やや粗 ~10mm長石・カサリ礫・雲母	良 稍 2.5YR7/6	
91 国23	SE071	土師器 皿	黑灰土	13.9	- 2.7 - *			100%	やや粗 ~2mm長石・カサリ礫・雲母	良 稍 7.5YR7/6	
92 国23	SE071	土師器 皿	黑灰土	(14.0)	- 2.7 - *			25%	やや粗 ~1mm石英・長石・カサリ礫・雲母	良 稍 7.5YR7/6	
93 国23	SE071	土師器 皿	黑灰土	14.0	- 2.9 - *			100%	やや粗 ~4mm石英・長石・カサリ礫・雲母	良 稍 5YR7/8	
94 国23	SE071	土師器 皿	黑灰土	14.1	- 2.9 - *			100%	やや粗 ~1mm長石・カサリ礫・雲母	良 浅黄褐色 7.5YR8/6	
95 国23	SE071	土師器 皿	黑灰土	14.1	- 2.9 - *			100%	やや粗 ~1mm長石・カサリ礫・雲母	良 稍 5YR7/8	
96 国23	SE071	土師器 皿	黑灰土	14.4	- 2.9 - *			100%	やや粗 ~1mmカサリ礫・雲母・微小砂粒	良 稍 5YR7/6	
97 国23 国版 20	SE071	輪入器皿 臼輪	白輪	*	- (4.5) - *			密	微小の白色粒	良 灰白 2.5YB/1	
98 国23	SE071	土師器 皿	灰粘	9.4	- 1.6 - *			70%	やや粗 ~1mm石英・長石・カサリ礫・雲母	良 灰白 5YB/4	
99 国23	SE071	土師器 皿	灰粘	9.5	- 1.6 - *			60%	やや粗 ~3mm石英・長石・カサリ礫	良 灰白 2.5YB/2	
100 国23 国版 20	SE071	土師器 皿	灰粘	14.8	- 2.6 - *			100%	やや粗 ~4mm長石・カサリ礫・雲母	良 稍 7.5YR7/6	

表 11 報告遺物一覧 (5)

報告番号	鉢図	写真	出土遺物層位	種別 器種	口径 - 横溝 - 直溝 - 高さ	保存率	埴土・素材	焼成・色調	特記事項
101 回23	SE071 灰粘		土師器 面	(15.0) - 2.7 - * -	25%	中や粗 ~1mm石英・カサリ繊	良 暗灰 SYR7/8		
102 回23	SE071 灰粘		古式土師器 直	* - (1.4) - (6.8) -	90%	中や粗 底部分のみ ~3mm石英・長石・カサリ繊・雲母	不良 浅黄褐 7SYR8/4		
103 回23	回版 29 灰粘		瓦器 板	(14.8) - 5.0 - (6.7) -	25%	中や粗 微小砂粒	良 暗灰 N3/0		
104 回24	SE120 泥粘土		土師器 盤	10.0 - 2.0 - * -	80%	中や粗 ~1mm石英・長石・雲母	灰白 10YR8/2		
105 回24	SE120 泥粘土		土師器 盤	10.3 - 2.1 - * -	100%	中や粗 ~3mm石英・長石・雲母	良 浅黄褐 10YR8/4		
106 回24	回版 29 泥粘土		土師器 盤	10.3 - 2.3 - * -	100%	中や粗 ~1mm石英・雲母	良 灰白 7.5YR8/2		
107 回24	回版 29 泥粘土		土師器 盤	9.7 - 1.4 - * -	60%	中や粗 ~1mm石英・長石・カサリ繊・雲母	良 浅黄褐 7.5YR8/3		
108 回24	SE120 泥粘土		土師器 盤	10.3 - 2.3 - * -	100%	中や粗 ~1mm石英・長石・雲母	良 灰白 2.5YR8/2		
109 回24	SE120 泥粘土		土師器 盤	10.6 - 2.3 - * -	100%	中や粗 ~1mm石英・長石・カサリ繊・雲母	良 灰白 10YR8/2		
110 回24	SE120 泥粘土		土師器 盤	(10.8) - 2.3 - * -	33%	中や粗 ~2mm石英・長石・雲母	良 灰白 10YR8/2		
111 回24	SE120 泥粘土		土師器 盤	15.4 - 3.0 - * -	70%	中や粗 ~1mm石英・カサリ繊・雲母	良 灰白 10YR8/2		
112 回24	SE120 泥粘土		土師器 盤	15.4 - 2.9 - * -	80%	中や粗 ~4mm石英・長石・カサリ繊・雲母	良 灰白 10YR8/2		
113 回24	回版 21 泥粘土		土師器 盤	15.5 - 3.0 - * -	80%	中や粗 ~5mm長石・雲母・チート	良 浅黄褐 10YR8/3		
114 回24	回版 21 泥粘土		土師器 盤	(16.6) - 2.8 - * -	50%	中や粗 ~3mm石英・長石・雲母	良 灰白 10YR8/2		
115 回24	SE120 泥粘土		土師器 盤	* - (6.0) - * -	70%	中や粗 ~2.5mm石英・黑色粒・チート	良 N5/0		
116 回24	回版 21 泥粘土		瓦器 板	14.6 - 5.5 - 5.1 -	90%	中や粗 微小砂粒	良 暗灰 N3/0		
117 回24	回版 21 泥粘土		瓦器 板	9.6 - 2.1 - * -	80%	中や粗 微小砂粒	良 N4/0		
118 回24	回版 21 泥粘土		瓦器 板	2.8 - 1.7 - * -	100%	中 雲母・微小砂粒	良 黑 N2/0		
119 回24	回版 21 泥粘土		瓦器 板 不明品	* - (2.3) - 3.0 -	50%	中や粗 ~1mm石英・長石・雲母	良 灰 N6/0		
120 回24	SE120 泥粘土		瓦器 板 不明品	(10.2) - (6.0) - 2.5 -	90%	中や粗 ~2.5mm石英・長石・カサリ繊・雲母	良 灰白 7.5YR8/1		
121 回24	回版 21 泥粘土		土製器 面	(5.9) - 3.6 - 3.5 - 57.1g	90%	中 ~1mm石英・長石・カサリ繊・雲母	良 2.5YR6/8		
122 回24	SE120 泥粘土		土製器 面	(7.6) - (7.2) - (3.7) - 150.1g	50%	粗 ~4mm石英・長石・雲母	良 明褐色 10YR7/6		
123 回24	回版 21 泥粘土		土師器 盤	10.4 - 1.9 - * -	70%	中や粗 ~2mm石英・長石・カサリ繊・雲母	良 浅黄褐 10YR8/3		
124 回24	回版 21 泥粘土		土師器 盤	15.0 - 2.8 - * -	90%	中や粗 ~3mm石英・長石・雲母	良 浅黄褐 10YR8/3		
125 回24	回版 22 泥粘土		土師器 盤	(15.8) - 3.0 - * -	80%	中や粗 ~2mm石英・長石・雲母	良 浅黄褐 10YR8/3		
126 回24	SE120 泥粘土		瓦器 板	(15.0) - (4.6) - *	25%	中 体部	良 暗灰 N3/0		
127 回24	SE120 泥粘土		瓦器 板	* - (3.2) - (5.9) -	50%	中 底部	良 微小砂粒	N5/0	
128 回24	回版 22 泥粘土		瓦器 板	* - (1.4) - (6.7) -	50%	中 底部	良 微小砂粒	N4/0	
129 回24	回版 22 泥粘土		SE120 泥粘土	(9.9) - 2.1 - * -	50%	中や粗 ~1mm石英	良 N4/0		
130 回24	SE120 泥粘土		瓦器 板	* - (5.6) - *	50%	中や粗 ~3mm石英・長石・黑色粒	良 N6/0		
131 回24	SE120 泥粘土		瓦器 板	* - (9.0) - *	50%	体部 粗	良 ~4mm長石・黑色記粒	N6/0	

表 12 報告遺物一覧 (6)

報告番号	種別	写真	出土遺構	層位	種別 器種	口径	-	器高	-	直径	-	裏	残存率	施土・素材	焼成・色調	特記事項
132 国25 国版 22	SE120	瓦器 鉢	輪入繩目 灰灰土		*	-	(9.4)	-	*				体部鉢内 ~1mm長石・カサリ織	良 灰 N4/0		
133 国25 国版 22	SE120	輪入繩目 白灰土	輪入繩目 白灰土		(14.0)	-	(3.8)	-	*			10%	密 微小砂粒	良 灰白 N8/0	(輪) 灰白 5Y7/1	
134 国25 国版 22	SE120	輪入繩目 白灰土	輪入繩目 白灰土		(15.2)	-	(3.3)	-	*			10%	半や粗 微小砂粒・黒色粒	良 灰白 N8/0	(輪) 灰白 2.5GY8/1	
135 国25	SE120	石製品 鉢	輪灰土		*	-	(6.8)	-	*	293g			口縁部 鉢片	滑石		
136 国25	SE120	土器器 皿	黑粘土		10.3	-	1.6	-	*			100%	密 ~1mm長石・雲母	良 浅黄褐 7.5Y8B/4		
137 国25	SE120	土器器 皿	黑粘土		11.0	-	1.8	-	*			50%	半や粗 ~3mm石英・長石・カサリ織・雲母	良 浅黄褐 7.5Y8B/3		
138 国25	SE120	土器器 皿	黑粘土		(15.0)	-	(2.7)	-	*			33%	半や粗 ~1mm長石・カサリ織・雲母	良 浅黄褐 10Y8B/4		
139 国25 国版 22	SE120	白色土器 皿	黑粘土		*	-	(1.7)	-	(6.9)			50%	半や粗 底部 ~3mm石英・長石	良 灰白 N8/0		
140 国25	SE120	瓦器 鉢	輪入繩目 白灰土		(14.4)	-	4.0	-	*			10%	密 微小砂粒	良 灰 N5/0		
141 国25	SE120	瓦器 鉢	輪入繩目 白灰土		*	-	(2.0)	-	5.2			100%	半や粗 底部 微小砂粒	良 灰 N4/0		
142 国25 国版 22	SE120	輪入繩目 白灰土	輪入繩目 白灰土		(15.0)	-	5.5	-	(5.6)			40%	半や粗 微小砂粒・黒色粒	良 灰白 N8/0	(輪) 灰白 7.5Y8/1	
143 国25	SE120	輪入繩目 白灰土	輪入繩目 白灰土		*	-	(3.7)	-	7.4			100%	密 ~1mm黑色粒	良 灰白 2.5Y8/1	(輪) 灰白 2.5Y7/1	
144 国25	SE120	石製品 平鉢			11.8	-	11.2	-	5.0	-	990g		花崗岩			
145 国25 国版 22	SE120	木製品 木桶	黑粘土		(4.8)	-	3.8	-	3.6				心材材			
146 国25 国版 22	SE120	木製品 木筒	黑粘土		(8.1)	-	1.6	-	0.8				板目取り			
147 国25 国版 23	SE120	木製品 木筒	黑粘土		12.3	-	1.6	-	0.5				板目取り			
148 国25	SE120	木製品 箸	黑粘土		(24.4)	-	2.0	-	0.5				板目取り			
149 国26 国版 23	SE120	土器器 皿	黑粘土下		8.3	-	1.2	-	9.2			20%	半や粗 ~1mm石英・長石・カサリ織	良 浅黄褐 10Y8B/3		
150 国26 国版 23	SE120	土器器 皿	黑粘土下		10.1	-	2.2	-	*			100%	半や粗 ~3mm長石・カサリ織・雲母	良 浅黄褐 10Y8B/3		
151 国26 国版 23	SE120	土器器 皿	黑粘土下		10.4	-	2.2	-	*			100%	半や粗 ~1mm長石・カサリ織・雲母	良 灰白 10Y8B/2		
152 国26	SE120	土器器 皿	黑粘土下		10.7	-	2.1	-	*			100%	半や粗 ~1mm石英・長石・雲母	良 浅黄褐 10Y8B/3		
153 国26	SE120	土器器 皿	黑粘土下		(16.4)	-	2.8	-	*			20%	半や粗 ~1mm石英・長石	良 灰白 2.5Y8/1		
154 国26	SE120	土器器 皿	黑粘土下		(22.0)	-	(7.0)	-	*			25%	半や粗 ~2mm石英・長石	良 灰白 7.5Y8B/2		
155 国26 国版 23	SE120	瓦器 鉢	黑粘土下		(15.0)	-	5.8	-	(5.0)			50%	密 微小砂粒	良 灰 N4/0		
156 国26	SE120	木製品 箸	黑粘土下		(7.5)	-	0.8	-	0.5				板目取り			
157 国26	SE120	木製品 箸	黑粘土下		(12.2)	-	0.6	-	0.4				板目取り			
158 国26	SE120	木製品 箸	黑粘土下		(12.9)	-	0.6	-	0.6				追板目取り			
159 国26	SE120	木製品 箸	黑粘土下		(11.5)	-	0.6	-	0.4				板目取り			
160 国26	SE120	木製品 箸	黑粘土下		(18.9)	-	2.6	-	0.6				追板目取り			
161 国26	SE120	木製品 曲形底板	黑粘土下		(22.1)	-	(6.1)	-	0.8				板目取り			
162 国26 国版 23	SE120	木製品 直形木製品	黑粘土下		22.3	-	2.1	-	0.5				板目取り			

表 13 報告遺物一覧 (7)

報告番号	鉢図	写真	出土遺物層位	種別 器種	口径 - 器高 - 底径 - 壁 厚	残存率	地土・素材	焼成・色調	特記事項
163 回26	回N.23	SE120	木製品 荷札状木製品	(11.5) - (1.3) - 0.6			板印取り		
164 回26	回N.24	SE120	木製品 柄状木製品	2.6 - 12.3 - 2.9			板印取り		
165 回26	回N.24	SE120	木製品 柄状木製品	12.4 - 1.9 - 0.5			板印取り		
166 回26		SE120	木製品 柄状木製品	(7.4) - 2.7 - 2.6			心得材		
167 回27		SE120	木製品 柄状木製品	12.7 - 2.0 - 0.4			板印取り		
168 回27		SE120	木製品 柄状木製品	(12.6) - (2.2) - 0.3			板印取り		
169 回27		SE120	木製品 柄状木製品	9.7 - 1.7 - 0.5			板印取り		
170 回27		SE120	木製品 柄状木製品	21.9 - 4.3 - 0.9			板印取り		
171 回27	回N.24	SE120	木製品 柄状木製品	(12.1) - 5.9 - 0.5			板印取り		
172 回27		SE120	木製品 柄状木製品	19.0 - 1.6 - 0.4			板印取り		
173 回27		SE120	木製品 柄状木製品	(18.3) - 1.2 - 0.5			板印取り		
174 回27		SE120	木製品 柄状木製品	13.0 - 2.0 - 0.5			板印取り		
175 回27		SE120	木製品 柄状木製品	14.4 - 1.8 - 0.3			板印取り		
176 回27		SE120	木製品 柄状木製品	17.8 - 1.6 - 0.5			板印取り		
177 回27	回N.24	SE120	木製品 柄状木製品	30.7 - 2.0 - 0.8			板印取り		
178 回27	回N.24	SE120	木製品 柄状木製品	45.5 - 5.8 - 0.6			板印取り		
179 回28		SE120	土師器 圓錐砂(瓶方) 直	10.1 - 2.2 - *	80%	やや粗 ~1mm石英・長石・クサリ礫・雲母	良		
180 回28		SE120	土師器 圓錐砂(瓶方) 直	10.8 - 2.0 - *	100%	やや粗 ~1mm石英・長石・クサリ礫・雲母	良	浅黄褐色 10YR8/3	
181 回28		SE120	土師器 圓錐砂(瓶方) 直	15.1 - 3.0 - *	70%	やや粗 ~2mm石英・雲母	良	浅黄褐色 10YR8/2	
182 回28	回N.25	SE120	輪入磁器 圓錐砂(瓶方) 白	(16.0) - (3.3) - *	10%	やや粗 體部 滾小粒・白色粒	良	(触) 灰白 5YB/1	
183 回28	回N.25	SE120	輪入磁器 圓錐砂(瓶方) 白	(16.4) - (5.1) - *	40%	やや粗 體部 滾小粒・白色粒	良	(触) 灰白 N8/0	
184 回28		SE120	石器 圓錐砂(瓶方) 白	(6.9) - 3.2 - 2.5 - 89.8g		圓灰岩			
185 回28	回N.25	SE120	金屬製品 柄状木製品	(5.2) - (4.1) - 0.5 - 4.6g					
186 回29	回N.25	SK013	土師器 直	7.5 - 1.3 - *	50%	やや粗 微小粒:	良	京都産	
187 回29	回N.25	SK013	土師器 直	8.6 - 1.9 - *	100%	やや粗 ~2mm石英・長石・クサリ礫・雲母	粗 7.5YR7/6	京都産	
188 回29		SK013	土師器 直	8.3 - 1.5 - *	100%	やや粗 ~2mm石英・長石・クサリ礫・雲母	粗 5YR7/8	京都産	
189 回29		SK013	土師器 直	9.1 - 1.6 - *	80%	やや粗 ~2mm石英・長石・クサリ礫・雲母	粗 5YR7/6		
190 回29		SK013	土師器 直	9.8 - 1.5 - *	100%	やや粗 ~2mm石英・長石・クサリ礫・雲母	粗 5YR8/4		
191 回29		SK013	土師器 直	(11.1) - 1.6 - *	25%	やや粗 微小粒:	良	灰白 7.5YR8/1	
192 回29		SK013	土師器 直	10.9 - 1.9 - *	80%	やや粗 ~2mm石英・長石・クサリ礫・雲母	粗 5YR7/6		
193 回29		SK013	土師器 直	(11.7) - 2.7 - *	25%	やや粗 ~2mm石英・長石・クサリ礫・雲母	粗 7.5YR7/6		

表14 報告遺物一覧 (8)

報告番号	種別	写真	出土遺構	層位	種別 器種	口径	-	器高	-	直径	-	裏	残存率	胎土・素材	焼成・色調	特記事項	
194 国29 開版 25 SK013	土師器				土師器	13.5	-	2.9	-	*			100%	やや粗	良		
					土師器	(12.0)	-	3.2	-	*			25%	やや粗	良		
195 国29 開版 25 SK013	土師器				土師器		-		-	*				~4mm石英+長石・カサリ織・雲母	相 SYR7/6		
196 国29 SK013	土師器				土師器	13.4	-	3.3	-	*			100%	やや粗	良		
					土師器		-		-	*				~4mm石英+長石・カサリ織・雲母	相 SYR7/8		
197 国29 SK013	土師器				土師器	*	-	(4.2)	-	*				0.5mm片岩	良		
					土師器		-		-	*				~3mm石英+長石	灰白 N8/0		
198 国29 開版 25 SK013	土師器				土師器	(13.2)	-	4.4	-	*			25%	滑	良		
					土師器		-		-	*				微小砂粒	NK N6/0		
199 国29 SK013	土師器				土師器	(14.1)	-	(3.2)	-	*			10%	滑	良		
					土師器		-		-	*				体部	NK N6/0		
200 国29 SK013	石製品				石製品	(21.4)	-	(4.6)	-	*	-	290g	25%	滑石			
					石製品		-		-	*				体部上半			
201 国30 SK056	土師器				土師器	8.9	-	1.6	-	*			100%	やや粗	良		
					土師器		-		-	*				~2mm石英+長石・カサリ織	相 2.5YR6/6		
202 国30 SK056	土師器				土師器	9.0	-	2.0	-	*			80%	やや粗	良		
					土師器		-		-	*				~2mm石英+長石・カサリ織・雲母	相 SYR7/6		
203 国30 SK056	土師器				土師器	9.1	-	1.4	-	*			100%	やや粗	良		
					土師器		-		-	*				~1mm長石	相 SYR7/6		
204 国30 SK056	土師器				土師器	(12.0)	-	2.5	-	*			25%	やや粗	良		
					土師器		-		-	*				~7mm石英+長石・カサリ織・雲母	相 SYR7/6		
205 国30 SK056	土師器				土師器	(12.3)	-	3.1	-	*			33%	やや粗	良		
					土師器		-		-	*				~3mm長石	相 SYR7/6		
206 国30 SK056	土師器				土師器	(13.7)	-	2.9	-	*			25%	やや粗	良		
					土師器		-		-	*				~3mm石英+長石・カサリ織・雲母	相 SYR7/6		
207 国30 SK056	土師器				土師器	*	-	(1.9)	-	(6.6)			40%	やや粗	良		
					土師器		-		-	*				底部	~1mm石英+長石・カサリ織・雲母	相 7.SYR7/6	
208 国30 SK056	土師器				土師器	(16.1)	-	(3.0)	-	*			10%	滑	良		
					土師器		-		-	*				体部上半	微小砂粒	灰白 10YR8/2	
209 国30 SK056	土師器				土師器	*	-	(2.9)	-	5.1			50%	滑	良		
					土師器		-		-	*				底部	微小砂粒	灰白 N8/0	(輪) 明缺灰 5G7/1
210 国30 SK056	土師器				瓦	(4.0)	-	(6.5)	-	4.4			やや粗	良			
					瓦		-		-	*				~3mm石英+長石・黒色鉄	NK N7/0		
211 国31 SK060	土師器				土師器	10.1	-	2.2	-	*			60%	やや粗	良		
					土師器		-		-	*				~1mm石英+長石・カサリ織・雲母	~5.5~相 SYR7/4		
212 国31 SK060	土師器				土師器	15.2	-	3.1	-	*			80%	やや粗	良		
					土師器		-		-	*				~3mm長石	相 SYR7/6		
213 国31 SK060	土師器				土師器	15.5	-	3.5	-	*			80%	やや粗	良		
					土師器		-		-	*				~2mm石英+長石・カサリ織・雲母	相 SYR7/8		
214 国31 SK060	土師器				土師器	16.8	-	3.0	-	*			70%	やや粗	良		
					土師器		-		-	*				~7mm石英+長石・カサリ織・雲母	~5.5~相 SYR7/4		
215 国31 SK060	土師器				土師器	*	-	(1.2)	-	4.6			90%	やや粗	良		
					土師器		-		-	*				底部	微小砂粒	NK N5/0	
216 国31 SK070	土師器				土師器	(12.7)	-	2.1	-	*			20%	滑	良		
					土師器		-		-	*				微小砂粒	相 SYR7/4		
217 国31 SK070	土師器				土師器	*	-	(3.7)	-	*				体部織片	やや粗	良	
					土師器		-		-	*				~1mm長石	NK N3/0		
218 国31 SK070	土師器				土師器	*	-	(8.4)	-	*				体部織片	粗	良	信楽燒
					土師器		-		-	*				~4mm石英+長石	相 SYR7/6		
219 国31 開版 25 SK070	石製品				石製品	3.0	-	2.0	-	1.8	-	12.9g		水晶			
					石製品		-		-	*				~1mm長石	相 SYR7/4		
220 国38 SK090	土師器				土師器	7.8	-	1.5	-	*			70%	やや粗	良		
					土師器		-		-	*				~1mm長石	相 SYR7/4		
221 国38 SK090	土師器				土師器	*	-	(3.2)	-	*				やや粗	良		
					土師器		-		-	*				~2mm石英+長石・カサリ織・雲母	~5.5~相 SYR7/4		
222 国38 SK090	土師器				土師器	*	-	(6.2)	-	*				口縁部	やや粗	良	
					土師器		-		-	*				~1mm長石	NK N5/0		
223 国38 開版 25 SK090	土師器				土師器	*	-	11.6	-	*			10%	やや粗	良		
					土師器		-		-	*				~1mm石英+長石・雲母	NK N4/0		

表 15 報告遺物一覧 (9)

報告番号	鉢図	写真	出土遺構	層位	種別	器種	口径	- 横溝 -	底溝	- 高	残存率	埴土・素材	焼成・色調	特記事項
224 回 39	SK094		土師器	面	(6.7)	- 1.2 -	- * -			40%	中や粗 ~1mm石英・長石・雲母	良 にぶい燒成 10YR7/2		
225 回 39	SK094		土師器	面	7.0	- 1.4 -	- * -			100%	中や粗 微小砂粒	良 灰白 10YR8/2		
226 回 39	SK094		土師器	盤	7.4	- 1.5 -	- * -			100%	中や粗 ~1mm石英・雲母	良 灰白 10YR8/2		
227 回 39	SK094		土師器	盤	8.0	- 1.6 -	- * -			100%	中や粗 ~3mm石英・長石・カシリ溝・雲母	良 灰白 10YR8/2		
228 回 39 回版 26	SK094		土師器	面	8.0	- 1.3 -	- * -			100%	中や粗 ~1mm石英・カシリ溝・雲母	良 淡黄褐色 7.5YR8/3		
229 回 39 回版 26	SK094		土師器	盤	(9.0)	- 1.5 -	- * -			40%	粗 ~3mm石英・長石・雲母	良 にぶい燒成 7.5YR7/4		
230 回 39 回版 26	SK094		土師器	盤	13.4	- 2.3 -	- * -			80%	中や粗 ~3mm石英・長石・雲母	良 灰白 10YR8/2		
231 回 39	SK094		土師器	盤	6.4	- 0.9 -	- * -			50%	中や粗 ~1mm長石	良 灰白 10YR8/2		
232 回 39	SK094		土師器	盤	6.2	- 1.1 -	- * -			70%	中や粗 ~1mm長石・雲母	良 灰白 10YR8/2		
233 回 39	SK094		土師器	盤	(8.5)	- 1.5 -	- * -			50%	微小砂粒	良 灰白 10YR8/2		
234 回 39	SK094		土師器	釜	(19.0)	- (6.1) -	- * -			10%	中や粗 ~2mm石英・長石・カシリ溝・雲母	良 淡黄褐色 10YR8/3		
235 回 39	SK094		瓦質土器	盤	*	- (8.4) -	- * -				体部上半 繩片	良 ~2mm石英・長石・雲母	灰 N4/0	
236 回 39	SK094		瓦質土器	盤	*	- (4.9) -	- * -				体部上半 繩片	良 ~2mm長石	灰 N5/0	
237 回 39 回版 26	SK094		瓦質土器	深鉢	(29.5)	- 25.0 -	- 30.0 -			50%	粗 微小砂粒	良 灰 N4/0		
238 回 39	SK094		瓦質土器	盤	(44.0)	- (5.5) -	- * -			20%	中や粗 ~1mm石英・長石	良 灰 N4/0		
239 回 40 回版 26	SK094		輸入器物	青磁陶	*	- (4.0) -	- (5.0) -			50%	粗 微小砂粒	良 灰白 10W8/0		
240 回 40 回版 26	SK094		輸入器物	青磁陶	23.6	- 4.7 -	- 12.1 -			90%	粗 微小砂粒	良 灰白 10N7/0	(触) 用オーブン 2.5GY7/1	
241 回 40	SK094		同年度鏡輪向印	盤	*	- (10.5) -	- * -				体部上半 繩片	良 ~7mm石英・長石	灰白 10YR8/2	信楽焼
242 回 40	SK094		同年度鏡輪向印	盤	*	- (8.3) -	- * -				口縁部 繩片	良 ~3mm石英・長石	灰白 7.5YR5/1	信濃焼
243 回 41 回版 27	SK103		瓦質土器	盤	(31.0)	- 14.3 -	- 11.1 -			30%	中や粗 ~1mm長石	良 灰 N4/0		
244 回 41 回版 27	SK103		瓦質土器	盤	(30.0)	- (8.5) -	- * -			25%	中や粗 微小砂粒	良 灰白 N3/0		
245 回 41 回版 27	SK103		瓦質土器	信楽	*	- (9.7) -	- * -				把手付 のみ残り	良 ~1mm長石・雲母	灰 N4/0	
246 回 41 回版 27	SK103		同年度鏡輪向印	柄	*	- (4.5) -	- (5.0) -			10%	中や粗 体部下半 繩片	良 ~1mm長石	(触) にぶい燒成 5YR4/3	
247 回 41	SK103		瓦質土器	平底	(15.0)	- (11.2) -	- 4.5 -				中や粗 繩片	良 灰白 10N7/0		
248 回 42	SX110		土師器	盤	7.4	- 1.5 -	- * -			100%	中や粗 ~1mm長石・雲母	良 にぶい燒成 10YR7/2		
249 回 42	SX110		土師器	盤	7.8	- 1.5 -	- * -			100%	中や粗 ~4mm長石・雲母	良 にぶい燒成 10YR7/3		
250 回 42	SX110		土師器	盤	7.8	- 1.5 -	- * -			100%	中や粗 ~1mm長石・雲母	良 灰青 2.5Y7/2		
251 回 42	SX110		土師器	盤	7.8	- 1.5 -	- * -			100%	中や粗 ~1mm長石・雲母	良 にぶい燒成 10YR7/2		
252 回 42	SX110		土師器	釜	(26.4)	- (6.4) -	- * -			20%	粗 微小砂粒	良 灰白 10YR7/1		
253 回 42	SX110		瓦質土器	盤	(16.4)	- 8.0 -	- (7.0) -			30%	中や粗 ~1mm長石・雲母	良 灰 N6/0		
254 回 42	SX110		瓦質土器	盤	*	- (6.2) -	- * -				口縁部 繩片	良 ~1mm長石・雲母・熱燐石?	灰 N5/0	

表 16 報告遺物一覧 (10)

報告番号	種別	写真	出土遺構	層位	種別 器種	口径	- 器高 - 直径 - 高	残存率	地土・素材	焼成・色調	特記事項
255 回42		SX110	瓦質土器 内鉢		*	(7.1)	- *		体部断片 ~2mm石英・長石・雲母	良 灰 N6/0	
256 回42		SX110	輪入土器 青磁板		*	(4.0)	- *		口縁部 断片	良 灰白 N8/0	
257 回42		SX110	輪入土器 青磁板		*	(2.0)	- (6.0)		25% 瓦 底部	良 白 N9/0	
258 回42		SX110	輪入土器 青磁板		*	(1.2)	- (2.8)	30%	瓦 底部	良 白 N9/0	
259 回45		SK050	圓筒形器 袋付陶		(10.1)	- 6.1	- 3.8	80%	瓦	良 白 N9/0	
260 回45		SK050	圓筒形器 袋付陶		(6.6)	- 4.6	- 2.8	80%	瓦 袋小砂粒	良 白 N9/0	
261 回45		SK050	圓筒形器 袋付陶		(7.4)	- 5.8	- 2.6	70%	瓦 袋小砂粒	良 白 N9/0	
262 回45		SK050	圓筒形器 袋付陶		0.2	- 2.5	- 3.8	70%	瓦	良 白 N9/0	瀬戸窯
263 回45	圓筒27	SK050	圓筒形器 水注		5.6	- (14.1)	- *	70%	瓦	良 白 N9/0	
264 回46		SX100	軒丸瓦		(5.9)	- (14.8)	- (8.1)		半火粗 ~8mm石英・長石・黒色粒	良 灰 5Y4/1	
265 回46		SX100	瓦		4.5	- 3.5	- *	100%	半火粗 ~4mm石英・長石・雲母	良 灰白 2.5Y7/1	
266 回46		SX100	ガラス製品 鶴		(2.9)	- 0.6	- 0.5				
267 回47		SP083	瓦		37.0	- 30.1	- 8.3		半火粗 ~2mm石英・長石・雲母・黒色粒	良 灰 N4/0	
268 回48	圓筒27	SK099	骨角製品 陶ブラシ		(9.3)	- 1.3	- 0.8			灰白 10YR8/2	
269 回49	圓筒28	灰土	瓦		(18.8)	- (6.7)	- 4.1		半火粗 ~3mm石英・長石・カサリ透・雲母	良 灰 N5/0	

表 17 検出遺構および出土遺物一覧 (1)

S番号	遺構番号	層位	種別	所見	出土遺物	地区
1	SD001	褐色土	溝		土師器（中世～）縁・蓋・釜、須恵器（古代）杯・甕、灰陶片、瓦器片、瓦質土器火鉢、瓦質土器火鉢・蓋・釜・甕、輸入白磁器、国産灰陶器、国産灰陶器・蓋、瓦質土器蓋・釜・甕、灰陶片、瓦器片、瓦質土器火鉢・蓋・釜・甕、須恵器（古代）甕、須恵器（中世～）縁（束縛）、縁（束縛）、黒色土器A類縁、瓦器片・縁、瓦質土器釜・蓋・釜、灰陶片・平底・丸底、土器火鉢、不明鉄製品	17A + B
					土師器（中世～）縁・蓋・白色土器（高杯）、須恵器（古代）甕、須恵器（中世～）縁（束縛）、縁（束縛）、甕（束縛）、黒色土器A類縁、瓦器片・縁、瓦質土器釜・火鉢、輸入白磁器、国産灰陶器茶碗・甕、灰平底・平底・丸底、土器火鉢、不明鉄製品	
		灰灰粘			土師器（中世～）縁・蓋・釜、須恵器（古代）甕、須恵器（中世～）縁（束縛）、瓦器片・縁、瓦質土器釜・火鉢・縁、灰平底・平底・丸底	
					土師器（中世～）縁・蓋、須恵器（古代）甕、瓦器片、瓦質土器火鉢	
2		掘孔	19C 以降		土師器（中世～）縁・蓋、瓦器片、瓦器片、瓦質土器火鉢、国産灰付碗・皿、国産灰器蓋・皿、平底・丸底、不明鉄製品	15B
3		土坑	13C 後半		甕・土器部、土器部（古代）甕、土器部（中世～）縁、瓦器片、輸入青磁片、輸入白磁器、国産灰器蓋・甕、不明鉄製品	15A + B
4		土坑	13C 後半、深さ 5cm		土師器（中世～）縁・蓋、瓦器片、瓦質土器・丸瓦	16A + B
5		溝	深さ 3cm		土師器（中世～）縁	15A
6	SB130g	ピット	瓦による組みめあり		土師器（中世～）縁・白色土器（皿）、瓦器片・皿、平底	16A
7		ピット	12C 中葉		土師器（中世～）縁、瓦器片、輸入青磁片、平底	15B
8		ピット			土師器（中世～）縁	16A + B
9		ピット			土師器（中世～）縁、瓦器片	15A
10		月桂	19C		土師器（中世～）縁・焼物、黒色土器 A類縁、瓦器片・縁、瓦質土器蓋・甕、国産青磁片、輸入青磁器、国産灰付碗・皿、国産陶器明面・横縫・土瓶、平底・丸底、曲物底板	14A + B
11	SB130f	ピット			土師器（中世～）縁、瓦器片	15A
12		ピット			土師器（中世～）縁、黑色土器 A類縁	15A
13	SK013	土坑			土師器（土師器）縁・蓋・白色土器（皿）、須恵器（古代）杯・甕・蓋、須恵器（中世～）縁（束縛）、瓦器片・皿、輸入白磁器、輸入白磁器、輸入白磁器、國産陶器・皿、石鍋、平底・丸底、封	16B
14		ピット			土師器（中世～）縁	16B
15		土坑	深さ 2cm		土師器（中世～）縁、須恵器（古代）縫叶	16A + B
16	SB130a	ピット			土師器（中世～）縁、須恵器（古代）甕、瓦器片・皿、輸入白磁器、輸入白磁器、輸入白磁器	16B
17		土坑			土師器（中世～）縁、瓦器片、平底、不明鉄製品	16B
18		土坑	深さ 5cm		土師器（中世～）縁、瓦片	16A + B
19		ピット	深さ 5cm		土師器（中世～）縁、瓦器片	15A
20	SD020	溝			争生土器蓋、土師器（古代）縫片、須恵器（古代）蓋	14 + 15A + B
21		土坑	深さ 5cm		土師器（中世～）縁、須恵器（中世～）甕（束縛）、黒色土器 A類縁、瓦器片、国産陶器・甕、丸瓦	15A
22		土坑	深さ 5cm		土師器（中世～）縁、須恵器（古代）杯、瓦器片	15A + B
23		ピット	12C 後半		須恵器（中世～）甕、須恵器（古代）杯、瓦器片	15B
24		ピット			須恵器（中世～）甕、須恵器（束縛）	15B
25		ピット	深さ 5cm		土師器（中世～）縁、瓦器片	15A
26		土坑	埋土地山ブロック主体		土師器（中世～）縁・蓋、瓦器片	15B
27		ピット			土師器（中世～）縁	15B
28		ピット			土師器（中世～）縁	15B
29		ピット			土師器（中世～）縁	15B
30		土坑	19C		土師器（中世～）縁、須恵器（古代）杯、瓦質土器蓋・縫・瓶炉、国産灰付碗・皿、国産陶器縫・甕、灰平底・平底・丸底、漆器片	14A + B
31		土坑	深さ 5cm		土師器（中世～）縁	15B
32		土坑	深さ 5cm		土師器（古代）甕、土師器（中世～）縁、須恵器（古代）杯、国産陶器蓋	15B

表 18 検出遺構および出土遺物一覧（2）

S番号	遺構番号	層位	種別	所見	出土遺物	地区
33			ピット	13C 瓦面	土師器（中世～）皿、瓦器柄、輸入白磁碗、平瓦	15B
34			ピット		土師器（中世～）皿、瓦器柄、丸瓦	15A
35			ピット	13C 中盤	土師器（中世～）皿、須恵器（古代）皿、瓦器柄、平瓦	15A
36			溝	埋土は地山に類似	土師器（古代）縁片	15A
37			ピット	深さ 5cm	土師器（中世～）皿、瓦器柄	16A
38			ピット	深さ 5cm	土師器（中世～）皿、瓦器柄	16A
39			ピット	深さ 5cm	土師器（中世～）皿	16A
40	SD040		溝		須恵器、土師器（古代）皿・縁片、土師器（中世～）皿、須恵器（古代）杯・盤、黒毛土器 B 級輪、平瓦、焼土	12・13A
41		土坑	19C		土師器（中世～）皿、甕・壺柄、須恵器（古代）甕・瓶柄、須恵器（中世～）縁片（束縛）、瓦器柄、瓦質土器縁片・甕・壺・輪、輸入青磁碗、国産染付椀・甕・色絵窓、国産陶器・甕・直・灯明窓・蓋・壺・縁・甕・土瓶・植木鉢・壺・石、軽丸瓦・平瓦・磚・筒瓦窓、釘・牛ゼル・副輪・不明鉄製品、焼土、灰	12・13A・B
42			ピット		土師器（中世～）皿、残瓦	16B
43			ピット		土師器（中世～）皿、瓦器柄	13B
44			ピット	製塙土器口あり	土師器（中世～）皿、製塙土器	13B
45			ピット		土師器（中世～）皿	13B
46			ピット		土師器（中世～）縁片	13A
47			ピット		土師器（中世～）皿	13A
48	SB130d		ピット		土師器（中世～）皿、須恵器（中世～）縁（束縛）、瓦器柄、釘	13A
49			ピット		土師器（中世～）皿、瓦器柄、国産陶器窓、不明鉄製品	12A
50	SK050	土坑			土師器（中世～）縁・甕・壺柄、須恵器（古代）甕、須恵器（中世～）甕（束縛）、瓦器柄、輸入青磁碗、国産染付碗・甕・色絵窓、国産陶器・甕・直・蓋・熊・壺・漆・壺・謝・土瓶、皮・桃核	14A
51			溝		土師器（中世～）皿・蓋	13A
52			ピット		土師器（中世～）皿	13A
53		土坑			土師器（古代）甕、土師器（中世～）皿、瓦質土器縫跡、国産染付碗・甕・直・蓋・壺・漆・漆器	12A・B
54	SB130e		ピット		土師器（中世～）皿、瓦器柄・皿、砾石	14A
55		土坑	深さ 5cm		土師器（中世～）皿、須恵器（古代）蓋	13B
56	SK056	土坑			土師器（中世～）皿・蓋・台付皿・白色土器（皿）、須恵器（古代）杯・甕、須恵器（中世～）甕（束縛）、瓦器柄、瓦質土器縫跡、国産染付碗・甕・直・蓋・壺・漆・漆器	12A・B
57		土坑	近世		土師器（中世～）皿・蓋、須恵器（古代）杯、須恵器（中世～）縁（束縛）、瓦器柄、瓦質土器縫跡、国産陶器窓	12B
58			ピット		土師器（中世～）皿	11A
59			ピット		土師器（中世～）蓋	11A
60	SK060	土坑			土師器（中世～）皿・蓋、瓦器柄、平瓦・丸瓦、副輪	12A
61		土坑			土師器（中世～）皿・台付皿、黑色土器 A 級輪、国産陶器山茶樹	13B
62			ピット		土師器（中世～）皿・壺土	10A
63			ピット		土師器（中世～）皿・瓦器片	10A
64		土坑	中世後期		土師器（中世～）皿・蓋、瓦器縁・平瓦	10・11A
65		土坑	中世末		土師器（中世～）皿・蓋、須恵器（中世～）縁（束縛）、瓦質土器縫跡・甕、国産陶器窓	10A
66		土坑	中世後期		土師器（中世～）皿、須恵器（中世～）縁（束縛）、瓦器柄・皿（コースター）、国産陶器窓・甕、丸瓦	11A
67		土坑	近世		土師器（中世～）皿、瓦器柄、国産陶器窓・壺縫跡	12B

表 19 検出構造および出土遺物一覧（3）

S番号	遺構番号	層位	種別	所見	出土遺物	地区
68	SB130c		ピット			12A
69			ピット			14A
70	SK070	灰褐色 淡灰砂	土坑	水晶出土	土師器（中世～）皿、瓦質土器鉢・風炉、国産陶器甕・甌（縦前）・縦鉢。水晶片	10A
					土師器（中世～）皿・釜、須恵器（古代）杯、瓦質鉢、瓦質土器鉢	
					土師器（中世～）皿、瓦質碗、輸入白磁碗、丸瓦	
71	SE071	黒灰土 褐砂 灰粘	井戸		土師器（中世～）皿、瓦質碗、輸入白磁碗、丸瓦	14A
					土師器（中世～）皿・釜、須恵器（中世～）鉢（束腰）、黑色土器A類碗、瓦質碗、輸入白磁碗	
					土師器（中世～）皿・釜、須恵器（中世～）鉢、瓦質碗	
72		土坑		堆山ブロックを埋土とする	土師器（中世～）皿、瓦質土器鉢、輸入陶器甕、国産陶器甕	13B
73		溝	11C 中堀		土師器（中世～）皿、黑色土器B類碗	12・13A
74	SB130b		ピット		土師器（中世～）皿・釜、輸入白磁碗、焼土	11A
75		土坑	16C 後半		土師器（中世～）皿・釜、瓦質土器鉢・土甕、輸入白磁皿、国産陶器甕、平瓦・丸瓦、埴土	11A
76				欠番		
77			ピット	13C 平ば	土師器（中世～）皿、国産陶器甕、平瓦、埴土	11A
78			土坑		土師器（中世～）皿、須恵器（古代）杯・壺・旗、黑色土器A類碗、瓦質碗	11A
79			ピット		土師器（古代）杯、土師器（中世～）皿・白色土器（獨白）、須恵器（古代）甕、黑色土器A類碗・B類碗・瓦質碗、平瓦・丸瓦	11A
80		溝		堆山ブロックで埋め戻す	土師器（中世～）皿・釜・蓋・碎片・白色土器（碗）、黑色土器A類碗、瓦質碗・皿、瓦質土器（中世）、國產白磁皿、國產瓷胎甕、國產陶器甕・常滑焼・縦鉢・軒平瓦・平瓦	8・12A・B
81			ピット		土師器（中世～）皿	10A
82		土坑	14C 後半		土師器（中世～）皿、瓦質碗・皿、瓦質土器鉢・火灸、国産陶器甕	11A
83	SP083		ピット		土師器（中世～）皿、瓦質碗、国産陶器甕、平瓦・瓦瓦	9A
84		溝	奈良時代？		須恵器（古墳）罐片	13A
85		土坑			土師器（中世～）皿、須恵器（古代）甕・片、国産陶器甕片	11A・B
86		土坑			土師器（中世～）皿、国産陶器甕	11B
87		土坑			土師器（中世～）皿、須恵器（中世～）甕・旗、輸入白磁碗	9A
88			ピット		土師器（中世～）皿、瓦質碗、釘	8A
89			ピット	奈良時代？	土師器（中世～）皿、丸瓦	7・8A
90	SK090	褐砂 灰砂	土坑		土師器（中世～）皿、須恵器（古代）蓋、須恵器（中世～）鉢（束腰）、輸入白磁碗、輸入青白磁盤、平瓦・瓦片・灰片	11・12A・B
					土師器（中世～）皿・釜・白土器（碗）、須恵器（古代）杯・瓦質碗、瓦質土器鉢・盆・風炉・蓋、輸入青白磁碗、輸入白磁碗、国産陶器甕・平瓦・丸瓦	
					土師器（古代）高杯、土師器（中世～）皿・竹付皿、瓦質土器鉢、輸入青白磁碗、輸入白磁碗、国産陶器甕・盆・須恵器（信楽）、鉢（古窯）、平瓦・丸瓦	
91			ピット	深さ 5cm	土師器（中世～）皿	7・8A
92			ピット	15C、深さ 5cm	土師器（中世～）皿・釜、瓦質土器不明、輸入染付碗、平瓦	7・8A
93		土坑	15C		土師器（古代）高杯、土師器（中世～）皿・竹付皿、瓦質土器鉢、輸入青白磁碗、輸入白磁碗、国産陶器甕・盆・須恵器（信楽）、鉢（古窯）、平瓦・丸瓦	8A
94	SK094		土坑		土師器（中世～）皿・釜、須恵器（古代）甕・壺、須恵器（中世～）甕（束腰）、瓦質碗・皿、瓦質土器鉢・盆・輸入青白磁碗、国産陶器甕・盆・須恵器（信楽、福島）、砾石、平瓦・丸瓦、土製印板、炭	8A
95		土坑	13C 平ば		土師器（古代）高杯、土師器（中世～）皿・台付皿、須恵器（古代）甕・瓦質碗・皿、平瓦	9A
96		土坑	深さ 5cm		土師器（中世～）釜、瓦質土器瓶、国産染付碗、国産陶器甕・縦鉢、平瓦	9A
97		土坑			土師器（中世～）釜、国産染付碗、国産陶器甕	9A
98		土坑			土師器（中世～）皿、国産染付碗、国産陶器甕	5・6A

表 20 検出遺構および出土遺物一覧 (4)

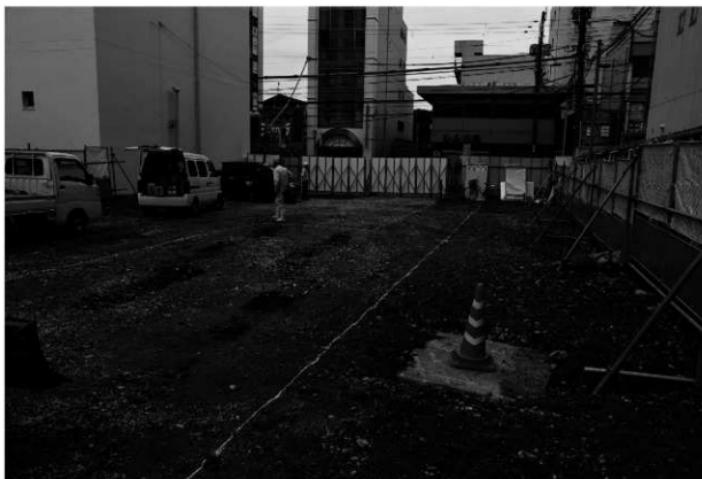
S番号	遺構番号	層位	種別	所見	出土遺物	地区
99	SK099		土坑	大正年間以降	土師器（中世～）皿、国産白磁器、国産染付桜・皿、国産陶器群・皿・束縛・骨・熊フクシ（骨）	SA・B
100	SX100		池底遺構 墓末傾破跡した瓦五聯に含む 灰粘 廻灰粘 溝部分		土師器（中世～）皿・直・蓋・高杯・台付皿・白色土器（高杯）・繩目・波瀬跡（古墳）焼、銀鏡（古代）焼、灰陶壺器類、瓦器類、瓦質土器類、輪入青磁器、輪入白磁器、国産白磁器・蓋・香炉、輪入足付杯・皿、国産染付桜・皿・蓋・熊・仏壇・植木鉢・色染器・色絵器・色絵土器、国産陶器群・皿・蓋・盤・磁器・盆・器・土器・水差・花瓶・火打石・軒平瓦・軒丸瓦・平瓦・丸瓦・埴瓦・磚・道具瓦・瓦・土製人形・釘・網眼・側面陶具金具・不明鉄器品・ガラス・貝殻・動物骨・漆瓶	12ライン 以西
101			ピット		土師器（中世～）皿	SA
102			土坑	1BC 後半	土師器（中世～）皿・蓋・焼、瓦質土器群・柄・国産染付桜・皿・蓋・繩目・輪・平瓦・丸瓦・釘・不明鉄製品・從士・炭	6・7A
103	SK103		土坑		土師器（中世～）皿・釜・瓦質土器十能・輪入青磁器・蓋、国産染付桜・皿・平瓦・丸瓦・埴	9A
104			ピット		土師器（中世～）皿、国産白磁土器・丸瓦	8A
105			土坑	1BC 前半	土師器（中世～）皿・釜・蓋・燒、土器（古代）焼、須恵器（中世～）鉢（束縛）、瓦器類・平瓦・丸瓦・釘・不明鉄製品	8A
106			ピット		土師器（中世～）皿	8A
107			土坑	合わせ口土師皿出土	土師器（中世～）皿・須恵器（古代）杯・瓦器碗・燒土	8・9A
108	SB140a		ピット		土師器（古代）鉢	13B
109	SB140f		ピット			13B
110	SX110		石室 石組土坑		土師器（中世～）皿・釜・須恵器（古代）焼・須恵器（中世～）鉢（束縛）、瓦器類・瓦質土器群・深鉢・土質・瓦器・輪入青磁器・輪入染付桜・小柄・国産陶器品・平瓦・丸瓦・釘・不明鉄製品	9A
111	SB140e		ピット		土師器（古代）杯・蓋・須恵器（古代）蓋・瓦器碗	12A
112	SB140d		ピット			12A
113	SB140c		ピット		須恵器（古代）椀・杯	11A
114			土坑	深さ 5m 余良時代の整地層で埋められた自然地形	土師器（中世～）皿・須恵器（古代）焼・須恵器（中世～）皿・須・蓋・高杯・台付皿・須恵器（古代）焼・須・須器（中世～）鉢（束縛）	13・14B
115	SB140b		ピット		土師器（古代）皿	11B
120	SE120	井戸	昭和土		土師器（中世～）皿・釜・須・蓋・高杯・台付皿・須・須器（中世～）鉢（束縛）・蓋（束縛）、瓦器碗・皿・ミニチュア器・輪入白磁器・国産染付桜・国産染付桜・蓋・盤・繩目・輪・平瓦・丸瓦・昭和・網眼・輪入白磁器・國産陶器品・灰・灰陶壺器・黒色土器・類・須・蓋・盤・蓋・輪入白磁器・國産染付桜・國産染付桜・蓋・石・石鍋・平瓦・丸瓦・不不明鉄製品・從士・炭・動物骨・漆瓶片	5・6A
			廻灰土			
			黑粘			
			黑粘下			

表 21 検出遺構および出土遺物一覧（5）

S番号	遺構番号	層位	種別	所見	出土遺物	地区
120	SE120	間離砂	井戸		土師器（中世～）皿、須恵器（中世～）鉢（束縛）、瓦器碗、輸入白磁碗、輸入青白磁碗	5・6A
130	SB130		建物	S-6・11・16・48・54・68・74 鎌倉時代		11～16A・B
140	SB140		建物	S-108・109・111・112・113・115 奈良時代		11・12A・B
150	SD150	黄褐色土 暗灰土	溝	奈良時代以前	土師器（古代）桶・皿・罐片、須恵器（古代）壺・甕、平瓦 古式土師瓶甕・甕	10～12A・B
北壁 17 埋			14C		土師器（中世～）皿、須恵器（古代）杯、須恵器（中世～）甕（束縛）、瓦器碗、 国産陶器甕	
北壁 17 埋直下のビット					土師器（中世～）皿、瓦	
廻丸					土師器（中世～）皿、蓋	
表土					土師器（古代）甕、土師器（中世～）皿・蓋、須恵器（古代）杯、瓦器碗、 瓦質土器碗・土壺・捏糰、輸入青磁碗、国産青磁碗、国産白磁小杯、輸入馬 踏雙線輪、国産笠付碗・皿・小杯・蓋・小柄・色鉢碗、国産陶器碗・皿・蓋、 甕・蓋・壺・瓶・瓶・瓦・瓶木跡・軒丸瓦・平瓦・丸瓦。瓦、不明瓦製品、 埴土・南ブラシ（骨）	

写真図版

図版 1



調査前風景（東から）



遺構検出状況（西から）

図版 2



全景（東から）

図版 3



全景（西から）

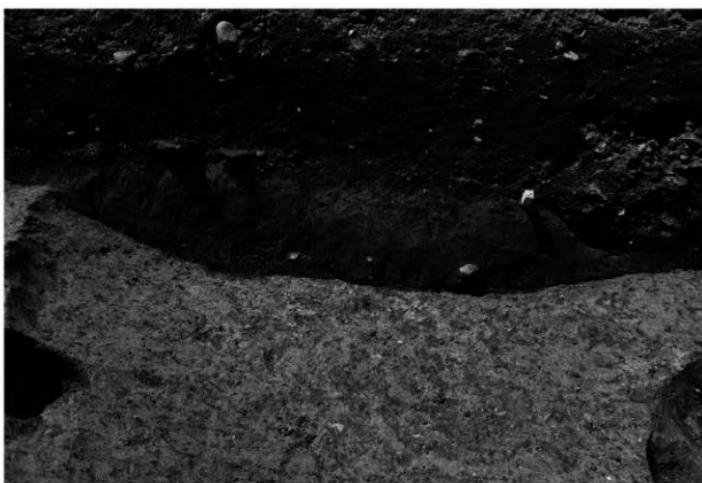


完掘状況（南西から）

図版 4



拡張部全景（西から）



SD020 土層断面（北から）

図版 5



SD150 黄褐土除去後礫検出状況（南西から）



SD150 完掘（南から）

図版 6



SB130e 土層断面（東から）



SD001 土層断面（南から）

図版 7



SD001 完掘（南から）



SD040 土層断面（東から）

図版 8



SE071 土層断面（南から）



SE071 完掘（北から）



SE120 土層断面（東から）



SE120 完掘（西から）

図版 10



SK013 土層断面（東から）



SK060 完掘（東から）



SK070 土層断面（南から）



SK090 土層断面（北から）

図版 12



SK094 土層断面（南東から）



SK094 完掘（北から）



SK103 土層断面（南から）



SX110 土層断面（南から）

図版 14



SX110 完掘（南から）



SK050 土層断面（南から）



SX100 土層断面 a-a' (東から)



SX100 土層断面 b-b' (東から)

図版 16

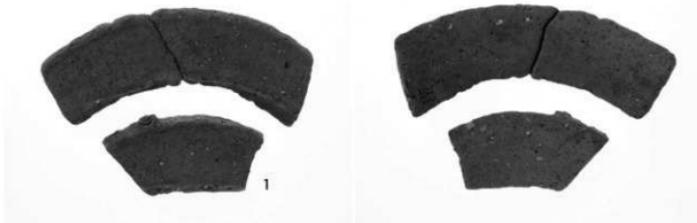


SX100 護岸検出状況（西から）



調査後風景（西から）

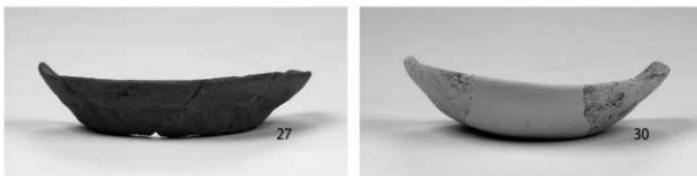
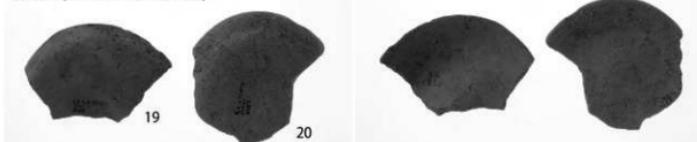
SD020 (1)



SD150 (7)



SD001 (19・20・23・25・30)

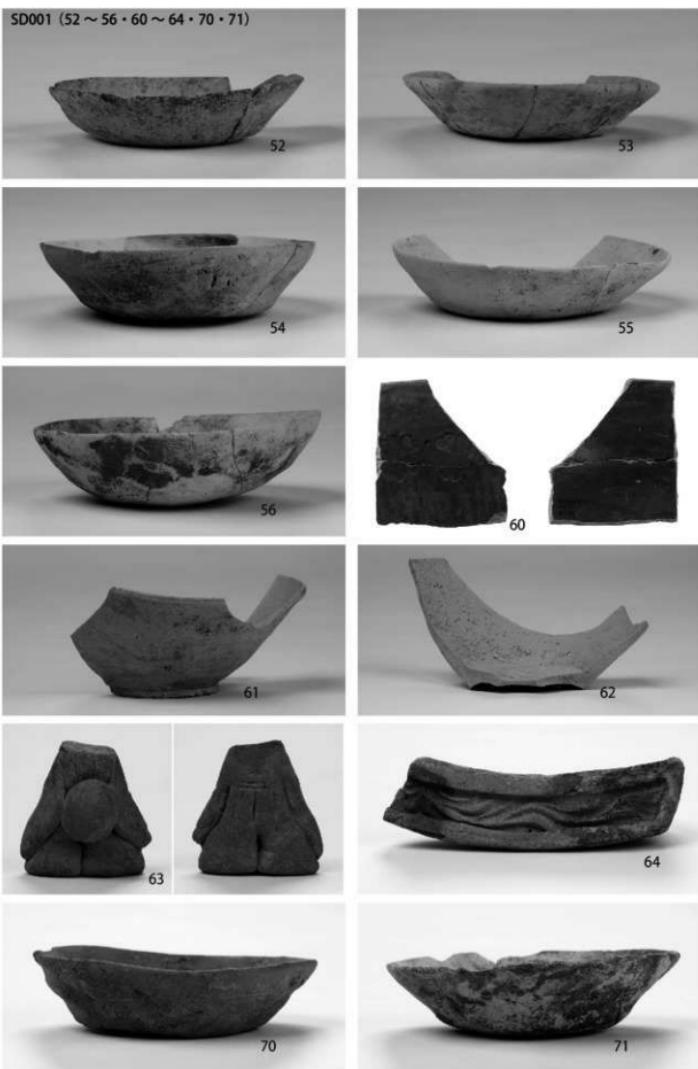


図版 18

SD001 (34 ~ 38 • 44 ~ 46 • 51)



SD001 (52 ~ 56 • 60 ~ 64 • 70 • 71)



図版 20

SD001 (73)



73

SE071 (82 ~ 84 • 97 • 100 • 103)



82

83



84



97



100

103



SE120 (106 • 107)



106

107



図版 21

SE120 (113・114・116～119・121・123・124)



113



114



116



117



118



119



121



121 上



121 下



123



124

図版 22

SE120 (125・128・129・132～134・139・142・145・146)



125



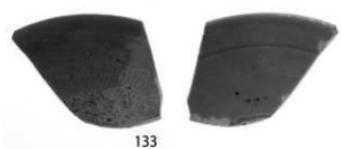
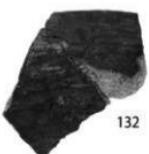
128



132



129



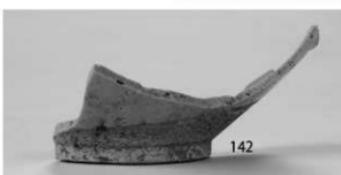
133



134



139



142



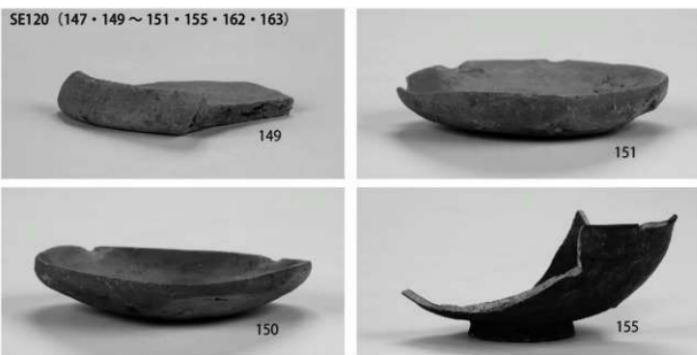
146



145



SE120 (147・149～151・155・162・163)



図版 24

SE120 (164・165・171・177・178)



164



171



165

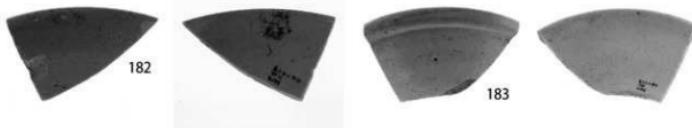


177

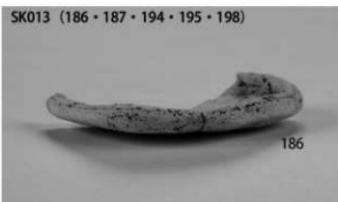


178

SE120 (182・183・185)



SK013 (186・187・194・195・198)



SK070 (219)

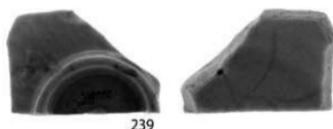


SK090 (223)



図版 26

SK094 (228 ~ 230 + 237 + 239 + 240)



SK103 (243 ~ 246)



243



244



245

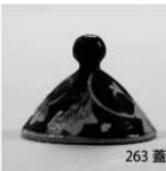


246

SK050 (263)



263



263 蓋

SK099 (268)



268

図版 28

表土 (269)



報告書抄録

平城京左京三条六坊十一坪
奈良町遺跡（HJG9次）

—令和元年度発掘調査報告書—

2021.3.31

（発行・編集）公益財團法人 元興寺文化財研究所

（印刷）共同精版印刷株式会社